135.48-R76-3ウ
1200500726299
13548
(6
2)
693—693

懺悔錄

中卷

ルソオ著
石川戯庵譯

碧波書店

始

135.48 287
R76-3
(2)
R76-3
(2)

岩波文庫

693—695

懺悔錄

中卷

ルソオ著
石川戲庵譯

岩波書店

ルソオ懺悔錄 第二部

國立圖書館
昭和 23.5.18
購入

第七卷

一七四一・

二箇年間の沈默と隱忍との後、自分の決心には背くけれども、私は復たペンを執る(一)。讀者よ、私に今ペンを執らせる理由を判斷することは中止し給へ。この本を通讀した後でなくては、諸君はそれを判斷することが出來ないだらう。

(一) 第六卷は一七六七年にトリイで脫稿。本卷は一七六八年にモンカンで起稿。

平穩な私の青春期が、平坦で相應に愉快な生活の中に、大した災難もなく、又大した光榮もなくて過ぎ去つたことは諸君の見られる通りである。この平凡は、おもに私の熱烈で而も氣の弱い性質の仕業である。急き込んで仕事を企ててはるが、すぐにうんざりして了ふ。はずみで靜止から飛び立ちはするが、疲勞と持前とで復た靜止に還る。大きな德行からは遠く離れ、大きな惡德からは尙遠く離れた、是こそ自分の柄に合つてゐると思はれるやうな閑散で物靜かな生活へ、いつも落ち着くに極まつてゐた。私は善惡共に大きな事を仕出來し得る者ではなかつた。

さて是からどんな變つた光景を私が展開させることだらう。三十年間、私の天性に迎合して來た運命は、後の三十年間に、それと逆行した。そして人々は、私の境遇と性向との間の斯うした

不斷の軋轢から、重大な過失や、稀有の不幸や、又逆境を飾る諸德――但し力は別として――が生れて來るのを見るだらう。

此の作の第一部は、全く記憶から書いたもので、隨つて誤謬も多い譯だつた(一)。第二部も同じく記憶に據る外はないから、誤謬も更に甚だしいことと思ふ。無邪氣と平穩とに過ごした樂しい幾年の甘い記憶は、樣々な愉快な印象を私に殘してくれた。私は絕えずこれを喚び起すことを喜んでゐる。やがて讀者は私の後年のそれらが、どんなに異つたものであるかを見るだらう。それらを喚び起すことは、取りも直さずその苦味を新たにするに外ならない。斯うした悲しい再現に依つて、自分の境遇の苦味を强くする代りに、私は出來得る限りそれを避けるやうにした。すると屢々それが巧く行つて、必要な場合でもそれが思ひ出せない位になつた。斯う都合よく自分の不幸が忘れられるといふことは、他日運命がうんと私に背負はせようとする不幸に對して、天の與へた一つの慰藉である。ただ樂しい事物のみを辿る私の記憶は、ただ痛ましい未來のみを豫想する怖ぢ氣のついた私の想像に取つての幸福な埋め合せである。

(一) 僅かに年月の些少な思ひ違ひがある位で、大した誤謬といふやうなものは本書にないといふことが保證されてゐる。

この著作をするに就いて、記憶の缺けた處を補ひ且手がかりとするために、集めて置いた一切の書類は、他人の手に渡つて最早自分の手には還つて來ないだらう。私には唯一つ信用するに足る忠實な案內者がある。それは感情の連鎖である。これが私の生涯の變遷を明かにし、それに依

つて其の原因又は結果であつた事件の推移を明かにするのである。私は、不幸はすぐに忘れて了ふが、過失は忘れることが出來ない。美しい感情は尙更忘れるといふことがない。然うした感情の記憶は、永く私の心から消え去るには餘りに貴いものである。私は事實を書き漏らしたり、顚倒したり、時日を間違へたりするかも知れないが、自分の感じたことや、自分の感情が本となつてしたことは、萬々間ちがへないつもりである。而もこれが重大なことなのだ。私の懺悔錄の元來の目的は、生涯中のいろいろな境遇に於ける心狀を嚴密に語ることである。私の書かうと思つたのは自分の心の歷史である。だから、それを忠實に書くのに何も追懷の必要はない。今までも然うして來た通り、唯自分の內心を顧みる丈で十分なのである。

だが茲に幸ひと六七年間の事に就いては、ヂュペルウ氏(一)の手にある原稿から寫し取つた書簡の一束に正確な參考資料がある。この書簡は一七六〇年までで終つてゐるが、私の仙居(二)での滯在や、私の自稱友人達との大喧嘩の時代の全部が此の間に含まつてゐる。これが私の生涯の記憶すべき時期で、他のあらゆる不幸は皆此の時に釀されたものである。それよりももつと新しい、數は少いが私の手に殘る筈の原の儘の手紙は、彼の書簡集――あまり浩瀚に過ぎてアルギュウス(三)どもの見張を逃れる見込のありさうもない――書簡集の後へ寫し込まないで、此の著作の中へ引用することにしよう。それが自分の利益になつても不利益になつても、或る解明を與へるものと認めた時には然うしよう。讀者が、私の懺悔錄を書いてゐることを忘れて、自分の辯解をしてゐるやうに思はれる心配を、私は持たないからである。併し、その引用が私の利益となつてゐる

やうなことがあつても、私が眞實を僞つてゐるやうに解つてはいけない。

(一) 既出。著者晩年の親友。

(二) Hermitage. エピネ夫人がルソオの隱栖にとて、モンモランシの谷間に建てて與へた小別莊。詳しく第八卷の末近くに出る。

(三) 希臘神話。油斷も隙もない見張番。

とにかくこの第二部は、第一部と比べて、同じ眞實を語る外に似た點は少しもない。又事實の重大といふことを外にしては、彼に優る處もない。それを除けば、凡てが第一部より劣るばかりである。第一部はウットンなり、或はトリイ(一)の城内で、緩々と樂しく喜んで書いたもので、喚び起さなければならなかつた追憶のすべては、やはり同じ新しい享樂であつた。私は絶えず新しい快樂を以て當時に立ち還り、遠慮無しに心の行くまで推敲を重ねることが出來た。今日は記憶も頭腦も弱り切つて、何事も碌に出來はしない。唯餘儀なく、困苦に心を痛めつつ此の仕事に取りかゝるのである。此の仕事は不幸と離反と不信と、及び悲しく痛ましい追憶とのみを私に見せつける。私の述べなければならぬことを、悉く時の暗黑(くらやみ)の中に葬つて了ふことが出來るものなら、私は何物に換へても然うしたい。そして心にも無く語らなければならなくなつてゐながら、尙私は隱れ忍んで、策を弄して、人を瞞す工夫をして、殆ど自分の天性と相容れないやうな事に、己を引下げなければならないやうな目に遭つてゐるのである。私の頭上の天井には眼がある。周圍の壁には耳がある。惡意を抱いた、警戒を弛めない探偵や見張に取り圍まれて、私は不安でそはそはしながら、滅裂な二三の文句を走り書に書く。だから修正は拠置き、讀み返す暇も無いくら

ゐだ。絶えず私の周圍に大仕掛な柵を繞らして置きながら、何處かの隙間から眞實が洩れて出はしないかと、始終彼等の心配してゐるのが私に解る。此の眞實を世に洩すにはどうすればいいだらう。成功は覺束なくとも私はそれを試みる。こんなところから氣持の好い畫を描き出して、それに人を惹き附けるやうな色彩を施すことが出來るものだらうか。だから私は讀み始めようとする人達に斷つて置きたい、若し一個の人間を知り盡したいといふ熱望と、正義、眞實を眞劍に愛する心とが無かつたら、讀んで行つて、とても退屈せずにはゐられないだらうと。

(一) コンチ公の所領で、ウウル縣ジゾオル市の附近、巴里から十五里の處にあつた。

第一部では私が、シャルメットで最後の空中樓閣を築き、その新しい記譜法を幸運その物と思つたので、やがて寶を得て、心を入れ替へた母の足元へ持ち歸る考で、あとに心を殘しながら、しぶ〳〵巴里に立つたといふ處で筆を擱いた。

私はしばらく里昂(リヨン)に滯在して、知人を訪問したり、巴里への紹介狀を貰つたり、提げて來た幾何學の本を賣り拂つたりなどしてゐた。人々は好く待遇(もてな)してくれた。マブリ氏夫妻は、再會の喜を見せて、幾度も會食に招いてくれた。此の家でマブリ師(一)と親近(ちかづき)になつた。前にコンヂャック師とは近づきになつてゐたが、二人ともその兄弟を訪ねて來たのであつた。マブリ師が巴里への紹介狀を幾通かくれた中に、フォントネル氏宛のと、ケリュウス伯爵(二)宛のとがあつた。何れも私の會心の友となつたが、取り分け讀者は、死際まで友情を渝へなかつたのみならず、會ふ度に必と良い事を聞かせてくれた。私はもつとよくその言葉を利用すべきであつた。

(一) Gabriel Bonnet de Mably. 初め外交家、後史學、哲學に移つた。著書數多あるうちに、*Principes des lois;* *Principes de morale* が有名である。ルソオと同じく文藝を以て頽俗の具と做し、又專制王政に反對した。一七〇九―一八五。

(二) Comte de Caylus. ケリュウス侯夫人の息。巴里に生る。アカデミイ會員。考古學者として名を得た。一六九二―一七六五。

私はボルド氏(一)にも再會した。此の人とは久しい間の知合で、度々心底から喜んで私の爲に盡してくれたものだ。今度も前と少しも變らなかつた。書物を賣るやうにしてくれたのも此の人だつた。又自分はもとより、他人へも賴んで、巴里へのいい紹介狀を與れた。その紹介で長官にも會つた。此の人から、その時里昂を通りかかつたリシュリュウ公爵(二)へ近づかれるやうにして貰つた。パリュ氏が私を公爵に引き合せてくれた。リシュリュウ氏は丁寧に私を迎へて、巴里へ訪ねて來るやうにと言はれた。で、私は度々訪問はしたが、後に屢々話す通り、此の高貴な知己は私に取つて何の役にも立たないものであつた。

(一) Charles Bordes. 里昂アカデミイ會員。詩を巧にした。一七八一年歿。

(二) 元帥公爵。此の第七卷の半ば過ぎに再び出る。

音樂家のダヴィドにも再會した。この人には、前の旅行の時に、非常に困つて助けられたことがある。私は彼から帽子と靴下とを借りてゐた。寧ろ貰つてゐた。その後幾度か遇ふには遇つてゐながら、返した事もなければ、向うから催促もしなかつたのだ。それでも私は後に、大抵同じ値段の贈り物をして置いた。私は此處で、自分のしなければならなかつた事を話すのだつたら、もつ

と立派に言ふ筈だが、今は私のした事を話すのだから、同じやうな譯に行かないのを遺憾に思ふ。

私は又上品で寛大なペリション(一)に遇つて、何時もの彼の鷹揚さを感じないでゐられなかつた。彼は前にハイカラなベルナアル(二)に與へたのと同じ贈り物を私にくれ、馬車賃も拂つてくれたからだ。私は又無類の善人で無類のやり手である外科醫のパリゾに會ひ、その愛妻のゴドフルワにも會つた。彼女は夫と連れ添つて十年にもなる。人物の淑やかなのと、溫情とが何よりの長所だつた。併し彼女に接して氣の毒と思はない者はなく、又彼女と別れるのに悲しまない者はなかつた。肺病が重くなつてゐたからだ。彼女は間もなくその爲に死んだ。人間の本當の性向は、その人の愛着するものが一番よく證明するものである（原註。但し、その人が最初に選擇を誤るか、或は相手の性格が、世にある例の如く、何等か特別の原因の爲に一變するかした時は別だ。若し無條件に此の關係を是認しようとすれば、ソクラテスをその妻のグザンチップ(三)で判斷し、ヂョンを其の友のカリビュウス(四)で判斷しなくてはならない。是より甚だしい不正な、眞實に遠い判斷はあるまい。併し今此處で私の妻(五)に對して不當な適用をすることは止めて欲しい。なる程彼女が知識が乏しくて瞞され易いことは私も意外とする位であるが、その美しい、すぐれた惡氣のない性格は、私の尊敬を集めるに足り、私の生きてゐる限り然うあるだらう）。此の淑やかなゴドフルワを見ると、善良なパリゾを知ることが出來たのである。

(一) Camille Perrichon. 前里昂市長。

(二) Pierre-Joseph Bernard, *L'Art d'aimer* 及びその他の纖愛詩の作者。一七一〇―七五。

(三) 鋏鞘で聞えたソクラテスの妻。

(四) シラキユウズの名將ヂヨンの友人。陰謀によつてヂヨンを刺殺し、己も亦後にその同じ劍で刺されて斃れた。プリユタルク「英雄傳」に詳しい。

(五) テレエズといふ女のこと。やがて詳しく出る。

私は是等のいい人達に世話を掛けた。その後私はそのいづれをも疎略にした。決して忘恩からでは無いが、時に忘恩とも見える、例の困つた私の不性からである。世話になつた感謝の情は、決して心から消えたのではなかつた。唯その感謝の情を事實に見せるよりも、くど〳〵と言葉で示すことが私には一層辛かつたのである。几帳面に手紙を書くことは、私の力では出來ない事だつた。無理に書かうとしかけても、直ぐにその罪を繕ふ恥かしさと當惑さとから、尙罪が重いものやうに思はれて、もう全く書かなくなつた。私はそんな譯で沈默したのだが、それがその人達を忘れてゐるやうに見せた。それをバリゾもペリシヨンも氣にさへ留めなかつた。で、彼等は何時會つてみても同じやうだつた。併し、さすがの才人も、疎略にされたと氣がつくと、その自尊心が何處まで復讐心を起させるものかといふことは、二十年の後にボルド氏に於いて見られるだらう。

里昂を去る前に、私は其處で曾て無い嬉しい再會をして、ごく懷かしい印象を殘した一人の可愛い女性を忘れてはならない。それは第一部で話したセエル孃である。此の女とマブリ氏の家にゐた時にも舊交を溫めたことがある。今度の旅行にはもつと餘暇があつたから、もつと度々會つた。私は彼女に戀をした、而も烈しく戀をした。私は彼女も自分に反對でないと考へることが出

來た。併し彼女が私に信頼の意を表したので、それを濫用しようといふ心を私から奪つて了つた。彼女は何一つ持つた物がなかつた。私とても同樣である。二人の境遇は、同棲するには餘りに似過ぎてゐた。その上、私には熱中する目的があつて、結婚といふことを考へるどころではなかつた。その話に依ると、ジュネエヴといふ年若な商人が、彼女と一緒になりたがつてゐるらしいとのことだつた。私は其の男とは一二回女の家で會つた。正直さうな男で、世間からも然う見られてゐた。此の男と一緒になれば女も仕合せだと思つて、私はその結婚を望んだ。彼は後にその通りにした(一)。で、二人の無邪氣な戀の邪魔をするでもないと思つて、此の美しい女のために祝福しながら、私は出發を急いだ。が、その祝福もなさけないかな、此の世では暫くの間しか驗が無かつた。あゝほんの暫く！　結婚して二三年目に、彼女が世を去つたといふ事を後で聞き知つからだ。旅行の間を通して切なる哀惜の情に充たされながら、私は義務のため德義のために捧げる犧牲は苦しいものでも、その犧牲が心の底に殘して行く懷かしい思ひ出に依つて、十分に償はれるものだといふことを感じた。その以後もこの事を思ひ出しては屢々然う感じた。

(一) 事實セエル Mlle Suzanne Serre は一七四五年一月二十六日にジュネエヴ Jean-Victor-Genève といふ男と結婚し、後二兒を擧げた。セエルの生歿は一七二六―一七四八(?)。

前回の旅行で不利な一面から巴里を見たやうに、今度は立派な一面から巴里を見た。たゞ私の宿屋ばかりは然うでなかつた。ボルド氏の名指しで、私はソルボヌに近いコルヂエ町のサン・カンタン旅館に泊る事にしたが、穢い町の穢い宿屋の、穢い室であつたからだ。でも此處は、グレ

セだのボルドだの、マブリ師、コンヂヤック師などを始め、その外に澤山立派な人達の宿泊してゐた處だつたが、もう生憎誰にも遇へなかつた。唯一人、ボヌフォンといふ跛足の田舍紳士で、訴訟好きの、いやに修辭家ぶる人を見出した。そのお蔭で、現在私の友人の中で一番年長のロガン氏(一)と親しくなり、その又お蔭で、哲學家のヂドロとも相識になつた。ヂドロの事はやがて幾度も話す折がある。

(一) Daniel Rogin. イヴェルドンの人。一六九一―一七七一。

巴里へ着いたのは一七四一年の秋であつた。現金百五十圓と、自作の喜劇「ナルシス」と、新案の記譜法とが唯一の財產なのだつたから、それを役立てるために、私はぐづ〳〵してはゐられなかつた。私は紹介狀を利用することを急いだ。相當の風采をした何か技の出來さうな青年が巴里へ出て來れば、大抵は引き立てて貰へる。私もそれであつた。大した事はなかつたが、幾分の便宜は得られた。紹介された中で、三人が有用な人だつた。サヴワの貴族で當時主馬頭だつたダムサン氏、此の人はカリニャン公爵夫人の嬖人であつたらしい。アカデミイ考古學部の書記官で賞勳局長のボオズ氏(一)、それとエスイタ僧で「視覺的クラヴサン」の著者である神父カステル(二)である。ダムサン氏への外は、いづれもマブリ師の紹介であつた。

(一) Claude Gros de Boze. 里昂に生れ巴里に歿。一六八〇―一七五三。

(二) Louis-Bertrand Castel. エスイタの學僧で數學上の著書が數種ある。彼は色のクラヴサン Clavecin des couleurs を發明して音を視覺に訴へようと企て、これがためにヴォルテエルに「數學上のドン・キショット」と綽名を附けられたといふ事實がある。本文の著書はこれに關したものだらう。一六八八―一七五七。

ダムサン氏は私に二人の知人を紹介して、急場を救つてくれた。一人はボルドオ高等法院の裁判長で、ヴィオロンの巧いガスク氏。一人は當時ソルボヌに寄宿してゐたレオン師であつた。これは人好きのする貴公子で、一時はロアン士爵の名で時めかしたものだつたが、若い盛りに死んで了つた。此の二人は作曲を習ひたいといふ考を持つてゐた。私は數箇月間二人に稽古をしたので、盡きかゝつてゐた財布が幾らか持ち直した。レオン師は私を愛するやうになり、自分の祕書役にしようとした。が、彼は金持でないから、私に仕拂ふ俸給も、たかだか三百圓餘に過ぎなかつた。それでは衣食住の費用にも充てることが出來なかつたので、餘程殘念だつたが辭退した。

ボオズ氏は大層善く私を迎へてくれた。この人は學問を愛し、それを持つてもゐたが、少々ペダンチックだつた。その夫人は彼の娘とも云へるやうな女だつた。華やかで、氣取り屋だつた。私は時々此家で食事をした。凡そ私が此の夫人の前へ出た時ぐらゐの極りの惡さうな、間の拔けた恰好は出來るものであるまい。彼女の馴々しさに、私が居縮まつて了ふので、私の樣子がなほ可笑しく見えた。彼女が皿を私に薦めると、私はフォオクを窃と突き出して、その中の極小い一片を突つ刺して取る、そこで、彼女は私のにしてゐた皿を給仕に返して了つて、私の見ない方を向いてくすくす笑つた。此の田舍者の頭の中に多少の才智がないこともないのだとは、彼女は氣附きもしなかつたのだ。ボオズ氏はその友人のレオミュウル氏(一)に、私を紹介してくれた。この人は毎金曜日、卽ちアカデミイの科學部の會合日に、此の家で食事を共にした。彼はレオミュウル氏に、私の計畫と、それをアカデミイで審査に掛けて貰ひたいといふ私の希望とを話してくれ

た。レオミュウル氏はその提議を引き受けてくれた。それは受理された。定められた日に、私は此の人に案内されて行つて引き合せて貰つた。此の日即ち一七四二年八月二十二日、私は豫ねて此の目的のために準備した論文(二)を、アカデミイで朗讀する榮譽を荷つた。此の知名の會員達は、いふまでもなく晴がましかつたけれども、私はボオズ夫人の前ほども氣怯れはしなかつた。朗讀も答辯も相應にやつて退けた。論文は合格して、祝辭まで受けたので、嬉しくもあり意外にも思つた。私はアカデミイで、その一員でない者が、常識を失はないでゐられるものとは想像出來なかつたのである。指名された審査委員はメラン(三)、エロオ(四)、フシイ(五)の三氏であつた。いづれも碩學たちには相違ないが、一人として音樂を知つてゐる人はなかつた。少くとも私の案を審査し得る丈の知識もなかつた。

(一) René-Antoine Ferchault de Réaumur. 理科學者。列氏寒暖計の創製者。一六八三－一七五七。
(二) 「新記譜法案」 *Projet concernant de nouveaux signes pour la musique.*
(三) Jean-Jacques Dortous de Mairan. 數學者、物理學者。一六七八－一七七一。
(四) Jean Hellot. 化學者。一六八五－一七六六。
(五) Jean-Paul Grand-Jean de Fouchy. 星學者。一七〇七－一七八八。

一七四二。

――以上の諸氏と討議を重ねて行く中に、私は、學者といふものは時に普通人よりは偏見の少いこともあるが、その代り、一層自家の偏見を固執するものだといふことを、意外に

も思ひ、確信もした。彼等の反駁の多くは如何にも薄弱で誤つたものであり、又實際私の答辯の仕方は如何にも臆病で下手ではあつたが、それでも確實な論據に立つてゐたのに、私は唯一度も自分を理解させ、彼等を滿足させることが出來なかつた。私はいつも、彼等が大袈裟な文句を借りて、私を理解せずに反駁を試みるその手輕さに驚かされた。彼等は、何處から聞き出して來たか知らないが、スウェッチとかいふ修道僧が、以前數字で音階を現すことを考案したことを知つてゐた。私の考案が斬新でないと主張するには、それ丈で十分だつた。或は然うも言へよう。何故ならば、縱し私はスウェッチといふ名前を耳にしたことがなかつたにしろ、又縱しオクタアヴといふ事を考にも入れないで易しい平音樂の七音を書き現す彼の方法が、到底、數字を借りて有らゆる音樂上の記號、スウェッチの想ひも及ばなかつた音部記號、休止符、オクタアヴ、小節、拍子、歷時などまでをも容易く書ける簡便な私の工夫と競爭するに堪へないものであるにもしろ、七音丈の卑近な現し方ではスウェッチが最初の發明者であつたといふ事は、間違のないことだからである。けれども委員達は、此の原始的な發明を度を超えて重大視しただけなら未だしもだが、私の方法の基礎について述べようとする時は、何時も理窟に合はないことばかり言つた。私の方法の最大の特色は移調と音部記號とを廢することであつた。だから同一の樂譜が、歌曲の首にある唯一の頭字を換へたと思ひさへすれば、何調にでも意の如くに記譜され移調されるのであつた。委員達は巴里の似而非音樂家から、移調に依る演奏は何の價値もないものだといふことを聞いて來た。彼等は此の說を本として、私の方法の一番の特色を、それに對する打破し難い難點にして

了つた。そしてその決議に曰はくには、私の樂譜は聲樂には適するけれど、器樂には適せずだと。當り前なら聲樂に適するのみならず、器樂には更に適すと決議しなくてはならない處なのだ。委員の報告に基づいて、アカデミイはお世辭たつぷりな證明書を私に下附した。その中に、實際アカデミイでは私の考案を斬新だとも有用だとも認めなかつたといふ意味が見えてゐた。私は、自分が此の事を世に訴へた「現代音樂論(1)」といふ著述を、そんな紙片で飾るべきものとは思はなかつた。

(1) *Dissertation sur la musique moderne.* 1743.

私は偶々此の事件から斯う氣附いた。たとひ其の見解は狹くとも、その問題に專心し、而も深い知識のある者は正當にその問題を批判することが出來るけれど、幾ら諸科の學に造詣が深くとも、その當面の問題に格段な研究を有しない者は、前者には及ばないと。私の考案に就いて試みられた唯一の確乎した駁論は、ラモオのそれであつた。私の說明の終るか終らない中に、ラモオは直ぐと此の案の弱點を看破した。彼は斯う言つた。

「あなたの記號は曆時を簡單に決定してゐるし、音程を判然現してゐるし、全音符はいつも二全音符の中で示してゐるし、在來の音符で出來なかつた點は皆大へんに結構です。併し、此の音符が頭腦を使はせる點はいけないと思ひます。頭腦はいつも、演奏の速さに隨いて行くことが出來ませんからね。」彼は尙續けた。

「普通の音符の位置は、別に頭腦を働かせないでも、すぐ眼に映ります。二つの音符の、一つにずつと高く、一つはずつと低くなつてゐて、その中間に連續した澤山な音符が列んでゐると、私共は一瞥した丈で、音度からその列び方を直ぐに了解することが出來ます。ところが、あなたの譜表で此の連續を了解するには、どうしてもその數字を一つ一つ拾つて行かなければなりません。一瞥が役に立たないでせう。」

此の駁論には語が返せないやうに思はれて、私は直ぐに服して了つた。その駁論は簡單で奇拔なやうだが、とても錬磨の功を積んだ者でなくては思ひ附かないことだ。して見ると、これがどのアカデミシヤンの心にも浮ばなかつたのは不思議でない。けれども、隨分いろんな事を知つてゐる碩學たちが、自分の專門外の事に批判を試みてはならない、といふことを知らないでゐるのが不思議だ。

私は此の委員達やその外のアカデミシヤンを屢々訪問したので、巴里文藝界のあらゆる知名の人達と交際が出來さうになつた。だから後に、私が急にその人々の仲間に加へられた時は、皆既に懇意になつてゐた。さて此の時は、私は專ら記譜法に氣を取られてゐて、是非共これで音樂上に革命を起し、名士といふやうなものになつてみたいと熱望した。巴里の藝術界では、名士には利得が屬き物なのである。二三箇月みつしり室內に閉ぢ籠つて、喩へがたい熱心さで、世に問ふつもりの著作、卽ちアカデミイで讀んだ論文を手入れした。困つたのは原稿を引き受けてくれる本屋を見出すことだつた。新活字を鑄造するのに金がかゝるのと、どの本屋も初舞臺を踏む者に金を注ぎ込まないとの爲だつた。が、私は原稿を書いてゐる間に喰つ麵包たの代を、この著作物

が辨償するのは當然過ぎることだと思つてゐた。

ボヌフォンが私に大キヨオ(1)を世話してくれたので、協議の上、私の單獨に費用を支辨する出版特許權は別にして、利益を折半にすることに取り極めた。此のキヨオの遣り方で、私はこの特許權に對して、金は費つたが、此の出版で一厘の金も取れないやうにして了つた。この出版については、十分普及させようといふデフォンテヌ師の約束があり、他の記者連の好評があつたにも拘らず、本の賣れ行は餘り捗々しくなかつた。

(1) G.F. Quillau père. 巴里の書店。

私の考案を實試するについて一番の障害は、若し此の考案が弘く認められなかつたら、それを學ぶ丈の時間を無駄にすることになりはすまいかといふことだつた。私はそれに答へて、私の樂譜の練習は、非常に見方を明瞭にするから、普通の樂譜で音樂を學ぶにも、私の樂譜から這入つて行けば、却つて時間の經濟になると言つた。その事を實例で證明するため、ロガン氏に紹介して貰つた亜米利加生れのルランといふ少女に無報酬で教へて見た。三月の中に、彼女はもう私の樂譜で、どんな曲でも讀めるやうになつた。餘りむづかしくない曲なら、本を開いて直ぐに唱ふのが却つて私より巧くなつた。驚く程の此の好結果も、知れ渡らなかつた。これが他人だつたら、此の記事で新聞を埋めたかも知れない。ところが私は有益な事物を發明する才を持つてゐても、それを吹聽する才は持つてゐなかつた。

エロンの噴水器は今度も斯うして壞れて了つた。併し今は私も三十歳になり、而も空しく人の

生きてゐない巴里の大道に立つてゐるのである。この窮地に在つての私の決心を聞いて驚くものは、此の自傳の第一部を精讀しなかつた人だけだらう。今迄にして來た私の努力は、無益でもあり過大でもあつた。私は一度休息がしたかつた。私は絶望には身を委ねないで、例の無爲と運命の攝理とに身を委ねた。そして運命に、その仕事をする時間を與へるため、殘つた金をぽつ〳〵費ひ崩して行くことにした。のん氣な娯樂の費用を削つて了はないでそれに制限を加へ、カフェエには二日に一度、芝居には一週に二回しか行かないことにした。娼妓に拂ふ金については、別に節減を加へることは要らなかつた。それは、生涯そんなものには一錢の金も使はなかつたからである、強ひて言へば唯一度あつたが、その事はやがてお話しよう。

私は此の怠惰で孤獨な生活を、三月と續ける丈の金を持ち合さなかつたが、それに耽つてゐる時の安心や愉悅や信頼は、私の生涯に於ける奇異な事件の一つであり、私の氣質の風變りな處でもある。多分他からも想像されてゐる私の非常な窮迫その事が、他人の中へ顏を出す勇氣を、私から奪ふ原因であつた。そして、人を訪問せねばならぬといふことが、その訪問を堪らないものにして了つた。それがため、既に巧く取り込んでゐたアカデミシヤンや、學者仲間をも訪問することを廢して了ふやうにさへなつた。マリヴォとマブリ師とフォントネル、時々私が訪問してゐたのは此の三人ぐらゐのものだつた。マリヴォには自分の作つた「ナルシス」の劇を見せさへした。それが彼の氣に入つて、わざわざ修正までしてくれた。ヂドロはその人達よりも若く、殆ど私と同じ年ぐらゐだつた。音樂が好きで樂理にも通じてゐた。二人はそれを話し合つた。彼は又

作物の腹案をも私に話した。さういふ譯から、すぐに二人の間には親交が結ばれて、十五年程も續いた。不幸にも、而も彼の失策から私が彼と同じ職業に身を投じなかつたら、多分もつと續いたかも知れなかつたのである。

私が餘儀なく麵包を人に乞ふやうになるまでに、この殘りの短い貴重な期間を何事に費したかは想像がつくまい。曾て私が百回も稽古をしてはすつかり忘れて了つた諸詩人の名句を諳記することに費したのであつた。毎朝十時頃、衣嚢にヴィルジルかルソオ(一)の本を押し込んで、リュクサンブウルへ散歩に出かけ、晝飯時まで其處で聖歌や牧人詩の記憶を新たにした。今日の處を讀んでゐる中に、昨日の所は大抵忘れてゐても落膽しなかつた。私は、ニシアスがシラキュウズでの戰敗の後、捕虜になつた雅典人等が、オメエルの詩を誦することに依つて生命を維いでゐたといふことを思ひ出した。生活難を豫防するための此の勉強から得た利益は、あらゆる詩人を諳記する事に依つて、幸福な記憶力を練るといふことであつた。

(一) 既出ジヤン・バチスト・ルソオ。

もう一つそれに劣らない確かな手段は、將棊であつた。そのために芝居に行かない日の午後は、極まつてモジイの家で過ごした。此處でレガル氏、ユソン氏、フィリドオル、その他當時高名の將棊の大家連と相識になつた。が、それで私は巧くはならなかつた。それでも終には彼等の誰もより上手になれることを疑はなかつた。そして、然うなれば十分生活費が得られるものと思つてゐた。どんなたはけた事に熱中しても、私はいつも同じ樣な論法を適用した。私は自分に斯う言

ロドチ

つた。「誰でも一藝に秀でた者は必と常に重んぜられる。何事でもいいから、第一流になつてやらう。俺はきつと重んぜられる。運は自然に向くだらう、その迹は自分の力次第だ。」此の子供染みた言は、理性の詭辯ではなくて怠惰のそれであつた。私は成業の爲にしなくてはならない過大な急速な努力に怖ぢ氣がついて、自分の怠惰に媚びることを力めた。そして怠惰の恥づかしさを、怠惰にふさはしい理窟を設けて强ひて見まいとしたのである。

斯うして私は靜かに持ち金の盡きるのを待つてゐた。カフェエに行く途中、私のちよいちよい立ち寄つた神父カステルが、若し此の昏睡狀態から私を救ひ出してくれなかつたら、私は財布の底を拂いて了つても平氣でゐたかも知れない。神父カステルは變り者だが、とにかく良い人で、私が何もしないで、段々金を失くして行くのを氣の毒がつてゐた。彼は斯う言つた。

「音樂家連も學者連も、みんな君の調子には乘つて來ないんだから、一つ絃を掛け變へて、女の方を向つて行つて見ちやどうだね。此の方面ならどうかすると成功するかも知れないよ。君の事はブザンヴァル夫人に話して置いたから、僕からだと言つて訪ねて見給へ。それや良い夫人さ。息子や夫の同鄕人には、喜んで會つてくれるから。娘のブロイユ夫人といふのも一緒にゐるが、才媛だぜ。もう一人デュパン夫人にも君を紹介しといたから、あの著作を持つて行き給へ。是非君に會ひたがつてるから、善くしてくれるだらう。何しろ巴里といふ處は女に縋らなくては何事も出來ない所なんだ。云はば女は曲線で、悧巧な男がそれの漸近線なのだ、男はぐんぐん接近しては行くけれど、決してその曲線に觸れはしない。」

一日又一日と此の苦役を延して置いたが、到頭私は勇氣を出して、ブザンヴァル夫人を訪問した。彼女は親切に迎へてくれた。ブロイユ夫人がその室に這入つて來たので、母親は、

「ちよいと、カステルさんのお話しのルソオさんですよ。」

ブロイユ夫人は私の著作に敬意を表し、クラヴサンの傍へ私を連れて行つて、私の樂譜を研究してゐるのを見せた。懸時計を見ると一時に間もないから、私は失禮しようとした。と、母夫人が、

「お住ひは隨分遠くて入らつしやるのですから、御ゆつくりなすつて入らつしやい。御飯を差上げますわ。」

私は遠慮しなかつた。暫くして私は、一寸した言葉の端から、彼女の馳走しようといふのは、配膳室での晝飯のことだと知つた。ブザンヴァル夫人は、人は良いのだが、見解の狹い上に、涉獵土の著名な門閥家だといふ增長から、當然才藝の士に拂ふべき敬意を缺いてゐた。此の場合にも彼女は服裝よりは樣子で私を見て取つた。服裝は固より質素だが、整然としたもので、配膳室で飯を喰はされるやうな風體とは見えなかつたのだ。私は配膳室へ行くことを餘程前に忘れて了つてゐたから、その復習をしたいとは思はなかつた。むつとしたが色にも見せないで、今ちよつと宅の近所に用があつたのを思ひ出したからと言つて、出かけようとした。娘夫人は母親の傍へ寄つて、何か耳打をした。果して驗が見えた。母夫人は立ち上がつて私を遮つて、

「あのどうかわたくし共と御一緒に召し上がつて戴きたいのでございますから。」

横柄に出るのは莫迦だと思つて、私は留つた。のみならず、ブロイユ夫人の好意は、私の心を動かした。そして私は此の人に心を引かれた。私は此の人と一緒に食事をするのが大へん嬉しかつた。そして彼女が一層深く私を知つてくれれば、席を私に分けたのを後悔しないだらうと思つた。此の家の深い家友であるラムワニョン所長(一)も一緒に食事をした。此の人もブロイユ夫人同樣、巴里特有の樂屋詞を知つてゐて、何事も隱語や、通人の用語で話した。斯うなると、哀むべきジャン・ジャアクの光を示す餘地がなかつた。私は感興が湧いて來ても、知つた風をしない丈の分別を失はずに、默つてゐた。若し私にいつもこれ程の分別があつたら、どんなに幸福だつたらう。今日深い淵に沈んではゐなかつたらうのに。

(一) Guillaume de Lamoignon. 一六八三—一七七二。

私は自分が愚鈍で、ブロイユ夫人が私の爲にしてくれた事の至當だつたのを見せることの出來ないのが、くやしくて堪らなかつた。食事が濟んでから、私はふと例の常套手段に思ひ及んだ。衣兜には、里昂にゐた時パリゾに宛てて書いた一篇の書簡詩が這入つてゐた。固より幾分の情熱のあつた上に、朗讀法にもそれを加へて、聽く三人に涙を零させた。私の見方の己惚かそれとも實際だつたか、娘夫人の眸が、母親に向つて、「どうですお母さま。此の方が女中達と一緒でなく、私達と一緒に御飯を召上つていい方だと申したのが悪うございまして？」と言つてゐるやうに私には讀まれた。この時までは何となく胸が一杯になつてゐたけれど、斯うして復讎してからは氣が爽々した。ブロイユ夫人は私への贔負の引倒しから、私を巴里にセンセイションを起して婦人

達に大もてに持てる人となるに違ひないと思つた。私の物知らずを導びく爲に、「…伯の懺悔錄(一)」を惠んでくれた。

「此の本は貴君(あなた)には良い手引で、世間に出るには必要なものです。時々參考なさいますとお爲になりますわ。」

(一) 第八卷に出るデュクロの作。丁度この一七四二年に出版された。

私は此の書物を與れた纖手に對する禮心から、二十年餘りも大切にして置いた。が時々、此の夫人が私を才人の資格があるやうに見てゐたらしいのには微笑まれた。此の書物を讀んだ時から、私は其の著者と親密になることを熱望した。私の好みは大へん良い事を思ひ附かせてくれた。彼は私の交際した文學者仲間で、唯一の眞の友人であるからだ(原註。私は隨分長い間、そして堅く堅くその眞友であることを信じてゐた。巴里に歸つてから、この「懺悔錄」の原稿を彼に委託したのもそのためだ。疑深いジャン・ジャアクも、その犧牲になるまでは、不信や虛僞を信ずるものでなかつた)。

その時から私は、ブザンヴァル男爵夫人とブロイユ侯爵夫人とが自分に同情して、何時までも此の窮乏に私を見棄てて置きはすまいとづう〳〵しく考へた。又私の思ひ違ひでもなかつた。まづその前に私がデュパン夫人のところに接近したことを話さう。これには一層長い結果があるのだ。

デュパン夫人(二)は世間に知られてゐる通り、サムエル・ベルナアルとフォンテヌ夫人との間に

生れた娘であつた。彼女は三人姉妹(三)で、まさしく三美神とも云はるべきであつた。その中のラ・ッシュ夫人(三)は、キングストン公爵と英吉利へ駈け落して了つた。アルチ夫人(四)はコンチ公の愛人で、善く云へば親友、唯一の心からの親友で、優しく、情深い、愉快な性格と、氣持の好い才氣と、いつも變らない快活な氣質との爲に、尊敬すべき女であつた。最後にデュパン夫人、三姉妹の中では一番の美人であり、又此の人丈は操行に就いても非難されるやうな點はなかつた。デュパン氏(五)が此の夫人の母親を自分の領地内で手厚く待遇した返禮に、母親は徴税請負人の地位と、莫大な資産とを附けて、娘を此の人に遣つたのである。私が始めて彼女に會つた頃は、未だ巴里切つての美人の一人だつた。彼女はその化粧室に私を迎へた。兩の腕は露はに、髪はさばけて、理髪衣が亂れてゐた。此の光景は私には如何にも珍しかつた。哀れにも私は氣が變になつて、とぎまぎして、茫然となつた。詰り此の夫人にすつかりまゐつて了つたのである。

(一) Louise-Marie-Madeleine de Fontaine. 一七〇六年巴里に生れ、一七二二年顧問官デュパン氏と結婚、一七九九年シュノンソオに歿。ポプリニエエル夫人の從姉妹。

(二) 三姉妹ともサムエル・ベルナアルの私通兒である。フオンテヌ夫人には尙本夫との間に一女一男があつた。

(三) François Thérèse de Fontaine. 一七二二年巴里に生れ、Nicolas Vallet, seigneur de la Touche と婚、一七六七年歿。

(四) Marie-Louise. de Fontaine. 一七一〇年生。d'Arty と自ら稱した Antoine-Alexis Paneau と結婚。晩年不詳。コンチ公のことは後に註する。

(五) Claule Dupin 一六八一―一七六九。

私の狼狽も、彼女に對して自分を傷つけたとは見えなかつた。彼女は氣附きもしなかつた。彼

女は例の著作とその著者とを丁寧に取り扱ひ、學才ある女子として私の計畫を談じたり、歌を唱つたり、クラヴサンを合したり、食卓に私を呼んで自分の傍に席を取つてくれたりした。然うまでしなくとも、私は直ぐ有頂天になるのだから、すぐに然うなつて了つた。私は彼女を訪ねることを許されたので、それに從つた、いや、いい氣になつて了つた。殆んど毎日のやうに此の家へ來て、一週間に二三回も會食した。話がしたくてしたくてたまらなかつたけれど、思ひ切つて出來なかつた。色々な原因が私の天性の臆病を强めたのである。富豪の邸に出入りすることは、幸運への扉口である。私の境遇として、この扉口を鎖め出されるやうな愚な事はしたくなかつた。ヂュパン夫人は愛嬌はあつたが、勿體振つて冷淡であつた。私に勇氣をつけてくれる丈の馴れ馴れしさは少しも見出せなかつた。この邸は、當時巴里で孰の邸にも劣らないすばらしい勢で、色色な社交團を集めてゐた。人數こそ仰々しくなかつたが、各方面の代表人物ばかりだつた。夫人は貴顯紳士や、學者や、美人など、評判の高いあらゆる客に接見するのが好きだつた。此の邸では、公爵、大使、帶勳者などしか見られなかつた。ロアン公爵夫人、フォルカルキエ伯爵夫人、ミルプワ夫人、ブリニョレ夫人、エルヴェ孃などがそのお友達と云はれてゐた。フォントネル氏、サン・ピエエル師、サリエ師、フルモン氏(一)、ベルニイス氏(二)、ビュフォン氏(三)、ヴォルテエル氏などは、そのサアクルの人であり、食卓仲間であつた。夫人の隔意ある樣子は、餘り若い人達を惹き附けなかつたけれど、それ丈精選されたその社交團は、いよ〳〵重味のあるものとなつた。で、哀むべきジャン・ジャアクは、斯ういふ仲間の中で、頭角をあらはさうと己惚れるやうなも

のを持つてゐなかつた。それ故私は口が利けなかつたが、と云つて何時まで默つてもゐられないから、思ひ切つて手紙を書いた。彼女は其の手紙を二日間默つて仕舞つて置いた。三日目にその手紙を私に返して、疎然とするやうな冷い調子で、簡單に忠告めいたことを言つた。私は何か言はうとしたが、言葉は唇まで來て息絶えた。私の激情は希望と共に消えて了つた。で形式的に申譯をした後、私はやはり以前のままで交際を續けて行つたが、彼女には何とも言はず、目顏にすら物を言はせなかつた。

(一) Michel Fourmont. 支那學者。一六九〇—一七四六。

(二) François Joachim de Bernis. 僧侶で詩人を兼ね、その詩に依つてポンパヅウル夫人に知られた。後外務大臣、頭僧官、ヴエネチヤ、羅馬等の大使を勤めた。一七一五—九四。

(三) Georges-Louis Leclerc de Buffon. 博學を以て鳴る博物學者。一七四九—八九年の間に出た *Histoire naturelle* の著者。一七〇七—八八。

卷

私はあの自分のたはけた動作が忘れられて了つたものと思つてゐたが、それは思ひ違ひだつた。ヂュパン氏の實子で夫人の繼子になるフランクイユ氏は、夫人や私と同じ年輩であつた。才はあり風采も立派だから、女に己惚れることが出來た。彼は夫人と關係があつたとの噂だつたが、是は多分夫人が、フランクイユ氏の妻に、顏のまづい溫和しい女を配して、その夫妻と至極仲好く暮してゐたといふ丈の事から廣がつたのだ(一)。フランクイユ氏は名士を愛し、又それと往復した。その造詣の深い音樂が、私たち二人を結び附けた。私は始終彼と出會ひ、彼に親しんだ。ところが突然彼の口から、ヂュパン夫人が、私があまりしげ〳〵此の家へ出入し過ぎるから、少し間を

明けるやうにして貰ひたいと言つてゐるといふ事を聞かされた。その挨拶ならいつか夫人が手紙を私につき返した時に言ふべきであつた。それが一週間も十日も經つて、別に變つた理由もなしに云はれなく來たのである。さう私には思はれる。一方フランクイユ氏夫妻は、以前と變らず私を歡待してくれてゐる丈(二)、私の立場は益々妙なものになつて來た。併し成る可く其の家へは偶にしか行かないことにした。この有樣で程なく全然私の足が止まつて了ふ筈の處へ、ヂュパン夫人が又何といふ氣紛れからか、一週間か十日程息子さんのお守りをしに來て欲しいと言つて寄越した。その息子は先生が代つたので、その日數の間獨法師でゐたのである。私は此の一週間を責苦の裡に過ごしたが、唯夫人の命に從ふのだと思ふ喜びに、せめて自ら慰めることが出來たのであつた。その譯は、此の哀むべきシュノンソオ(三)は、その頃から兇暴な性質を持つてゐたからである、是が爲に彼は危く一家に不名譽を被らせようとした上、到頭ブルボン島で死なければならないやうになつたのである。私が附添つてゐた間は、彼自身にも、他人にも害を加へようとするのを私は止めた。唯それ丈の事だつたが、それが並大抵の苦痛ではなかつたのである。だから縱ひ夫人が、お禮に自分の身を私に任せてくれても、もう一週間と此の辛抱は續けられなかつた。

(一) Claude-Louis Dupin de Francueil, 一七一六年シャトルウに生る。稅務局長、宮內省書記官等に歷任。Mlle Suzanne Bollioud de Saint-Julien を妻としたが、一七五四年に妻歿。本文にある繼母ヂュパン夫人との關係は、世に知られてゐた事實である。一七七七年（ルソオの死の前年）六十一歲の時、サクス元帥の私生兒、オルン伯爵の未亡人オロオル Aurore と再婚した。その間に出來た子のモリス Maurice Dupin が卽ちジョルジュ・サンドの父である。アランクイユは一七八七年歿。

(二) フランクイユはその妻と共に、プラトリエエル町の彼の父の家に同居してゐたのである。

(三) Jacques-Armand de Chenonceaux, 一七三〇—六七。

フランクイユ氏は私に友情を寄せてくれた。私は彼と一緒に仕事した。二人はルウェル(一)について、化學を勉強し始めた。彼に近寄る爲に、私はサン・カンタン旅館を出て、ヂュパン氏の住んでゐたプラトリエエル町と出會ふヴェルドレ町で、テニス・コオトのある家に宿を取つた。此處で私は感冒を構はずにゐた爲肺炎に罹つて死にさうになつた。若い時分にはさういつた炎症、肋膜炎、取り別け咽喉の病によく罹る事があつた。それを此處では書き立てないが、それらの病氣は、私が死の面影と懇意になるくらゐ、まざ〳〵と死を見せてくれたものだ。病氣が癒る頃、私は自分の境涯を省みたり、臆病や、弱志や、殊に怠惰を悲しんだりしてゐた。燃え立つやうな情熱があるのに、此の怠惰がいつも私を窮乏を前にして無聊閑散の裡にぐづぐづさせて置いたのである。病氣に罹る日の前晚、私は丁度その時分開いてゐた、曲名は忘れたがルワイエのオペラを看に行つた。餘りに他人の技倆を買ひ冠つて、自分のそれを蔑視(みくび)るのが私の癖だが、それでも此のオペラを、熱も無く、新し味もない、弱い音樂だと考へずにはゐられなかつた。時には自分で、「俺の方が增しなものが出來さうだ」なぞと高言した。併し、オペラの作曲に就いて自分の持つてゐる恐ろしい考と、音樂家等が此の企を重大視するのを聞いてゐたのとで、忽ち私の氣が挫けて、よくもそんな事が思ひ浮んだものと顏を赧らめた。その上、誰が其の歌詞を書いた上に、此方の氣に入るまで、改刪の勞を取つてくれる者があらう。音樂とオペラとについてこんな考が病中に又浮かんで來て、熱に浮かされながら、私は、歌詞も、ヅエットオも、合唱部までも作り

上げた。確かに、大家に聽かせたらその驚嘆に値するやうな卽興的の曲を二つ三つ作つた。噫、若しも熱病者の幻想を書き留めることが出來たならば、どんなに雄大で高遠な作が、時々その患者の囈語から出て來るのが見られることだらう。

(一) Guillaume-François Rouelle. アカデミイ科學部會員。一七〇三―一七七〇。

恢復期の間にも、音樂とオペラとの此の問題が、段々靜まつては來たが、尙私の心を占領してゐた。自分の意志に反してさへその事ばかりを考へ詰めた結果、私はオペラの正體が知りたくなつて、自分一人で歌詞曲譜とも一篇のオペラを作り試みようとした。これは必ずしも私の最初のものではなかつた。既にシャンベリで、「イフィイスとアナクサレエト」と題する悲劇的オペラを作つた事がある。私はそれを殊勝にも火に焚べて了つた。又里昂で「新世界の發見」といふのを作つて、ボルド氏や、マブリ師や、トリュブレ師や、その他の人達に讀み聞かせた後、亦前の曲と同樣の處分をして了つた。その序白と第一幕との曲譜はもう出來上つて居り、ダヴィドが見て、その中にはブオノンチニ(一)の作に匹敵する所があるとさへ言つてくれたけれども。

(一) 伊太利亞のオペラ作家。アリオスチと同盟して、普魯士のヘンデルと倫敦で競爭した。一七五二(?)歿。

今度は作に手を着ける前に十分腹案を練つた。一篇の史詩的舞曲の中で、三種の異つた主題を、別々の三幕に仕組み、一幕毎に樂趣を變へる計畫だつた。そしてその題材として、幕毎に詩人の戀愛事件を取るといふので、此のオペラに「粹詩神」といふ名を附けた。第一段は强い樂趣でこれがタアス(一)の幕。第二段は弱い樂趣でオヴィッド。第三段には「アナクレオン(二)」と名を附けて、酒神歌體の輕快な味を出すことにした。最初に第一段から始めた。するとそれに取りかゝつた私の熱心は、生れて初めて作曲の感興の快さを私に味はせてくれた。或る夕方、オペラ座へ這入りかけると、思想が猛烈に湧き上がつて來たので、又金を衣兜に仕舞つて、駈け戻つて家に閉ぢ籠る。光線の差し込まないやうに窓帷をしつかり引いて置いて、寢臺に横たはる。そして、詩と音樂との興奮に身をうち委せて、七八時間で一氣に第一段の大部分を作り上げて了つた。フェルララの姫君(三)に對する私の戀(原註。この場合は私がタアスであつたから)と、彼女の不人情な兄に對する私の高潔な感情とのために、實際私は姫君その人の腕に抱かれたより、百倍も樂しい一夜を過ごした。翌朝になると、折角作り上げたものも、頭の中には、僅かな部分しか殘つてゐなかつた。その僅かな部分も疲勞と眠りとで大方拭ひ去られてゐたが、それでも尙、その殘餘によつて、此の曲の力を示してゐた。

(一) Torquato Tasso. 伊太利亞の詩人。*La Gerusalemme liberata* の作者。一五四四―九五。
(二) Anacréon. 希臘詩人。前五六〇―四七八。
(三) フエルララ公アルフォンスの妹レオノオル。兄は初めタアスの保護者だつたが、後に彼を虐待する。

ところが今度は又別な事件に氣を取られたので、私は此の仕事をあまり突き進めて行かなかつた。私がヂュパン家に親しんでゐる間も、時々私の訪問してゐたブザンヴァル夫人とブロイユ夫人は、私の事を忘れないでゐた。近衞大尉モンテグ伯(一)は、此の時ヴェネチヤ(二)駐紮の大使に任ぜられた。これは彼の頻りと阿諛つてゐたバルジャック(三)がこしらへた大使であつた。其の兄のモンテグ士爵は皇太子殿下の扈從で、右の二人の貴婦人や、やはり私が訪問するアカデミイのア

ラリ師(四)の知人であつた。ブロイユ夫人は、大使が書記官を一人捜してゐると聞いて、私を推薦した。私達は協議を始めた。私は俸給五百圓を要求した。これとても、體面を張らねばならぬ地位の者に取つては餘程低いのである。彼は四百圓しか出さず、旅費も自辨することを望んだ。條件が滑稽であつた。雙方折れ合はなかつた。私を引き留めて置かうとして骨を折つたフランクイユ氏の希望が達した。私は居殘つて、モンテグ伯だけが、外務省から宛行はれたフォロオといふ他の一人の書記官を連れて立つた。その二人はヴェネチヤに着くと直ぐ、喧嘩を始めた。フォロオは、こんな氣狂を對手にしてゐてはと思つて、伯を置き去りにして了つた。するとモンテグ氏の下には、唯一人ビニイスといふ若い僧が書記官の下僚を勤めてゐるきりで、それも其の後任になれる柄ではなかつたので、お鉢が復た私に廻つて來た。兄の士爵は怜悧な人で、書記官の地位には種々な特權が附隨してゐるからなぞと甘口に乘せて、到頭私に四百圓で承諾させて了つた。私は二百圓の旅費を貰つて出發した。

(一) Pierre-François-Auguste, comte de Montaigu. 一六九二―一七六四。
(二) ヴェネチヤは一七九七年ナポレオンに征服せられるまでは獨立の一共和國で、ドオジェと稱する大統領がこれを統治してゐた。
(三) フルリイ大司教の從者。
(四) Pierre-Joseph Alary. グルネの大修院長。路易第十五世の前王子傅育官補。一六八九―一七七〇。

一七四三―一七四四。

――私は里昂からは道をモン・スニの方へ取つて、途中可憐な母に會つて行きたいと望んでゐた。けれどもロオヌ河を下つて、ツロンで船に乘つた、これは戰爭のためと經濟のためと、それに當時プロヴァンスの司令官であつたミルプワ氏への紹介狀を貰つてゐたから、此の人から旅券を得るためとであつた。モンテグ氏は、私が無くては居られないので、あとからあとから手紙を寄越して、旅行を急がせて來た。が、或る事情で旅行が遲れた。

丁度メッシナ(一)にペストが流行した時だつた。英國の艦隊がその港に碇泊してゐて、私の乘つてゐた帆船へ巡察して來た。それが爲長途の難航海の後ジェノヴァへ着くと、其處で二十一日間交通遮斷を受けなければならなかつた。乘客はその期間、船に居ようと隔離舍に居ようと隨意だつたが、隔離舍の方は設備をする暇がなかつたので、壁の外には何もないとのことだつた。乘客は皆船を選んだ。が、暑さは嚴しいし、場所は窮屈で散歩も出來ず、惡い蟲さへゐるので、私丈は何が何でも隔離舍に這入ることにした。私は二階建の、がらんとした大きな建物の中に案内された。窓も卓子も寢臺も椅子も、腰を卸す臺も、横にならうにも一束の藁すら見當らなかつた。私の外套や、夜具のサックや、トランクが二個持ち込まれた。丈夫な門の、丈夫な錠前で私は鎖め込まれて了つたから、心の儘に大手を振つて、室から室、階から階へと歩き廻はつたが、何處へ行つても一樣の寂寥と一樣の赤裸とが見出された。

(一) シチリヤの都會。

こんなにしてでも私は、船よりも隔離舍を選んだことを後悔しなかつた。そして二代目ロビンソンの積りで、二十一日間の爲に、一生涯の爲にするやうな準備をし始めた。第一に船から運ん

で來た蝨を退治する樂みがあつた。シャツや衣服を取替へて、すつかり綺麗になつて了つてから、私は自分の擇んだ室の設備に取りかかつた。胴衣(ナヨツキ)と下衣で上等の蒲團を拵へ、ナプキンを縫ひ合せてシイトを拵へ、寢衣を懸蒲團に使ひ、外套は卷いて枕にした。トランクを一つ平らに置いて腰掛にし、もう一つの方を立てて卓子の代りにした。紙やインクをも取り出した。文庫の積りで携へてゐた書物を一打(ダテス)ばかり列べた。これでカアテンと窓が無いだけで、まるきり赤裸(ハダカ)の隔離舍にゐながら、ヴェルドレ町のテニス・コオトの宿にゐるのと殆ど同樣の自由を得た。食事も隨分仰々しく給仕された。擲彈兵が二名、着け劍でそれを護衞した。階段が私の食堂だつた。踊り場が食卓になり、踏段が腰掛になつた。支度が出來ると、一同が引き退(さが)ると共に、召し上れといふ知らせの鐘が鳴る。食事と食事の間に、讀みも書きもせず、室内の整理もしないでゐる時には、新教徒の墓地を自分の庭のつもりで散歩したり、港内の瞰下せる屋上の物見へ上つて船の出入を眺めたりした。斯うして私は二週間を送つた。で、私は此處で一瞬の退屈も感じないで全期間をも過ごしたことだらう。ところが、私がジョンヴィルといふ佛蘭西の派遣公使に宛てて、醋と香水の掛かつて半分焦げた手紙を出したので、彼は私に一週間の日數を縮めてくれた。私はその間を彼の家に行つて過ごした。實際やはり隔離舍にゐるよりは、此の方がずつと居心地がよかつた。公使は私をちやほやした。書記官ヂュポン氏も氣の良い青年で、町でも田舍でも、人の樂しむ家家へ私を案内してくれた。斯ういふ譯から私は此の人と懇意になり、手紙の往復も餘程長く續けてゐた。さて私はロムバルヂヤを横ぎつて、愉快に旅を續けて行つた。ミラノ、ヴェロナ、ブレ

シヤ、パドヴァを觀て、到頭ヴェネチヤに着いてみると(一)、大使閣下は私を待ち焦れてゐた。

(一) 一七四三年九月初。

そこには本國の宮廷や他の大使から來た公文書がどつさりあつた。その中の暗號で書いた書類は大使に讀めなかつた、必要な丈の暗號字を備へてあるのに。私は今まで官廳の職務を執つたことがなく、生れてから公用の暗號字といふものを見たこともなかつたので、最初は困りはしないかと心配した。が、これ程容易な事はないと分り、一週間經たない中に、暗號文が全部讀めるやうになつた。ほんとに骨折がひもないくらゐのものだつた。ヴェネチヤの大使館あたりは、いつも閑散である事は勿論、此の大使のやうな人には、誰も一寸した事件さへ持ち込まうとする氣づかひはなかつたのである。大使は口述することも、讀めるやうに書くことも出來なかつた爲に、私の來るまでは途方に暮れてゐた。私は彼に取つて重寶な人間だつた。彼もそれを思つて私を大切にした。それにはもう一つ原因があつた。前任の大使フルレ氏が腦に異常を起して以來、佛蘭西領事ル・ブロン氏(二)が、大使の職務を代理してゐた。モンテグ氏が着任の後も、事務に通ずるまで、尙引き續き執務してゐた。モンテグ氏は、自分で出來ない癖に、他人が自分の職務を取り扱つてゐるといふ事を嫉んで、領事を目敵にしてゐた。私が行くと直ぐその書記官の任務を奪つて、私に與へた。その職務は官名と分離することの出來ないものだつたから、私にその官名を帶びよと命じた。彼と同勤してゐた間、彼は始終此の肩書で私丈を上院や、會議の席へ派遣した。とにかく彼が、大使館の書記官には、領事や、宮廷から任命された官吏よりも、自身の手の者を

しておく方がいいと思つたのは、如何にも自然な事であつた。

(1) Jean Le Blond. 元ツロン區の海上守備兵の隊長。一七一八年からヴェネチヤの領事となる。

是で私の地位は大分面白くなり、側人(そばびと)や多くの家人同樣、いづれも伊太利亞人である館員等は、此家で私と權力を爭はなかつた。それに附帶した權威を利用して、私は保護權、卽ち大使管下の免稅を確保することが出來た。それは今まで度々侵害されようとしても、ヴェネチヤ人の館員等が見逃して來たものであつた。併し同時に私は盜賊共が、其處へ逃避して來ても、それは決して免さなかつた。或はそれが私の利益にもなり、閣下も敢へて分け前を厭はなかつたらうけれど。

閣下は官房事務と呼ばれる書記官の權限にまで干涉し出して來た。當時は戰爭中だつたが、旅券はいくらでも發行して差支なかつた。旅券一通毎に、それを作製して奧印する書記官に、四圓五十錢を納める規定であつた。前任の書記官達は、佛蘭西人他國人の區別なしに此の料金を納めさせてゐた。私は此の慣例を不公平と認めて、自分は佛蘭西人ではないが、佛蘭西人の爲に此の料金を廢した。が、一方外國人に對しては、嚴に自分の權利を要求し、西班牙女皇の寵臣の兄弟に當るスコッチ侯爵がこれを納めないで、旅券を請求して來た時なども、やはり料金を徵收させた。此の鯁骨を、復讐心の强い伊太利亞人は忘れなかつた。旅券の課稅に關する新規定が一般に知れ渡るや否や、これを請求するのは、皆早替りの佛蘭西人ばかりで、めちやくちやの片言雜りに、プロヴァンス人だ、ピカルヂ人だ、ブルゴニュ人だなぞと言ひ立てた。けれども私の耳は確かだから、決してそんな手には乘らなかつた。それ故私は、伊太利亞人で一人でも料金を糊塗(ごまか)し、

佛蘭西人で一人でもそれを納めた者があつたとは思つてゐない。私は此の事をまるで何も知らないでゐたモンテグ氏に、うつかり喋つて了つた。この料金といふ語が彼の耳を開いた。佛蘭西人の免稅の事では可否を言はないで、他國人の料金からの所得は、折半にする約束で二人で處分しようと主張した。私は自分の利害を氣にかけるよりも、その下司張りに怒りを催して、居丈高(ゐたけだか)に彼の提議を刎ねつけた。彼は頑張つた。私は嚇となつて、

「いけません。」私は荒々しく彼に言つた。「閣下は御自分の權限をお守りになり、私には私の權限を守らせて戴きませう。一錢でも決して閣下にお委せは出來ません。」

これでは到底いけないと知つて、彼は別の方法を案じ出した。そして厚顏(あつかま)しく斯う言ひ出した。君は官房の收入を獨占するなら、官房の支出も君が負擔するのが至當だらうと。こんなことで言ひ爭つても詰らないから、それから後は、インクも、紙も、封蠟も、蠟燭も、細紐も、作り直した印章も、悉皆(すつかり)自辨で調へたが、彼は一厘も私に返してはくれなかつた。それはそれとしても、かの正直な、こんな事については全く慾氣のないビニイスには、私も旅券の所得の一部を分けて遣つた。彼は私に好意を持つてゐただらうから、私も彼を決して粗末にはしなかつた。そして二人は始終親密に附き合つてゐた。

執務については、私はそれが心配した程困るやうなものでないことを見出した。私が無經驗の上に、大使も私とおつつかつつの無經驗に加へて無智强情で、私が常識や素養によつて、大使や王室の爲に利益を圖らうとしても、片端から反對をするだらうと思つてゐたのである。まだしも

彼の取つた至當な措置は、西班牙の大使マリ侯爵と提携したことである。マリ大使は、悧巧な慧(はしこ)い人で、隨分モンテグ氏位を鼻の尖であしらへたのであつたが、兩國の利害の一致と云ふ點から考へて、いつも有益な助言を彼に與へた。しかし一方はとかく自分の意見を振り廻したがつて、實行といふ段になるとそれをぶつ壞して了つた。唯一つ雙方協力して當らなければならなかつた事は、ヴェネチヤ人に局外中立を嚴守させることであつた。ヴェネチヤ人等は確く條約を守ると保證しながら、公然墺太利亞の軍隊に彈藥を供給したり、剩つさへ脱營に託して新募の兵をも輸送してゐた。モンテグ氏は内々共和國の方へ好意を持つてゐるらしく、私が抗言して見ても、本國への報告には皆、ヴェネチヤ共和國は決して中立條約に違反してゐないといふことを無理に私に證言させた。この哀むべき人間の强情と狂愚とは、始終私に不條理極まることを書き、且行ふことを强ひた。彼がそれを望む限り、私は不承々々にその手先になつてゐる外はなかつた。それがために、時とすると書記官といふ役は、堪へられないもの、殆ど勤まらないものといふ風に考へられた。國王若しくは政府へ發送する文書には、孰(どれ)といつてそんなに用心しなければならない物もないのに、殆ど全部を暗號文で起草しろと言ひ張つたなどが、その一例である。宮廷の書類の到着する金曜日と、此方からの分を發送する土曜日との間に、そんなに澤山暗號を使つた澤山な文書を作つて、然も同じ飛脚に渡す時間がないと私が言ひ聞かせた。すると彼の搾り出した名案は、明日(あす)到着しようといふ書類に對する回答文を、木曜日から作つて置かうといふのである。彼は世にも妙策を思ひついた積りで、私がその不可能であることと、實行の不合理であることを

言ひ聞かせても、どうしてもその儘押し通して了つた。そして私は、彼の傍に留まつて居た限り、その週間内に彼の取り留めもなく口授した詞や、私が彼處此處で掻き集めて來た下らない種を書き留めて、それ丈の材料で、土曜日に發送する書類の草稿に、木曜日の朝から作り上げることを怠らなかつた。唯幾らかの加除訂正だけは、金曜日になつて、此方に回答の出來てゐる照會が來ると、それに照らして大急ぎにするのであつた。又一つ彼には飛び離れて可笑しい癖があつた。これが爲に彼の書信は、想像に餘るほど滑稽なものになつた、それは一々の書信を、その行く先までやらないで、元の出所へ送り返すことであつた。宮廷から來る通信はアムロ（外務大臣）氏へ、巴里から來るのはモルパ（佛國宰相）氏へ、瑞典からのはアヴランクウル氏へ、彼得堡(ペテルブルグ)からのはラ・シュタルヂ氏へ送つた。時にはそれぞれ差出人へ、少し異つた用語で私に修正させて送り返した。サインをして貰はうと思つて書類を提出すると、宮廷宛の分(ぶん)丈に眼を呉れて、他の大使宛の書類は讀まないで署名するので、私は此の分に對しては、自分の思ふ通りに書いて、それでせめても相互の消息を交換させた。併し重要書類に尤もな變更を加へることは、私には出來なかつた。まだしも彼が自己一流の妄語(たはごと)を、出たらめにその中へ書き込まうとしない時が幸福だつた。若しこれが書き込まれると、私は此の新規な妄語で裝飾された書類を、急いで淸書しに歸らなければならず、且それに暗號字といふ名譽を戴かせないと、どうしても彼は署名しなかつたからである。私は彼の名譽を重んじて、彼の口授したのと異つた暗號文に起草しようと思つた事が幾度あつたか知れない。併しそんな不信は決して許されないことだと思つて、その狂人染(きちがひじ)みた詞

を彼の責任に任せて打つちやつて置いた。そして自分は率直に彼に話をすることと、彼に對する義務を自分の責任の爲に果すこととで滿足してゐた。

これが私のいつも正直に、熱心に、勇敢に行つてゐた事で、後に私の受けた報酬とは、異つた報酬に相當するものであつた。天が私に幸福な性質を賦與し、最も優れた女子達が私に教育を授け、自分も修養に力めて、私といふものを作り上げたのである。今この時こそ、私は然うしたものであらねばならなかつたのだ。で私はそれであつた。自分一人をたよりにして、友人もなく、相談相手もなく、經驗も無く、他國で他國人の世話をして、自分達の利害からと、善行を見せつけられる不快さを除く爲とから、私をも仲間に引き込まうとする我利々々共の眞ん中に介まりながら、その眞似は少しもせずに、私は何の御蔭をも蒙らない佛蘭西のために、尙更大使のために、當然の事として自分の責任上のことを十分に盡したのである。衆目の集まる地位に居ながら非難も受けず、却つて此のヴェネチヤ共和國や、平素文書を往復してゐる諸外國大使の尊重と、ヴェネチヤ在留の佛蘭西人の敬愛とを値し、且それを受けた。殊に彼の領事自身さへもその例外ではなかつた。私はしぶ〳〵彼の職務を奪つて了つたが、もと〳〵それは領事の權限に屬すべきものであり、又私に取つても愉快よりは面倒を與へたものなのだ。

モンテグ氏は遠慮なくマリ侯爵をたよりにして、微細な職務上の事には立ち入らず、打つちやり放しなので、若し私がゐなかつたら、ヴェネチヤ在留の佛蘭西人は、自國の大使のゐることに氣附かなかつたかも知れない。居留民が大使の保護を受けたくても、聽いてもくれないで體よく逐

つ拂はれるので、皆がつかりして了つた。そして行列にも食卓にも、大使は決してその人達を請待しなかつたから、其處に誰の姿も見えなかつた。私は彼のすべき事でも、時々專斷で行つた。彼へでも私へでも、佛蘭西人の依頼に對しては、自分の力に出來るかぎり、何事でも世話をしてやつた。これが他の國だつたら、未だ未だ私はいろんな事が出來たであらう。けれども、味方になつてくれるやうな人が現職に居合さなかつたので、毎度領事の處へ相談に出掛けて行く外はなかつた。家族と共に此の國に住まつてゐた領事は、家事に手を取られて、心には思つてゐても中々してくれなかつた。それでも、彼が引込思案で進んで口を出さない場合には、自分で向う見ずな冒險をやつて見たが、往々それが旨く行つた。これについて、今でも笑はされる一例を覺えてゐる。巴里の芝居好きが、コラリヌと、妹のカミイユ(二)とを見られたのは、私の力に由つたのだといふことに、誰も氣附く者はあるまい。が、全くそれに違ひなかつたのである。二女の父のヴェロネエズは、娘達と一緒に、伊太利亞俳優團として雇はれてゐた。そして八百圓の旅費まで受け取つてから、巴里へは發たないで、靜とヴェネチヤの聖路加座(原註。ひよつとすると聖撒母耳座だつたかも知れない。固有名詞はすつかり忘れてゐる)に居据わつてゐた。此座で娘のコラリヌは、未だ子供ではあつたが、大した人氣を呼んだ。ジェスヴレ公爵は主膳頭といふ資格で、ヴェロネエズ父子を寄越せといつて、大使へ要求して來た。モンテグ氏は、その手紙を私に見せて唯一言、

「見給へ。」

と言つたきりだつた。私はル・ブロン氏の處へ行つて、聖路加座の持主の貴族、たしかツスチニ

ヤニ家の人に、國王陛下のお屋ひ入れになつたヴェロネエズを引き渡すことを申し込んでくれと頼んだ。ル・ブロン氏はこの事にあまり無頓着すぎて拙い事を行つた。ツスチニヤニは理窟を捏ねて、ヴェロネエズを引渡さなかつた。私は續にさはつた。それは謝肉祭の時だつた。假面舞踏の衣裳と假面を着けて、私はツスチニヤニの邸へ案内させて行つた。私のゴンドラが、大使の艤裝をして這入つて行くのを見た者は皆驚いた。ヴェネチヤ人は曾て斯ういふ光景を見たことがなかつたのである。私は這入つて、「假面の姫君」の名で案内を乞うた。奥へ通されるとすぐ、私は假面を脱いで實名を明かした。議官は蒼くなつて、魂銷てゐる。

「閣下。」ヴェネチヤ語で私が言つた。「お邪魔をして恐縮の至りです。ところで、あなたの聖路加座に、ヴェロネエズと申す者が出勤して居りますが、あの者は、國王から雇入れになつて居りますので、人を以つてあなたへお引渡しを願ひました處が、御聽き入がないとかで。私は我が陛下の御名の下に、御催促に參つたのです。」

ちよつと言つたのが効果を現した。私が其處を出るとすぐ、私の從者が早速檢察官の處へ駈けつけて、その由を申し立てると、したたか彼はお目玉を頂戴した。ヴェロネエズはその日の中に暇を出された。私はヴェロネエズに、一週間内に出發しなかつたら拘引だぞ、と言ひ送らせた。で、彼は發つた。

(一) パンタロン Antoine Véronèse の娘、一七四七年にコメヂイ・イタリエヌの舞臺を踏み、一七六八年に世に惜しまれて死んだ。姉はそれより三年早く舞臺に立ち、一七八二年までは生きてゐた。

又或る時のこと、一商船の船長が困つてゐたのを、私一人で、殆ど誰の力も借りずに助けてやつたことがあつた。その船長は馬耳塞の人で、オリヴェと云つたが、船の名は忘れて了つた(一)。その船員が、ヴェネチヤの國へ勤めに來てゐたスラヴ人と爭論の末、暴行を働いたといふので、商船はきびしく抑留されて、船長を除く外は、一人も許可なしに船に出入することが出來なくなつた。大使へ哀願したが、取り合つてくれない。それから領事に願つて行くと、これは通商上の事件でないから、自分は干渉することが出來ないと言はれた。船長は手段が竭きて、私のところへ來た。私はモンテグ氏に、此の件に關する調書を議院に提出する事を許して下さらなくてはいけませんと注意した。私は今、大使がそれを許可したかどうか、又私がその書類を提出したかどうかは覺えてゐない。けれども、私の處置が無效に了つて、船は引き續き出港禁止になつてゐたので、或る方法で好結果を得たことは善く覺えてゐる。私はこの一件をモルパ氏宛の文書の中へ記入したが、此の條項をそのまゝにして置くことを、モンテグ氏に同意させるのに隨分骨が折れた。それらの書類は開いて見ても仕方のないものだつたが、それがヴェネチヤで開封されたことを私は知つてゐた。その事は、右の箇條がその儘の字句で新聞に出たのが證據だつた。この不德義に關して、私は大使に勸めて告訴させようとしたけれど、無效に終つた。私の目的は、彼の書類の中の遭難一件を言ひ立て、國内の好奇心を利用して彼等を危懼せしめ、そして商船を釋放させようといふのであつた。若し宮廷の指令を待つてゐなければならないとなると、それが着くまでに、船長は破産するかも知れなかつたからである。まだその上、私は船員を訊問するために、

その船へ出向いて行つた。同行者は領事館の官房のパチゼル師だつたが、全くいや〳〵隨いて來たのであつた。それ程是等の哀むべき人達は、みな上院の感情を害することを恐れてゐたのである。禁令のために船に上ることが出來ないので、私は自分のゴンドラの中から、大聲に船員の一人一人に訊問の詞を懸けて口供を取つたが、船員等の利益になるやうな答辯をさせるやうに水を向けてやつた。訊問をしたり、口供書を作るのは、寧ろパチゼルの職務だから、私は彼に然うさせようと思つた。それだのに彼は同意するどころか、一語も口を利かない。口供書の私の名の次に署名するのすらぐづ〳〵言つた。これは隨分大膽なやり方ではあつたが、好結果を得て商船は出港を許された。政府の指令が來たのは餘程後だつた。船長は私に贈り物をしようとした。私は腹も立てずに、彼の肩を叩きながら、

「オリヴェ君。定まつた旅券の收入すら、佛蘭西人から受け取らない僕を、國王の保護を金で賣るやうな人間だと思つてるのがい。」

と言つた。彼はせめて船の中で御馳走をしたいと言ふから、私は承知して、西班牙大使館の書記官のカリオといふ人と一緒に行つた。カリオは才子で面白い男だつた。後には巴里駐在の書記官又は代理公使となつたが、兩大使が親密であつたやうに、私達二人も互ひに懇意にし合つてゐた。

(一) この船はサント・バルブ Sainte-Barbe 號。

全く利己心を離れて自分に出來る丈は利益を圖つてやつてゐる間に、若し私が是等の瑣末な事件にも順序と用心とを忘れないで、人に欺かれたり、自分の金を費ひ込んだりしなかつたならば、

どんなに幸福だつたらう。併し、私の現に占めてゐたやうな地位では、ごく僅かな過失でも後の祟が恐ろしいから、注意力は全部職務上に失態を起さないことにのみ集注した。私は最後まで、自分の本務に關係したすべての事件には、飽くまで規則正しく且嚴密であつた。餘り遽てて書類の書損じをして、アムロ氏の書記に一度苦情を言はれた外には、大使は勿論誰からも、職務を怠つたといつて小言を喰つたことは決してなかつた。私のやうな、ぞんざいな、輕率な人間にしては、特筆すべき事である。併しともすると、自分の引き受けた私用をうつかり忘れて、その處置を怠るやうなことはあつた。けれども、正義を愛する私は、その事で人が苦情を言ひ出さない前に、始終自分の方から進んで、その損害を負擔してやつた。茲にその一例を述べる。これは私のヴェネチヤ出發に關係してゐる事で、その結果は後に私が巴里へ來てから氣附いたのである。

大使館の料理番のルスロといふ者が、古びた八十圓の借用證書を、佛蘭西から持つて來た。これはルスロの友人の鬘師が、鬘を賣つた代に、ツァネットオ・ナニといふヴェネチヤの貴族から受け取つたものであつた。ルスロは其の證書を私の處へ持つて來て、何卒これで若干金でも支拂つて貰へるやうに話して欲しいと賴んだ。一體ヴェネチヤ貴族の慣例として、外國で借りた金は、自國へ歸つて了へば、決して返さないといふことは、私も承知してゐた。督促をしようと思つても、彼等は遲滯と費用とで不幸な債主を弱らせる。債主は根氣が盡きて、全く棄權して了ふか、然もなくば言ふにも足りないもので我慢する外はなかつた。私はツァネットオに談じ込むことをル・ブロン氏に賴んだ。ツァネットオはその證書は認知したけれど、支拂は承知しない。激論の

後、やつと十三圓餘だけ承知した。ル・ブロンが證書を持つて行つた時、十三圓の金は準備されてゐなかつた。どうしても待たなければならなかつた。丁度此の間に私と大使の爭論が始まつて、私が大使館を出て行くことになつたのである。保管の書類は、綿密に整理して殘したのに、ルスロの證書だけが、どうしても見當らなかつた。ル・ブロン氏は、確かに私に返したと言ふ。固より正直な人だから、彼を疑ぐる餘地はない。けれども私は、證書がどうなつたのかを思ひ出すことが出來なかつた。ツァネットオは債務を承認してゐるのだから、私は領收書で十三圓の金を取り出して貰ふか、或は副本としてもう一通證書を書かせるやうにしてくれと、ル・ブロン氏に頼んだ。ツァネットオは證書が紛失したと聞いて、どちらも承知しなかつた。私は自分の財布から十三圓をルスロに渡して、それで帳消しにしようとした。彼はその金を斥けて、巴里で債主と談を附けて欲しいと言つて、その者の住所を私に敎へた。聾師は是迄の成行を知つてゐて、證書を返すか、金で全額を返せと言ふ。私は腹が立つて、若し此の厄介な證書が見つかるものなら、どんな事でもしたであらう。私は八十圓悉皆支拂つた、而も困り切つてゐる最中であつた。斯ういふ譯で、債主は證書が紛失したばかりに、全額の支拂を受けることが出來たのである。若し彼のため不幸にして、それが出て來たならば、ツァネットオ・ナニ閣下が約束した十三圓の金すら、容易なことで彼の手に入るのではなかつたのである。

職務に對する手腕に自信が附いて來たので、私は愉快にそれを果たすことが出來た。で、友人のカリオや、やがて話をしようと思つてゐる有德なアルツウナとの交際を除き、又聖馬可通や、

劇場の無邪氣な娯樂や、時々連れ立つて人の家を訪問した事を除けば、私の樂みといへば、自分の職務丈だつた。事務がひどく困難といふではなし、ビニイスといふ助手もゐたが、文書往復の區域が廣く、それに折ふし戰時中で、隨分仕事は忙しい方だつた。每日午前の時間の大部分は事務にかゝつて了つた。飛脚が到着する日なぞは、眞夜中までかゝることもあつた。餘暇があれば今從事してゐる職務の研究に充てたが、初めから調子が好かつたので、將來は一層利益のあるやうに用ひられることと期待してゐた。實際誰も私の事を惡く言ふ者はなく、第一大使自身が私の勤務振りを讚め上げて、決して苦情を言はなかつた。後に彼が激怒したのも、詰り私が無益な苦情をこぼして、終に辭職すると言ひ出したからだつたのだ。文書を往復し合つてゐた諸大使や各大臣が、良い書記官だといつて大使に喜びを言つて寄越したので、大使は嬉しくなければならないのに、沒常識な彼の腦裡には、却つて反對の結果を起した。特に或る重要事件について寄越した謝狀のために、彼は私を用捨しなかつた。是非この事は委しく話して置かなくてはならない。

彼は殆ど自制心のない人間で、每土曜日は諸方へ郵書の出る日であるのに、事務の濟むまで外出を見合すことが出來なかつた。だから國王や諸大臣へ出す文書の仕上げを、やたらに私に急き立てて、自分も大急ぎで署名し、その外の多くの書狀には署名もしないで、何處とも知らず駈け出して行つた。そこで仕方がないから、唯の報告位なら、公報に振り向けて置くけれど、若し何か王室に關係でもある時には、誰かが署名しなくてはならない。その署名は私がした。或る日、維因駐槃の佛蘭西代理公使ヴァンサン氏から、重要な通牒を受け取つた時に、丁度そんな事があ

つた。それはロブコヴィッツ公(一)がナポリに進軍し、ガアジュ伯が彼の記念すべき退却をした時の事であつた。歐羅巴では餘りこれを評判しなかつたが、當世紀中の最も美しい軍隊行動であつた。ヴァンサン氏からの通牒には、一人の男が維因を發つて、ヴェネチヤからアブルッチへ向けてこつそり忍んで行く、これは墺太利亞軍の接近につれて該地方民を煽動するためだと記して、その男の人相書まで添へてあつた。例の何事にも無頓着なモンテグ伯が不在だつたので、私はその書類を時機を逸せずオピタル侯の方へ送り附けた。ブルボン家が、ナポリ王國を保全することを得たのは、恐らく愚弄に愚弄された、この哀れなジャン・ジャアクの力に由つたのであらう。

(一) ロブコヴイツツ Lobkowitz は墺軍の總督。次のガアジュ J.B. Dumont, comte de Gages は西班牙軍の總督。一七四三年二月ガアジュは墺軍をロムバルヂヤに擊破した後、優勢な敵軍を前にして將卒を損ぜんことを恐れ、賢明な退却をした。

オピタル侯爵は、此方の大使へ、當然のことながら、禮を言つて來た時に、書記官の私を讃め、今度私が共同目的の爲に盡したことが書いてあつた。モンテグ伯は、此の事件で自分の怠慢を責めなくてはならないのに、却つて侯爵の挨拶を、暗に自身を非難するものと邪推し、そのことを私にぷり〳〵して話した。未だその外私は君士坦丁堡駐紮大使カステラヌ伯爵に對しても、あれほど重大事件ではなかつたが、前のオピタル侯爵の時のやうな事件に出會つた。君士坦丁堡へは郵便が無く、時々議院から要塞へ遣る飛脚がある丈だつたので、その飛脚の出發する前に、佛蘭西の大使にも、向うの同僚へ、丁度その際に用があれば手紙を出すやうにと知らせて來た。此の

知らせは一日二日前に來るのが普通であつた。それにモンテグ氏は人が莫迦にしてゐて、眞の申譯に、飛脚の出發する一二時間前に知らせてくれる丈だつた。で、多くは大使の不在中に私が書類を作つて出すことになつたのである。カステラヌ氏は私への回答の序に、懇篤な謝狀を送つて來た。同樣にジェノヴァのジョンヴィル氏からも來た。それ丈苦情が加はつた。

それは私だとて、自己を宣傳する機會を避けたことはなかつた。けれども強ひてその機會を求めようとはしなかつた。唯善く勤めて、その正當の報酬として、勤務振を認めて酬いてくれられる人々の尊敬を得ようとするのは當り前の事と思つてゐた。私の執務の嚴密が、果して大使の苦情の正當な理由であつたらうか、それは言ふまい。併し、二人が別れるその日まで、唯それ丈を彼が口にしてゐたといふことは確かに言へる。

大使は自分の家の中をきまり好くしなかつたので、無賴漢が群をなしてゐた。此の家に居る佛蘭西人は冷遇されて、伊太利亞人が幅を利かせてゐた。おまけにその中で、永年の大使館員として功勞のあつた人達は、何れも無法に逐ひ出されたが、その中に確かペアチ伯とか云つた彼の首席扈從もゐた。この人は以前もフルレ伯の下で同じ席を占めてゐた人である。次席の人はモンテグ氏が引つ張つて來たマントヴァの惡漢、ドメニコ・ヴィタリといふ者で、大使は此の者に家政を任せて置いた。すると此の男は、阿諛と吝嗇とで大使を圍め込んでその寵臣となり、まだ幾人か殘つてゐた正直な人達、並びに其の上に立つ書記官に非常な打擊を與へた。正しい人の澄み切つた眼は、狡猾者に取つては不安なものに極まつてゐる。ヴィタリが私を憎むやうになるのには、

それ丈で十分だつたらう。それに未だ他の原因も加はつて、一層この憎惡の念を烈しくした。若し私が間違つてゐたら罪を受けるために、その原因を話さなくてはならない。

大使は習慣に從つて、五つの劇場の何處にも、棧敷を取つて置いた。毎日晝食の時に、大使は極まつて、その日行く芝居を指定した。次に、私が自分の座を擇び、他の側人達は亦たその外の座を極めた。私は出がけに、自分の擇んだ場席の鍵を持つて行つた。或る日ヴィタリが其の場に居ない時、私は自分の使つてゐる僕に私の示した家まで鍵を持つて來るやうに言ひつけた。ヴィタリは私の鍵を寄越させないで、自分がその席を占領して了つたといふことであつた。その返辭を僕が多勢の前でしたから、私の憤怒は一倍激しかつた。その晩ヴィタリは私に謝罪(あやま)ると言つたが、私は斷じて肯かなかつた。

「言譯なら、明日(あした)何時に、僕の侮辱を受けたあの家まで出て來て、その場に居合はせた人達の前でして貰はう、でなけや明後日(あさつて)、どんな事があらうと、君か僕か孰方(どちら)かが斷然此處を出て行くことにしよう。」

此の決然たる語氣が彼をへこました。彼は定められた場所へ、定められた時刻に出て來て、皆の前で、彼に相應しい意氣地のない謝罪をした。併し彼はゆつくり復讐の方法を考へた。私にはぺこ〳〵する所を見せかけて置いて、如何にも伊太利亞人らしく立ち廻つた。大使に勸めて私を罷めさせることが出來なかつたので、どうしても私の方から罷めて出なければならないやうにして了つたのである。

こんな淺ましい人間に、到底私を理解し得る氣づかひはなかつた。だが彼は私について、彼自身の目的に役立つやうな所丈は理解してゐた。私が好人物で、他人の過失に對して極端に寛大であることや、故意の侮辱に對してはつんとして、些とも我慢しないことや、禮儀と威嚴とを要する所には、それを重んずることや、他人に拂ふべき尊敬を忘れないやうに、私自身に受くべき敬意をも同樣に要求することを彼は理解してゐた。其處が彼の乘じた所であつた。そして終に私を絶望させて了つた。彼は大使の邸中をめちやくちやにして了つた。私が骨を折つて維持しようとした規律も、秩序も、清潔も、整頓も、悉く取り拂つて了つた。女つ氣の無い家では、普通よりも嚴重な取締をしないと、物事が整然(きちん)と行かない、隨つて威嚴にもかゝはることになる。彼は間も無く此の邸を、淫逸と放縱の住家、詐欺師と遊蕩兒の巢窟にして了つた。彼の逐ひ出した次席屋從の跡釜に、クルワ・ド・マルトで淫賣屋を開いてゐた彼によく似た樓主を据ゑた。そして二人がぐるになつて、その傲慢に相應する野鄙なことをした。固より整頓してゐる方でもなかつた大使の室の外には、家中何處の隅にも、眞面目な人間のゐられさうな處はなかつた。

閣下は晩餐を喰はないから、夕方私達や側人達丈で、別に食事をした。ビニイス以下も此處で一緒に喰つた。どんなけちな居酒屋でも、もつと清潔に、もつと體裁よく、もつと綺麗な食卓掛で、もつと增しな物が喰へる筈だ。此處でほたつた一つの眞黑な小燭臺と、錫の皿と鐵の肉叉とがある丈だ。內々の事なら恕すべきだが、私の自用のゴンドラまで、奪はれて了つた。他の諸大使の書記官連中で、ゴンドラを賃借したり、徒步で步いたりしなければならない者は私ばかりだ

つた。議院に出る時の外は、もう大使の扈從も私に隨かなかつた。それのみならず、邸の內幕で一つとして市中に知れないものはなかつた。大使の役員等は擧つて騷ぎ立てた。それらの事の唯一の源泉であるドメニコが、一番大聲に騷ぎ立てた。彼は私達が無作法な取扱をされてゐるといふことが、誰よりも私に一倍苦痛だといふことを知つてゐたからだ。私だけは、餘所では決して何事も喋らなかつたけれども、大使には是等の事や、大使自身の事について强く不平を鳴らした。ところが彼は裏面から彼の咒はれた惡魔に突つつかれて、日ごとに何か知ら新たな侮辱を私に加へた。私は他の同職の人達と釣合の取れるやうに、又私の身分相應に、費用が多くかゝるのに、自分の俸給を一錢も取り出すことが出來なかつた。で、大使に金を請求すると、彼は私への尊敬と信用とについて話す丈であつた、恰かもそんなものが私の財布を滿たして、一切の費用に充て得られるかのやうに。

大使の頭腦はこれまであまり良い方でなかつた所を、二人の惡黨が到頭全く狂はせて了つた。二人は絕えざる古物の賣買で主人を破産させて了つた。主人にいか物を掴ませて置きながら、ぼろ儲けが出來るもののやうに言ひくろめたのである。又大使にすゝめて、ブレンタ河に臨んだ大別莊を借り入れさせ、定めの借賃の倍額を拂はせて、その懸値を持主とで山分した。その各室はモザイクの裝飾が施され、ヴェネチヤ式の綺麗な大理石の圓柱や方柱が立つてゐた。それをモンテグ氏は、巴里の部屋はこんな風にするといふだけの理由から、見ごとに樅の薄板でそこら中を張り詰めて了つた。ヴェネチヤに駐在する他の諸大使とは獨り異つて、從者の帶劍を禁じ、奴僕

の杖を禁じたのも、やはり「巴里では」に由つたのであつた。單に私が忠實一遍に勸めてゐるといふ點から私を忌むやうになつたのも、恐らく同じ理由からであらう。一斑は知るべきである。

彼の輕蔑や亂暴や虐待が、その不機嫌からの事で、憎惡の念によるのではないと思つてゐた間は、私はそれを辛抱强く堪へ忍んでゐた。けれども、自分の勤勞に依つて得た名譽を剝ぎ取つて了ふ計畫を見て取ると直ぐ、私は職を擲つ覺悟をした。私の受取つた彼の惡意の第一の證據は、ヴェネチヤに居たモデナ公の一家を大使が請待しようとした時であつた。その折大使は私にその席へ出ることを差し止めた。私は氣を惡くしたが、腹は立てないで、每日大使と食卓を共にしてゐるのだから、若しもモデナ公が、同席は協はぬなぞと言はれても、閣下の威嚴及び私の義務としてそれに從ふ譯にはゆかない、と答へた。

「何だと。」彼は急き込んで、「扈從でもない書記官が、扈從たちすら同席しない、一國の君主の食卓へ出しやばらうといふのか。」

「然うですとも。閣下から授けられた私の地位は、自分が塞げてゐる間は、餘程貴いもので、扈從や、自稱扈從なぞよりも地位が上ですから、その人たちの出られない處へでも、私ばかりは出ていいのです。閣下が公會の席へ御臨場になる日には、私も儀式上、又古例に從つて、禮服でお伴を勤め聖馬可の宮殿で、閣下のお相伴で宴席に出られるのだといふ事は御存じの筈です。ヴェネチヤの大統領や議官達と、公けの食卓に就くことが出來、又就かなくてはならない者が、モデナ公の私宴に出ていけないといふ理由はないと思ひます。」

一言もあるまじい此の議論にも、大使は決して服しなかつた。併し私達は、再び爭論を繰り返す機會に出會さなかつた。モデナ公が竟に來ないで了つたからである。

この時から彼は絶えず私に嫌がらせや、偏頗な仕打を仕向けて來た。そして地位に附隨した些些たる特權を奪つて、可愛いヴィタリに與へようと努めた。出來る事なら、ヴィタリを私の代りに議院へまでも遣りたかつたのだらう。大使は大抵ビニイスを使つて、その室内で私信を書かせた。船長オリヴェの一件をモルパ氏に報告する手紙も、ビニイスに書かせた。その文中には唯一の主務者であつた私の事には一言でも言ひ及ぶどころか、その複本を提出した口供書作成の名譽を私から奪ひさへして、當時口も開かなかつたパチゼルの功にしてやつた。私を苦しめて自分の寵臣を喜ばさうとしたのだが、私を遠ざけようとは思はなかつた。前のフォロオ書記官は彼の事を吹聽して了つた人だが、此の人の後任のやうに、私の後任が然う容易く見つからないといふことは彼も知つてゐた。議院の回答の關係上伊太利亞語に通じ、一切の文書一切の事件を少しも大使に干渉させずに處理し、事務に勵精すると同時に下司野郎の扈從諸君等の機嫌も取れるやうな書記官が、彼には必要だつたのだ。だから大使は私を引き止めて置き、歸國するだけの金を渡さないで、私と彼との郷里から遠く引きつけて私を行き詰まらせようとしたのである。その遣り方が穏やかでさへあれば、或は彼の希望通りに行つたかも知れない。が、別の考を持つてゐて私に決心を迫らうとしたヴィタリが、その目的を達した。私は自分の一切の骨折が無效になり、大使が私の勤務を感謝しないで失態と見做し、家事上の不快と公務上の無法より外に、大使から期待

し得るものがなくなり、而も大使は一般の不評を受けてゐるから、彼が悪い事をすれば私に祟り、善い事をしても私の役に立ちさうもないのを氣附くと共に、私は決心して辭職を申し出た。但し、後任の見附かる迄は待つことにした。諾とも否とも返辭をしないで、彼はいつもの調子で濟ましてゐた。何事も良くはならず、本氣に後任者を捜すらしい樣子も見えないので、私は手紙を彼の兄に出して、私の理由を細かに語り、辭職を許して貰へるやうに賴んだ末、もうどんな事があつても、此處には居られないといふことを書き添へた。永い間待つてゐたが返事が來なかつた。私はそろそろ困り切つて來たところへ、大使ぱ到頭兄の手紙を受け取つた。手紙は隨分强硬なものであつたと見えて、何ぞといふと癇癪を起す大使だが、今度のやうなことは曾てなかつた。聽くにも堪へぬ悪罵を急流の如く私に浴せ掛けた後、最早言葉に窮して、私が暗號表を人に賣つたと誣ひた。私は嘲笑つて、此のヴェネチヤの何處の隅にか、そんな物に一文でも出す莫迦があると思つてゐるのですかと、嘲弄の氣味で問ひ詰めた。然う言はれて大使は泡を飛ばして怒り立つた。窓から私を放り出させるのだと言つて、人を呼び立てさうにした。それ迄私は冷靜だつたが、この威嚇で今度は私の方の憤怒が一時に込み上げて來た。私は扉に駈け寄つて、錠を卸して閉め切つてから、

「いけません。」私は儼とした足取で彼の方へ取つて返して、「あなたの召使どもの立ち入る事ぢやありません。お互ひきりで片附けませう。」

私の擧動と外貌が、忽ち彼を靜まらせた。驚きと怖れは彼の顏に現はれた。彼の怒のをさまつ

たのを見て、私は言葉寡なに暇を告げ、返辭も待たないで扉を開けて出た。そして悠々と控室の召使どもの眞ん中を通つて行くと、彼等は常例の通り起立した。彼等は主人によりも、寧ろ私に助勢したかも知れなかつた。私は自分の室にも上らないで、すぐと階段を降りて、二度と此の館門を這入らないやうにその儘出て了つた。

私は此の出來事を話しに、ル・ブロン氏の處へ眞直に行つた。彼は話を聽いて格別驚きもしなかつた、彼の人物を知つてゐたからである。彼は私を食事に呼んでくれた。卽席ではあつたが大したものだつた。ヴェネチヤに來てゐる名のある佛蘭西人は、打ち揃つて來た。大使の方には誰一人居ないのである。領事は來賓に私の事情を話した。それを聽くと、一人として大使の不都合を鳴らさないものはなかつた。大使は私の計算を濟ませなかつた。彼は一錢も呉れなかつた。私は持ち合せの二三十圓の外に何も無いので、歸國について困つてゐた。人々の財布は私の爲めに開かれた、私はル・ブロン氏から九十圓、サン・シル氏からも同じ位借りた。サン・シル氏は、ル・ブロン氏に次いで懇意にした人だ。その他の人達には禮を言つて謝絕つた。そして出發の時迄領事館の官房主事の處に泊つてゐた、世間一般が大使の不正の味方でないことを十分に證明するためだつた。大使は私が不幸の裡に款待されてゐて、大使ともある自分が、見棄てられたことを知つて激怒し、正氣を失つて、狂人のやうな振舞をし出した。遂には前後を忘れて、私を捕縛すべく議院へ請願するやうにまでなつた。その事をビニイスの通知で知つたので、明後日出發する積りでゐたのを延して、もう二週間ぐらゐ滯在することに決めた。私の進退は正當と認められ、

誰からも尊敬を受けた。執政官は大使の突飛な請願に答書すら與へなかつたと同時に、領事を通じて私へ、莫迦のすることなど氣に掛けないで、心まかせに何時までも、ヴェネチヤに滯在して居られるやうに、と傳へて來た。私は友人と會つてばかりゐた。西班牙大使へ暇乞に行つてそこで優遇を受けた。ナポリの公使フィノキエッチ伯爵を訪ねたら不在だつたので、手紙を出して置くと世にも親切な返事を呉れた。かくて私は出發した。金には困つてゐたが、殘した借金といへば、前に話した二口と、外にモランヂといふ商人からの百圓ばかりがある丈であつた。この金は、カリオが返濟を引き受けてくれた。カリオにはそれから度々出遇ふ機會はあつたのに、到頭それを返さずに了つた。が、あの二口の借金の方は、私の都合が附くと直ぐ、綺麗に返して了つた。

ヴェネチヤを去るに當つて、此の市の有名な娛樂を、せめて自分の滯在中に味はつた一部分なりとも一言話さずには置かれまい。私の青春時代には、年齡相應の歡樂、若しくは然う呼ばれるものを深くも求めなかつたことは前に話した。ヴェネチヤでも私の嗜好に變化はなかつた。併し私の職務が、——しかも此の職務がその變化を妨げたのでもあらうが——淡泊な娛樂の方を面白く思はせた。それを私は自分にも許してゐた。第一に一番面白かつたのは ル・ブロン、サン・シル、カリオ、アルツウナ、などの諸名士との交際だつた。もう一人フォルリの紳士、殘念にも名前は忘れたが、此の人の愉快な思ひ出には、今でも胸が躍る。生涯私の知つた人々の中で、この紳士の心が一番私のと酷似してゐた。又才能修養の豐かな、そして吾々同樣音樂に熱狂する二三の英吉利人とも交際した。斯ういふ人達には、それぞれ細君か、女友か、愛人かがあつた。そ

の愛人たちは悉く才藝を備へた女で、その家で音樂や舞踏が催された。ごく偶には賭博も行はれた。けれど旺んな感興、藝競べ、觀劇などが賭博を無趣味なものにした。賭博なぞは退屈してゐる者の慰みに過ぎないものだ。伊太利亞音樂に對して巴里人の持つ偏見を、私も巴里から抱いて來てゐた。けれども又、偏見の抵抗出來ない、かの鋭敏な鑑賞力をも自然から賦與されてゐた。で私は此の音樂を鑑賞し得る人の感受する情熱を、直ぐとこれに對して持つやうになつた。私は櫂歌を聽いて、今までに歌ふのを聽いたこともないものだと思つた。それから私はオペラに夢中になつて、一心に聽きたく思ふ時は、多勢が棧敷で喋つたり、喰つたり、賭博を打つたりするのが煩くなつて、自分だけ仲間をはづして脇へ退いた。其處で唯獨り自分の場席に閉ぢ籠つて、演技の長いのもかまはず、終まで心おきなく聽くことの快樂に耽つた。或る時、聖クリゾストオム座で、自分の寢床で眠るよりもつと深く寢込んで了つたことがある。高聲な、花やかな詠嘆調も、更に私を醒まさなかつた。しかし私を醒ました曲のしつとりした和聲、天使の妙音ともいふべき旋律が、私に與へた快い感じを誰が說明し得るだらう。私が耳と目とを同時に開いた時、何たる目醒め、何たる歡喜、何たる法悅だつたらう。私は最初自分は天國にゐるのかと思つた。此のすばらしい曲を今も覺えてゐるが、一生忘れることはあるまい。その歌詞の冒頭は斯うだ。

Conservami la bella
Che si m'accende il cor.
救へ手弱女、

ときめく心を。

私はこの曲が手に入れたかつた。それを得たので、長いこと保存して置いたが、私の腦裡に印せられた通りに紙の上には現れてゐなかつた。樂譜は同じでも物は同じでなかつた。この神曲は私の腦中でなくては、決して演奏することが出來ない。かの私の目醒まされた日には實際然うであつた如くに。

オペラの音樂よりも一段優れた、そして伊太利亞にも何處の世界にも比類があるまいと思はれるのは、スコオラの音樂である。スコオラは貧しい少女を敎育する爲に設立された慈惠院で、共和國政府からは、後にそれらの少女に、結婚のため、又は捨身のための資金を支給することになつてゐる。少女に課する科目では、音樂が第一位を占めてゐる。日曜日毎に、四つのスコオラの敎會堂で、晩拜式の間に、大合唱と大管絃樂との伴なふ經文歌がある。伊太利亞での大家の作曲、指揮によつて、格子の嵌つた講壇で、二十歲とは越えない少女ばかりで演奏するのである。これぐらゐ實感的で、これぐらゐ人を動かす音樂があらうとは思へない。技巧の豐麗、曲趣の微妙さ、肉聲の美、演奏の正確、さういつたものが相集つて、この快い合奏の中に、一種の印象を生ずるのである。この印象は決して衣裳の美から來るものではない。それでゐてこの印象と沒交涉でゐられる人はあるまいと思ふ。カリオも私も、この貧民群の晩拜式を缺かしたことはなかつた。又これは私達ばかりではなかつた。會堂は何時もアマチュアで一杯になつてゐた。オペラ座の俳優さへ、此の優れた模範に依つて歌謠の本當の趣味を學びに來た。唯遺憾なのは、あの忌まゝし

い格子である。それが爲に聲ばかり聞えて、その聲にふさはしい美の天使の姿は、私には隱されてゐる。私はそればかりを言つてゐた。或る時ル・ブロン氏の家で此の事を話すと、

「そんなにあの小娘どもが見たければ、譯のない話だ。僕は彼處の管理者の一人だから、あれらと一緒にお茶でも飲むやうに取り持たう。」

彼が此の約束を果たすまで、私は彼をぢつとさせて置かなかつた。渴望し切つてゐた、これ等の美神の閉め籠められてゐる樂屋へ這入つて行くと、私は今までに覺えのない愛の戰慄を感じた。ル・ブロン氏は、聲と名前だけ私には聞き馴染の、世に聞えた歌女たちを、一人づつ紹介してくれた。

「さあソフィイ……」

それは驚くほど醜い女であつた。

「さあカッチイナ……」

それは眇目であつた。

「さあベッチイナ……」

痘痕が此の女の相好を崩して了つてゐた。どの娘も娘も、何處かにひどい申し分のない者はなかつた。人の惡い領事は、私の痛ましい驚きを笑つてゐた。それでも二三人は稍增しなやうに思はれた。が、然ういふのに限つて、合唱の中でないと歌が唱へなかつた。私は失望した。彼女たちはお茶の間に調戯はれると、みんなはしやいだ。醜さは必ずしも愛嬌を斥けない。私はその例

を彼女達に見出した。私は斯う思つた。「靈が無くてはあゝ唱へるものでない。あの女達にはそれがあるんだ」と。到頭私の彼女達を見る見方が飜然と變つて、歸りがけには是等の醜女共が皆戀しくなつて了つた。私は重ねて晩拜式に出る勇氣もなくなりかけてゐたが、しかしもう安心が出來るやうになつた。やはり彼女達の唱歌を快く聽いた。そしてその聲がその容貌を遺憾なく化粧したために、彼女達の唱つてゐる間、私は自分の眼に拘らず、彼女達を美人だと思ひ込んでゐた。

伊太利亞で音樂には何程の費用も掛らないから、音樂に嗜好さへあれば控へ目にしてゐる必要はない。私はクラヴサンを一臺借り込み、僅か二圓ばかりで四五人の合奏者を自宅へ呼んで、一週間に一度づつ、オペラで聽いた中の面白さうな曲を、自分で演奏して見た。又自作の「粹詩神」中の或る交響體を試演させた。此の曲が面白かつたからか、或はお世辭のつもりでか、聖クリゾストオム座の舞曲の教師が、その中の二曲を懇望して來た。二曲共嬉しいことには此の壯大な管絃樂部で演奏され、ベッチイナといふ娘が踊つてくれた。この美しくて殊に可愛いベッチイナは、西班牙人のファゴアガといふ私達の友人の世話になつてゐたから、私達は時々夜遊びに行つたものだつた。

ところで又女の話になるが、ヴェネチヤのやうな市では、女を憤んでゐられるものでない。君はその點で懺悔する事がないのか、といふ人もあらう。全く私にも然ういふ話はある。で、今までの話と同じやうな率直さでその懺悔を始めよう。

私はいつも黑人の女は好まなかつた。がヴェネチヤでは、手の屆くところに素人の女はゐなか

つた。それは此國の家々の多くへは、私の地位上、出入が止められてゐたからである。ル・ブロン氏にはごく可愛い娘たちがあつたけれど、容易に接近が出來なかつた。その上私は娘たちの父母を尊敬してゐたので、渇望しようとすら思はなかつた。

それよりも私は、普魯士王の官吏の娘でカタネオ嬢といふ若い女が氣に入つただらう。ところが此の女にはカリオが戀してゐて、もう結婚談まで持ち上がつてゐた。カリオは自由の利く身分だが、私は無一物だ。彼は年俸一千圓の、私はたつた四百圓だ。それに私は友人と競爭するのを望まなかつた上、何處に限らず、殊にこのヴェネチヤで、私のやうな空虛の財布を振り廻しながら、女に浮き身を窶すものでないことを承知してゐた。私は自分の欲を轉回させる不幸な習慣を失つてゐなかつた。そして氣候が促すその欲も、事務の忙しさに紛らされて、一年の餘も此の市に居ながら、巴里にゐた時と同樣の清淨さを保つた。そして丁度十八箇月目に此處を去るまでの間、唯二回しか異性に接したことがなかつた。それは斯ういふ妙な機會からだつた。

第一回目は、彼のヴィタリといふ正直者の斡旋によつたので、それは私が彼に迫つて、あらゆる形式の下に私に謝罪させた後、暫く經てからである。卓上でヴェネチヤの遊興話が出た。人々はヴェネチヤ女郎の氣の利いたことを讃め上げて、何處の國へ行つても、これに並ぶ女は決してないと言つて、此の最上の快樂に對する冷淡を私に責めた。ドメニコは私に、多勢の中の選り拔きを馴染に持たなくてはいけない、自分が案内の勞を執る、君は必と滿足するだらう、などと言つた。私は此の親切な勸めに失笑した。それに尊敬すべき老ベアチ伯は、伊太利亞人には珍しい

率直さで、女を買ひに行くのに自分の敵に案内させるとは、君にも似合はないではないかと言つた。固より私はそんな望も誘惑も感じてゐなかつたのに、どういふ譯か自分でも解らないいつもの私の矛盾から、自分の嗜好にも、心情にも、理性にも、意志にまで逆らつて、見す見す引き入れられて了つた。それはたゞ意志の弱さと、疑心を見せるのを恥ぢたのと、それから此の國でよくいふ「あんまりな意氣地無しと思はれたくないために」とであつたのだ。押し掛けて行つた家のパドヴァ女は、可なり綺麗な、美人と云つてもいい女だつたが、私の好きな美人ではなかつた。ドメニコは私を其家へ置いて行つて了つた。私はソルベットを命じたり唄を謠はせたりして、半時も經つた頃に、卓の上へ銀貨を置いて歸りかけた。ところが女は、勸めを果さない内は此の金は欲しくないと、妙に遠慮をするので、私も妙に莫迦な考を出してその遠慮を除いてやつた。歸る途中、自分は病氣に感染したものと一圖に思ひ込み、歸つてからは、何はさて置き醫者を呼んで藥を求めた。格別これといふ異狀もなく、それを確かめる何の症候もないのに、三週間受けた精神の不安は譬へやうもなかつた。パドヴァ女の腕から無難に免れて出られようとは私に思へなかつたからである。醫師も私に安心させようと思つて、いろいろ骨を折つた。彼は終に、私の體質が滅多に病毒に感染しないやうに出來てゐるのだと言ひ聞かせて、始めて私を落ち着かせることが出來た。なる程、私は此の方の經驗は、人よりもずつと少かつたが、此の病に罹つた事が曾て無かつた處から見ると、醫者の言つたことが正しかつたのかとも思はれる。けれどもこの意見は、決して私を無謀にはしなかつた。そして縱しその樣な天祐が實際私に具はつてゐたにしても、

私はそれを濫用しなかつたといふことが出來る。

もう一つの艶話も、同じく賣女との關係ではあつたが、發端も結末も、前とは全く譯の異つたものだつた。船長のオリヴェが私を船に請待して來たので、西班牙の書記官を連れて行つたことは前に話した。私は禮砲を豫期してゐた。船員は整列して私達を迎へたが、一發も放たない。不滿らしい樣子をしてゐるカリオの手前、私はひどく顏を潰された。吾々以下の人達に對してすら、商船では禮砲を放つことになつてゐたのである。のみならず、私は船長から特別の待遇があつていいものと考へてゐたのである。私は何氣ない體を裝つてはゐられなかつた。これが何時もの私の癖だ。饗應は鄭重でも、オリヴェの接待振は慇懃でも、私は初めから不機嫌で、喰ふ物もあまり喰はず、口も碌々利かないでゐた。

それでも第一の乾盃の頃には、禮砲を期待してゐたのに、何もない。私の意中を看拔いたカリオは、私が子供のやうにぶつ〳〵言つてゐるのを見て笑つてゐた。宴會がやや酣にならうとする時分に、ゴンドラが一艘近づいて來た。

「さあ、」船長が私に言つた。「お氣をつけなさらないと、敵が其處へ見えましたよ。」

何の事かと訊いて見ても、彼はふざけてゐて答をしない。ゴンドラは舷側へ着く。中から飛びきり派手な扮裝をした、おきやんらしい、目の醒めるやうな女が出て來て、三足ばかり飛んだと思ふと、もう船室の中に這入つてゐた。そして食器がその前に並ぶか並ばない間に、もうちやんと私の傍に坐つてゐた。快活と魅力に滿ちたせい〳〵二十歳位のブリュネットである。伊太利亞

語ばかり話すのだが、詞の調子だけで私の氣が茫となりさうだ。喰べながら、話しながら、私を眺めてゐたが、ふつと私を見つめて、

「あらまあ、ブレモンさん。お久し振ねえ。」

と叫ぶと共に、いきなり私の兩腕の間に身を投げる、自分の唇を私の唇に押し附けて、息の塞まる程私を抱き締める。東洋風の黑い大きな眼が、私の胸を目蒐けて火箭を射掛けた。初めの內こそ驚きに牽制されてゐたが、忽ち私は慾情に擒はれて了つて、他人の前とも云はず、女の方から却つて私を制止しなければならない程にまでなつた。私は醉つて了つた、むしろ狂つて了つたのである。やがて彼女は、私がその思ふやうになつたのを見屆けてから、その媚愛は幾分手柔かにはなつたが、快活さは變らなかつた。そして、よい時分を見すまして、先刻からの性急の、眞かそれとも嘘の原因を話し出した。それに據ると、全く私がトスカアナの稅關長ブレモンといふ人と見違へる程よく肖てゐたのである。彼女は此のブレモンに熱くなり、今もその通りだが、自分が莫迦でその男を棄てて了つた、後釜には私を据ゑる、私を愛さうと思ふ、それが彼女に都合がいいからだ。それと同じ譯で、私も彼女を、彼女に都合のいい限り愛さなければならない、そして彼女が私に愛想を盡かして了つても、あの戀しいブレモンがした通り辛抱しなければならない、と言ふのである。その言つた通りの事が事實になつた。彼女は私を僕同樣に自分の物にして了つた。手套や、扇子や、帶や、頭巾までも私に持たせた。それ彼處へ行け、其處へ行け、これをしろ彼をしろと、一々指圖通り私は從つた。私のゴンドラに乘りたいから、自分のは返して了つて

くれと言ふ、それも唯々。私の席を空けてカリオに坐つて貰つてくれ、話したい事があるからと言ふ、これ亦唯々。二人は長い間ひそひそ話し合つてゐたが、私は打つちやつて置いた。彼女は私を呼ぶから行つて見ると、

「ねえ、ツァネットオさん、あたし佛蘭西流に愛されるのは御免だわ、あれは面白くないことよ。厭になつたら直ぐおさらばですよ。宙ぶらりんはお止しなさいね。ね、きつとよ。」

食後私達はムラノ(一)の玻璃製造所を觀に行つた。彼女はいろんな裝飾品を買ひ込んで、金は無遠慮に人に拂はせた。かと思ふと、私達に拂はせた額より、もつと餘計な酒代を、方々で蒔き散らして行つた。彼女が一切無差別に自分の金も棄て、人の金も棄てさせたところは、金は彼女に取つて何の價値もないもののやうに思はせた。金を人に拂はせたのも、金が惜しくてよりも見得から來たことに違ひない。彼女は他人が自分の好意に對して置く價値を得意に思つてゐたのだ。

(一) ヴェネチヤ潟の一島市、中世以降、玻璃製造で著はれてゐた。

日暮れ方、私達は彼女をその家へ引つ張つて行つた。話をしてゐる間、私は鏡臺の上に拳銃が二挺置いてあるのを見つけた。

「おやおや、」と私は言ひ言ひ一挺取上げて見て、「これは新しい飛道具だが、一體何に使ふんだ。お前にはこれよりもつとよく打てる武器があるぢやないか。」

などと云つたやうな冗談が濟んでから、彼女は、更にその愛嬌を强めるやうな、自然な誘りを見せて、斯う私達に言つた。

「あたし自分の惚れてゐない男の機嫌を取つた時は、悒々するから埋合せをさせてやるの。それが當り前ぢやなくつて。だけど、じやらつくぐらゐは我慢しても、失敬な事をすれや我慢しない積りよ。他を莫迦にすれや、誰でも用捨しないわ。」

別れ際に、明日の再會の時刻をきめた。私は彼女を待たせては置かなかつた。彼女は南國でなくては見られない、意氣とも何とも云ひ樣の無い寢衣のやうな着物を着てゐた。私はそれをはつきり思ひ出せるけれど、細かく描き立てて一人で樂しむでもあるまい、唯その袖口と襟元に、薔薇色の柔毛の附いた絹絲の繡飾がしてあつたことだけを言つて置かう。それが美しい皮膚を引き立てるやうに思はれた。後にそれがヴェネチヤの流行であることを知つた。その如何にも人を引きつける力のある處から、私は此の流行が何故佛蘭西に這入つて來なかつたかを怪しんだ。私の想像にも及ばなかつた程の歡樂が、私を待ち受けてゐた。私は前に、今も思ひ出しては時々感ずる恍惚の裡に、ラルナアジュ夫人の事を話したが、このヴリエッタと比べて、何といふ夫人の老い込んで醜くて、冷淡なことだらう！　此の麗性の女の魅力と愛嬌とを、いくら想像しようとしても實際を距ること甚だ遠くて終るだらう。修道院の處女でもこんなに艶かではないし、土耳古の宮女でもこんなに生々としてはゐないし、天國の神女もこんなに刺激的ではない。こんな甘美な悦樂は、此の世の人の心や官能の上に、決して與へられるものではない。あゝ、せめて一刹那でも此の悦樂を十分に味はひ切ることが出來たら、……私は味はつた、併し魅力無しに味はつた。私はそのあらゆる愉悦を弱めて了つた。我が心からそれを殺して了つた。といふよりも、自然は

享樂の出來るやうに私を造つてなかつたのである。自然は此の言語に絶する幸福の毒汁を私の纎な頭の中へ流し込んだのである、その幸福に對する欲望を私の心には持たせて置きながら。

私の性質を遺憾無く説明するに足るやうな出來事が、私の生涯中にあるとすれば、次に話さうとするのがそれである。今此の書物の目的を力強く喚び起すにつけても、私はそれを果たすことを妨げるやうな、僞りのお行儀を慮まなくてはならない。何人を問はず、一個の人間を知りたいと思ふ人は、姑く忍んで次の三四頁を讀んでみ給へ、ジャン・ジャアク・ルソオといふ者を、殘す處無く知ることが出來よう。

私は一人の娼妓の室を、愛と美との神殿と思つて這入つて行つた。私は彼女のからだを神體のやうに思つた。尊敬の念がなくて、彼女の與へたと同じやうなことが感じ得られるものとは信じなかつたであらう。段々と打ち解けて、彼女の愛嬌と媚愛との値打が分ると直ぐ、私は前もつてその實を失ふことを心配して、急いでそれを摘み取らうとした。すると火焔に身を燒かれることと思ひの外、俄然私は總身に、極度の冷たさの流れるのを感じた。足がぶる〳〵震へ、氣が遠くなつてぶつ倒れ、子供のやうに泣き出した。

此の涙の原因と、その時の私の思つた事とを誰が言ひ中てられよう。私は斯う思つたのだ。自分の自由にしてゐる此のものは、自然と愛との傑作で、精神も肉體も完全なものだ。愛すべく美しいだけ、善良で寛大でもある。貴人も王公も彼女の奴隷となつていいのだ。王者の笏は彼女の足下にあつていいのだ。それにどうだ、これが誰の言ふことでも肯く淺ましい賣淫婦だ。商船の

船長も彼女を自由にする。私の首へも飛びついて來る——無一物の人間と分つてゐる私、どんな價値のある人とも、彼女が知らう筈もなければ、知つたからとて彼女に取つては何でもない私だ。合點の行かないのは此處だ。私の心が、自分を欺き、判斷力を奪ひ、私を穢れた醜業婦に瞞された者にしたのか、さうでなければ私には分らない或る祕密の缺點が、女の魅力の效果をぶち壞し、彼女を引つ張り合はなければならない人々に、却つて厭はしいものとしたのに違ひない。私は非常に苦心してその缺點を探し出さうとした。而も黴毒がその一つの原因でないかといふことすら、心に浮ばなかつた。その艶やかな肉附き、麗はしい色澤、眞白な齒列、快い息づかひ、全身に行き渡つた清淨さが、全く此の考を逐ひ除けて了つた。それ故、前のパドヴァ女郎との一件以來、未だ自分の健康について懸念を持つてゐた私は、却つて彼女に病氣をうつしはすまいかと自分で遠慮をしたのである。そして此の事では、自分の信頼に間違ひはないものと思ひ込んでゐた。

此のやうな考が丁度その時に起つたので、それに激して私は泣かされたのである。ヅリエッタに取つては、この場合のこの光景は全く意外で、暫くは呆れてゐた。併し彼女は室内を歩き廻つて鏡の前に來た時に、今の狂態は決して自己に對する嫌惡の念から來たのでないといふ事を悟つた。私も眼顏で然う彼女に確めてやつた。彼女は容易く私の氣を靜め、且つ極りの惡さを取り除けることが出來た。ところが、今や私が、男の唇と手とに觸られるのが初めてかと思はれるやうな彼女の胸の上へ、夢中で倚つかゝらうとする途端に、その乳房の一つが萎び切つてゐるのを發見した。私ははつと思つて、よく見ると、片方の乳房とは、似もつかない恰好をしてゐる。私は

どうして乳房が萎びるものかと考へ廻した。そして、何か著しい先天性の惡疾に基づくものと思ひ込み、此の考を捏ね廻してゐる内に、自分の想像し得た最上の美人の積りで抱いてゐたのは、實は自然の、人間の、又愛の廢物である一種の怪物に過ぎなかつたのだといふ事を明瞭に知つた。私は何處までも莫迦で、萎びた乳房の事を彼女に話した。女は初めの中は冗談にして了つて、そのふざける癖で、私を惱殺するやうなことを言つたりしたりしてゐた。しかし、彼女に隱すことの出來ない私の不安の根を其の儘にしてゐる内に、彼女は顏を赧くして、身繕ひして、ついと立つて、一言も言はないで窓の所へ坐りに行つた。私がその傍へ寄らうとすると、又飛び退いて、ソファアの上に腰を卸した。が、直ぐにまた立ち上がつた。そして扇子を使ひながら、室の中を歩き出して、冷かな蔑むやうな調子で、私に斯う言つた。

「ツァネットさん、女なんか構つてゐないで、算術でも勉强するがいいわ。」

別れ際に、復た明日遇はうと言ふと、三日目にしませうと言つて、意味有りげな微笑とともに、些とお休みなさらないと、と附け加へた。その間の焦躁しさといふものはなかつた。胸の中は、女の魅力と愛嬌で一ぱいになり、自分の狂態を悔い、自らそれを責め、自分の心掛け一つで生涯の最も甘美なものに出來た瞬間を、滅茶々々にして了つたことを殘念に思つてゐた。その損失を取返す機會を待ち焦れながら、一方又、自分で解決はしてゐたにも拘らず、この崇拜すべき女の完全さと、その境遇の下劣さとを調和することが不安でもあつた。私は約束の時間に女の家へ飛んで行つた。彼女の熱烈な氣質が、此の訪問に、一層の滿足を感ずるかどうかは分らない。けれ

ども彼女のプライド丈は滿足するに相違ない。それに私は、自分の粗忽の詫び方を知つてゐたことを、何としてでも彼女に見せることが出來ると思つて、前以つて樂しんでゐた。しかし女は此の試しを私にさせなかつた。舟が着くと彼女の家へ使に遣つた舟子の返辭に、彼女は昨晩フィレンツェへ發つて了つたと言つて來た。女を自由にしてゐて、それ程戀しく思はなかつたにしても、彼女を失つて見て、痛ましくもその戀しさを思ひ知つた。私の愚かな未練は、決して私を去らなかつた。けれども我慢の出來なかつたのは、正直のところ、彼女が、私のことでは、人を莫迦にした記憶だけしか持つて行かなかつたことである。

是が私の二つの艶物語である。ヴェネチヤでの十八箇月(二)間には、外にこれといつて話すやうな事が起らなかつた。强ひて云へば、ほんの計畫が一つあつただけだ。カリオは色男であつた。いつも他人に縛られた女の處へばかり通ふのに飽きて了つた彼は、自分の專有物が一人欲しいものと考へ出した。そして彼と私とは一身同體の間柄なので、彼は、ヴェネチヤで誰でもするやうに、共同で一人の女を圍つて置く相談を持ちかけて來た。私はそれに同意した。第一安心の出來る女でなくてはならない。カリオが懸命に搜し廻つた末に掘り出して來たのは、まだ十一か二位の小娘で、酷い母親が、それを賣らうとしてゐたのであつた。私達はその娘を見に行つた。私はその子を見て可哀さうになつた。ブロンドの、小羊のやうに素直な、伊太利亞の者とは見えないやうな娘だつた。ヴェネチヤは至つて生活費の廉い國なので、私達は僅かな金を母親に遣つて、

娘の養育費にさせた。娘は聲がよかつた。私達は金儲けの藝を授けてやらうとして、一臺のスピネットと、一人の唱歌教師とを與へた。此の一切の費用が、月々一人前十圓までかゝらなかつた。それで他の失費が餘ほど助かつた。併し娘が年頃になるのを待つてゐなくてはならないのだから、實を摘むまでには隨分種子を播す譯だつた。それにも拘らず、毎晩子供の所で時間を過ごして、他愛無く喋つたり、蝶けたりして滿足してゐた。恐らく私たちが、女を自分の意に從はせたよりももつと愉快に遊んだ。最も強く吾々を女に引き附けるものは、淫逸よりも、その女と暮らす間の或る興味だといふのは、いかにも事實である。いつとなく私の心は、この小いアンヅォレッタに引きつけられた。が、それは父としての愛で、官能の欲は殆ど交つてゐなかつた。それ故、その愛が濃くなればなる程、それ丈私は此の欲を交へることが出來なくなるのであつた。そればかりでない、此の娘が年頃になつた時、私がそれを弄ぶなら、忌まはしい不倫の罪を犯すやうな戰慄を感じたことだらうと思つた。善人カリオの感じも、知らず識らず、私と同じ傾向を持つて來た。私達は何とも思はずに、最初に考へた快樂よりは味の劣らない、而もまるで質の違つたものを樂しんだ。縱し此の可憐な女が、後にどんな美人になつても、私達は斷じてその純潔を汚すことなく、却つてそれを擁護したことだらうと信ずる。程なく私の身の上に變動があつた爲に、私はこの美しい仕事の仲間入が出來なくなつた。で、此の件については、唯自分の心持だけを誇る外はなくなつた。復た旅行談に移らう。

(一) 十八箇月でなく、一七四三年九月四日から一七四四年八月二十二日までの一箇年である。

私がモンテグの邸を出る時の最初の積りでは、ジュネエヴに引込んで、色々な邪魔を拂つて、哀れな母と再會し得る好機を待たうと思つたのである。ところがモンテグ氏との爭論からの反響と、其の顚末を宮廷に通知した彼の莫迦とで、勢ひ私自身に自分の行爲を其の筋に報告し、且大使の狂態をも訴へに出かけて行く決心をしなければならなくなつた。私はヴェネチヤから、此の決心をテイユ氏に知らせた。これは、アムロ氏の歿後、臨時外務大臣を勤めてゐた人である。此の手紙を出すと同時に私は出發して、ベルガモ、コモから、ドモ・ドッソラを通つて、サンプロン峠を越えた。ションでは佛蘭西駐紮の代理公使シェニョン氏が懇篤に待遇してくれた。ジュネエヴではラ・クロジュウル氏が、亦同樣に待遇してくれた。此處で私はゴフクウルとの舊交を溫めた。此の人からは受け取る筈の金があつたのだ。ニョンは素通りして父には遇はなかつた。遇つても詰らないと思つてではなく、繼母が祿に私の言ふことも聽かないで、今度の災難をかれこれいふだらうと思つて、顏出しをする氣になれなかつたのである。父の舊友である書店のヂュヴィヤアルが、その不心得を嚴しく私に責めた。私はその譯を話した。そこで、繼母には顏を合はさないで、この不心得を取り消すため、馬車で二人はニョンに着いて、旅籠屋に這入つた。ヂュヴィヤアルは父を呼び出しに行つてくれた。父は息急き走つて來て、私を抱いた。吾々は晩餐を共にした。そして私にはしみ〴〵懷かしい一夜を過ごしたが、翌朝私とヂュヴィヤアルは連れ立つて、又ジュネエヴに歸つて來た。此の時のヂュヴィヤアルの好意はいつも感謝してゐる。

里昂を通るのは近道ではなかつた。が、私はモンテグ氏の或る卑吝しい不正事件を確めるため

に、其處へ立ち寄ることにした。私は曾て金絲で刺繍をした胴衣一枚、カフス二三對、白絹の靴下六足を入れた小さいケエス一個を、巴里から送らせたことがあつた。モンテグ氏の勸めで、私はそのケエス、といふよりも小箱を、彼の荷物と一緒に差し立てさせた。私の俸給を支拂ふのに、彼は手づから作つた大業な書出しの中に、その小箱を大樞とし、その目方を百四十貫にも附けて、法外な運賃を私に持たせた。ロガン氏の紹介によつて、その甥のブワ氏の骨折で、謂はゆる大樞の目方が實際五六貫しか無かつたといふこと、從つてそれに相當する運賃丈しか拂つてゐないといふことが、里昂と馬耳塞との稅關の帳簿で證明された。私は此の證明書をモンテグ氏の書き出しと綴ち合せた。そしてこんな書類や、その外これと似た色々な書類を携へて、それを役立たせることをあせりながら、巴里へ行つた。此の長い道中に、コモや、ヴァレや、その外でも、多少珍談が無いではなかつた。いろいろ見物もした。殊にボルロメオ諸島(一)などは書き立てる價値は十分あつた。併し、今は時間が許さない上、探偵どもが私につき纏つてゐるために、時間と落ちつきとの必要な此の仕事を、大急ぎで不完全に書き上げて了はなければならない。若し他日神護に由つて、もつと穩かな日が私に稟まれたならば、なるべくそれを、此の本を書きかへる爲に費したい。少くとも、非常に必要だと思つてゐる補遺だけでも書き足したいと思ふ（原註。私は此の計畫を斷念した）。

（一）亞爾伯の南端なるマッジョオレ湖の西岸近くに位する島群。イソラ・ベルラや、イソラ・マドレなどが、その内で最も名高い。探偵云々のことは後文で明かになる。

私の辭職一件の風評は、私よりもお先へ來てゐた。で、到着して見ると役所々々は固より、世間でもみんな大使の狂態を罵つてゐることが分つた。それにも拘らず、ヴェネチヤでの輿論にも拘らず、又私の提供した、否を言はせぬ澤山な證據にも拘らず、私は少しも正當な批判を得ることが出來なかつた。滿足も賠償も得られないのみならず、俸給の件は大使の意思に委せられさへした。そしてそれは唯私が佛蘭西人でないから、國家の保護を受ける權利がないといふ事と、此の件は大使と私との間の私事に過ぎないといふ事の理由からであつた。人は皆私の侮辱されたこと、侵害されたこと、不遇なこと、大使の殘忍で不正な無法者であること、此の一切の事件が永遠に彼の恥をさらすものであることを、私と共に認めた。併し如何にせん、彼は大使であり、私は一書記官に過ぎなかつた。社會の秩序、若しくは然う呼ばれるものは、私が正當な批判を得ないことを望むのである。そして私は全くそれを得なかつた。私は斯う想像した、自分が喧しく騷いで、あの莫迦を莫迦に相應するやうに公然と取り扱つたら、私は遂に口を噤ませられるかも知れない。それこそ此方の望む所だ。判決の濟むまでは斷じてその命には服すまいと決心した。併しそれは丁度外務大臣のゐない時だつた。みんな私を呶鳴るまゝにして置いた。私に嗾をかける者さへあつた。一緒になつて吠え立てる者もあつた。けれども事件は相變らずそのまゝだつた。結局私は、いつも道理は自分にありながら、どうしても正當な批判が得られないのにがつかりして、遂に勇氣を失ひ、その儘泣き寐入つて了つた。

私を冷遇した女、しかも此の不正當を一番豫期しなかつた唯一の女は、ブザンヴァル夫人だつ

た。階級や門地の特權といふことで固まつた彼女には、大使ともある者が部下の書記官に不都合をしたなどとは考へられないことだつた。私への待遇は此の偏見に基づいたのである。私はひどく癪にさはつて、其の邸を出るとすぐ、滅多に書かないやうな激烈な手紙を出して、その後は決して其邸に足踏みもしなかつた。神父カステルはまだしも親切だつたが、これとても陰險なお世辭の間から、彼等社會の大鐵則の一つである弱者は常に強者の犠牲、といふことを忠實に守つてゐるやうだつた。自分の方の正義についての強い感情と、私の天性の尊大とは、此の不公平を永く忍ばせては置かなかつた。私はカステルを訪問しなくなつた。同時に、彼の外に知つた者もなかつたので、エスイタ僧の處へは行かなくなつて了つた。のみならず、善良な神父エメの純朴とは正反對な、此の教友等の專制的な、そして策略的な精神は、全く私に彼等との往來を絶たせて了つた。で、其の後私は、誰とも顏を合はすことがなくなつたが、唯デュパン氏の家で二三度會つた神父ベルチエ丈は例外だつた。此の人はデュパン氏と共に、全力を擧げてモンテスキュウ(一)の駁論を書いてゐた。

(一) Montesquieu. 十八世紀の前半に出で、ヴオルテエル、ルソオに先だつて傳統的習俗の上に批判的な考察を向けた偉大な啓蒙學者。その主著「法の精神 De l'esprit des lois」は廣汎な歴史を材料とした歸納的な法制の新研究で、その思想は「法とは、最廣義に於いて、事物の本質より生ずる必然的なる關係なり」の一語に包括せられる。本書はルソオの「民約論」を豫告するものと稱せられてゐる。一六八九—一七五五。

モンテグ氏の話で殘つてゐる丈の事は、二度と言はないでもいいやうに、皆片附けて了はう。彼と喧嘩した時私は、貴君には書記官なぞ要つたものでない、代證人の書記で澤山だ、と言つたことがあつた。彼は私の言葉に隨つて、私の後任には本物の代證人を据ゑた。すると一年も經たない内に此の男は、大使の金を一萬圓ばかり盜んだ。彼はその男を放逐して禁錮を喰はせた。又散々な悪評や醜聞と共に側人達を放逐し、到る處で喧嘩を買ひ、奴僕でも忍びないやうな侮辱を受けた。そして遂に癇愚のために、佛蘭西に召び戻されて田舍に逐つ拂はれて了つた。彼が宮廷から受けた懲戒の中に、私との一件も洩れてゐなかつたことは明かだ。それがためか、巴里へ歸ると間もなく、その家の執事を寄越し、私へ仕拂の決算をして金を置いて行かせた。その時私は金に困つてゐた。ヴェネチヤでの借金、いはば名譽の負債が、始終心の重荷になつてゐた。私はそんな借金や、ツァネットオ・ナニの借用に對する支拂を濟すために現れた此の方便を利用した。遣らうといふ金を私は受け取つた。借金はみんな返した。そして又もとの一文無しになつて了つたけれど、堪へ難かつた重荷がすつかり下りた。それからは、モンテグ氏の事に就いては、彼の死亡を噂で知るまで何も聞かなかつた。神よ、此の哀れなる者に安息を與へ給へ。彼は、子供の時の私が法律家に適任だつたといふ意味で、大使に適任だつたのだ。とはいへ、私の精勤のお蔭で無事にその地位を保つたのと、昔グヴォン伯が私について豫言した境遇へ急に私を押し出したのとは、全く彼の力であつた。但し、その境遇に自分が相應するやうには、後年私が自分獨りで仕上げたのである。

私の告訴が正しいのに無效になつたといふことは、ばか〳〵しい社會制度に對する義憤の芽生を私の心に植ゑつけた。此の制度では、まことの民福とまことの正義とは、常に漠とした表面的

な秩序の犠牲となるのである。表面的な秩序とは、即ちあらゆる眞の秩序を破壞するものであり、且弱者の抑壓と强者の横暴とに向つて公權の認證を與へるに過ぎないものなのである。併し、此の時だけは、此の芽生は二つの原因から、後日のやうに生長することを妨げられた。一つは私自身が該事件と關係してゐたことである。利害の念は到底偉大で高貴なものを生み出すことが出來ない。だから感情の神聖な飛躍を私に許さなかつた。此の飛躍は、正義及び美の至純な愛からのみ起つて來べきものであるからだ。他の一つの原因は友情の快感であつた。これが爲に一層平和な感情が勢力を得て、私の激昂は和らげられ、鎭められたからである。私はヴェネチヤで、友人カリオの友人であつた、一人のビスカヤ人と知己(ちかづき)になつた。それはあらゆる善良な人の友人となり得る人であつた。一切の技能、一切の美德の爲に生れた此の愛すべき若人は、美術研究を志して伊太利亞へ漫遊に來てゐたのである。そして此の上何も得る所が無いと思つたので、眞つ直に郷里を指して歸らうとしてゐた。君のやうな諸科學を究むべき天才に取つては、美術なぞはほんの慰安に過ぎないものだ。斯う私が言つて、その方に志を向けさせるために、巴里へ廻つて其處で半年も滯在して見てはと勸めた。彼は私の言つた通りになつて巴里へ行つた。彼は其處にゐて、私が來た時には私を待つてゐた。彼の宿は一人には廣過ぎるので、半分貸さうといふ、私はそれに從つた。彼は高尙な科學の研究に熱中してゐた。何でも彼の理解し得ないものはなかつた。非常な速さで、片端から何でも貪り食つて消化して了つた。自分ではそれと氣が附かずに知識慾に惱まされてゐたのを、その精神の糧が得られたと言つて、どれ程私に感謝したらう。强い彼の魂

の中に、何といふ光と德との寶を私が見出したことだらう。これこそ自分に必要な友人だと私は思つた。二人は隔てなくなつた。二人の趣味は同一でなかつた。いつも議論ばかりした。どちらも頑固で何事にも一致しなかつた。それでゐて、私達は互ひに離れることが出來なかつた。絕えず反對をし合つてゐながら、どちらも對手が態度を變へることを望まなかつた。

イグナシオ・エムマヌエル・デ・アルツウナ(一)は、西班牙のみに出る稀有の人物の一人であつた。否、然ういふ人物は西班牙の名譽にも似ず、然う多くは出なかつたのである。彼は西班牙人によく見るあの熱狂し易い國民性を持つてゐなかつた。復讎したいと思ふ情が胸に湧き出さないやうに、復讎の企ても頭に浮んで來なかつた。復讎を好むには餘りに彼は鷹揚であつた。彼は極めて冷靜に、自分の魂は、人間が侵す事は出來ないといふことを幾度も言ふのを聞いたことがある。婦人には慇懃だつたが熱烈ではなかつた。女と戲れるのは可愛い子供と戲れるやうなものだつた。友人の愛人は好きでも、自分でそれを持つてゐたり、持ちたがつたりしてゐるのを私は見たことがなかつた。胸に漲る道德の靈火は、感覺の慾火の燃え立つのを許さなかつたのである。

(一) 即ち前節のビスカヤ人。一七二二―一七六三。

旅行の後に彼は結婚したが、年若の身で、子供を殘して死んで了つた。彼の妻は、この男に愛情の快樂を味はせた最初の、そして唯一の女であつたことを、私は自分の身に引き較べて見て了解した。表面彼は一個の西班牙人として熱信者だつたが、內面に天使の敬虔心を持つてゐた。私は別として、今日まで見た中で、異敎を排斥しないのはこの人だけだつた。彼は他人が宗敎につ

いて、どんな意見を抱いてゐるかを訊した事はなかつた。その友人が、猶太人であらうと、新教徒であらうと、土耳格人であらうと、妄信者であらうと、無神論者であらうと、それが眞面目な人間でありさへすれば、少しも彼の構ふ所でなかつた。宗教に關係しない議論では强情頑固な彼も、宗教や道德の話になると、急に考へ込んで默つて了ふか、さもなければ、唯、

「私は自分の事しか考へない。」

と言ふだけだつた。それ程の昂揚した魂と、極めて微細にわたる心意とを、同時に持てるといふのは不思議なことだ。一日の日課を何時間、何十分、何分と時間割で極めて、几帳面にその通り實行し、その時間が來れば、讀みかけた本でもその儘閉ぢて了ふのであつた。斯うして分割した時間中に、あの研究此の研究もする。反省や、談話や、祭式や、ロックや、祈禱や、訪問や、音樂や、繪畫が皆その中にあつたのだ。歡樂も誘惑も阿諛も、此の順序を狂はせることは出來なかつた。それが出來るのは唯果たすべき課程ばかりだつた。彼が私にもその眞似をさせる積りで、時間表を見せた時に、私は初め失笑したが、終には感嘆して了つた。彼は決して他人を束縛しなかつたが、自分も束縛を受けなかつた。禮儀で彼を束縛しようとする者には劍つくを喰はせた。激昂はしても、ぶつ〳〵は言はなかつた。時々怒りつける事はあつたが、むか〳〵してゐるやうな事はなかつた。彼の氣質ぐらゐ快活なものはなかつた。他人の皮肉も受ける代りに、自分も好んで皮肉を言つた。それがなかなか巧い。諷刺の才があつたのだ。人がおだてると、話が騷々しくなつて、遠くまでその聲が聞こえた。が、嘆鳴つてゐる內に微笑が現れたり、激昂してゐるか

と思ふと洒落を言つて、皆を大笑ひさせたりした。氣質と共に顏色にも西班牙人らしいところがなかつた。肌が白く、顏はほんのり紅く、髮は黑褐色をしてゐた。背が高くて恰好が良かつた。彼の魂の住家には申し分のない身體であつた。

感情と理性との此の聖者は、よく人間といふものを知つてゐた。そして私の友人であつた。是が私の友人でない人々に對する私の答の全部である。私達は非常に親密なあまり、二人一緒に暮さうといふ計畫を立てた。二三年の中に、私はアスコイシヤへ行つて、彼の所有地內で一緒に住むことになつてゐた。此の計畫の一切の部分は、彼が出發の前日二人の間に取り極められた。それほどまでに打合せの出來た計畫の中で、手落ちのあつたのは唯人間業に及ばない部分だけだつた。その後の事件、私の災難、彼の結婚、最後に彼の死は、永久に二人を引き離して了つた。

惡人の惡辣な陰謀に限つて成功する、善人の無邪氣な計畫は滅多に成功しない、とも云へるだらう(一)。

(一) 後文に出るグリム、ヂドロ等のルソオに對する陰謀を思つてゐる際だから、斯う言つたのである。

他人に縋ることの不都合を感じた私は、もうその樣なことは決してすまいと十分に覺悟した。機會が私に抱かせた野心の計畫も、生れると直ぐに破れたり、初は巧く行つて居て而もそれから突き飛ばされたりしては、その仕事を再びやり直す氣にもなれなかつた。私は最早他人は恃まない、我が腕を賴りにして、獨立でやり通さうと決心した。するとやがて自分の力量が分つて來た。實は今まで餘り自ら輕んじ過ぎてゐたのであつた。私はヴェネチヤ行きの爲に中止してゐたオペ

ラの製作に復た取り掛つた。そしてもつと靜かに此の仕事に沒頭しようと思つて、アルツウナと別れた後は、元のサン・カンタン旅館に戻つた。此處は閑靜な區内に在つてリュクサンブウルから遠く無く、サン・トノレの騷々しい町よりも、思ふまゝに仕事をするのにはずつと便宜がよかつた。此處にこそ、私の不幸の間にも味はせてくれた唯一の眞實の慰藉が私を待ち受けてゐた。此の慰藉によつてのみ私は此の不幸を忍ぶことが出來たのである。それは一時の馴染(なじみ)ではない。私はそれがどういふ風にして成立したかを多少詳しく述べなくてはならない。

宿の新しい主婦はオルレヤンの人だつた。お針には自分の鄕里から、二十二三の一人の少女を連れて來てゐた。娘は食事も私達と一緒にした。テレエズ・ルヴァスウル(1)と云つて相當な家の者であつた。父はオルレヤン造幣局の吏員で母は商人であつた。夫婦の間に子供が多かつた。オルレヤン造幣局も旨く行かないで、父は失業して了つた。母も數回の破産に遭つて身代が左前になつたので、商賣を止めて家族づれで巴里に來た。この娘が手仕事をして一家三人を養つてゐたのである。

(1) Marie-Thérèse Le Vasseur. 父は François Le Vasseur 母は Marie Renoux. 一七二一年九月二十二日オルレヤンに生れ、一八〇一年七月プレシに歿。

初めて私が食卓へ出て此の娘を見た時に、私はその淑やかな樣子と、殊に自分の曾て見たこともない生き〳〵した優しい眼つきとに打たれた。食卓には、ボヌフォン氏の外に、愛蘭土の僧侶達や、ガスコニュ人や、そんな種類の人々が集まつた。主婦が第一檢束(たしなみ)の無い人と來てゐるので、

眞面目な話をして行儀よくしてゐる者は私丈だつた。皆がその小娘を嬲り物にするので、私は女を庇つてやつた。直ぐに愚弄が私の上へ來た。縱し私が最初は此の娘に少しも氣が無かつたとしても、同情と反抗とがその氣を起させただらう。私は始終擧動や對話の上に禮節を重んずる風で、異性に向つては尙更だつた。私は堂々と此の娘の擁護者となつた。娘も私の心遣ひを嬉しく思つてゐるらしかつた。そしてその眼は口で言はれない感謝に輝いて、そのために益々强く私を射るばかりになつた。

彼女はごく內氣であつた。私も同樣だつた。斯うした共通の氣質は、二人の關係を遠ざけるやうに見えてゐて、反つて速くそれを結ばせた。主婦はそれを知つて怒り立てた。そして主婦の此の殘忍は、私と娘との間の一件を尙捗取らせた。娘は此の家で私の外に誰も賴りがないので、私の外出をしぶ〳〵見送り、又その保護者の歸宅を待ち焦れてゐた。二人の感情の類似と氣質の合致とは、程なくお定まりの結果をもたらした。彼女は私を誠實な人間だと信じた。それは間違ひではなかつた。私は彼女を同情に富んだ、質朴な、媚びを賣らない人間だと信じた。これも間違ひではなかつた。私は豫め彼女に、決して彼女を見棄てもしないし又結婚もしないと言つて置いた。愛と尊敬と眞率とが、私の勝利の媒介者であつた。そして私が彼女を手に入れようとしないでも幸福であり得たのは、彼女の心が柔順で誠實であつたからである。

私の彼女に求めてゐると思はれるものが見出せない爲に、自分が愛想を盡かされはすまいかと、彼女は氣遣つてゐた。それが本で、他の何ものよりも私の幸福を遲らせた。彼女が諾(うん)と言ふ前に、

口には言ひ出し悪いが私に察して貰ひたさうにして、何だかもじ〳〵當惑してゐる樣子を私は認めた。私はその當惑の本當の原因を想像しないで、非常に間違つた、しかも女の德操に對して隨分侮辱した原因を想像してゐた。彼女が多分私の健康に害を及ぼすことを諷してゐるのだといふ風に解つて、私は當惑に沈んだ。その爲に私は思ひ止りはしなかつたが、四五日は自分の幸福に毒を注された。互ひの心が疏通してゐなかつたので、此の事に就いての二人の談話は、滑稽といふよりも謎か譫言のやうだつた。彼女は私を全く狂人と思つて了ひ、私は彼女をどう考へていいか分らなくなつて了ふ處だつた。到頭二人は意中を明かし合つた。彼女は涙ながらに、自分の無智と或る男の手管とで、物心のつく頃に唯一度の失策を仕出來したことを自白した。私は彼女を理解すると同時に、喜びの叫び聲を揚げた。

「巴里で、しかも二十歳の處女なんてあるものか。ああテレエズ。貞節で健康なお前を我が物にすれば、私の求めもしない物がなくつても、私には幸福過ぎる位だ。」

私は最初はほんの慰みにする積りでゐた。ところが自分はそれ以上に深入りして了つたこと、一人の伴侶を得たのだといふことに氣が附いた。このすぐれた少女との少しの馴染と、自分の境遇についての少しの回想とは、單に快樂だけを考へて見ても、自分が幸福のために餘程なことをしたといふことを私に思はせた。消え去つた野心の代りに、私の心を滿たすべき强い感情が必要だつたのだ。つまり母の代りが欲しかつたのだ。もう私は母と同棲する譯にゆかないので、母の教へ子たる私と同棲する人、母が私に見出したやうな質朴、順良な心を持つてゐる人が欲しかつ

たのだ。私の見限つて了つた輝かしい運命を、平穩な家庭生活で補ひたかつたのだ。全く孤獨でゐる時、私の心は空虛だつた。併しそれを滿たすために、一つの心だけが必要だつたのである。運命は、自然が私のために作つてくれた心の、少くとも幾分かを私から奪つて了つた、遠ざけて了つた。その時から私は孤獨であつた。何故ならば、私には全と無との中間物が無かつたからである。私は自分の要求してゐた補充物をテレエズに見出したのである。彼女によつて私は、いろいろの遭遇に隨つて、幸福であり得る丈幸福に日を送つたのである。

まづ私は彼女を教育しようと思つた。が、骨折がひがなかつた。彼女の知識は自然が作つた儘のもので、いくら教育しても何の影響もない。遠慮なくいへば、ちよつと物は書けても、讀むことは殆ど駄目だつた。ヌウヴ・デ・プチ・シャン町に住んでゐた時、窓の前にボンシャルトラン旅館の大時計があつたが、その時間の見方を教へるのに一月餘りもかゝつた。今でも未だ本當に解つてゐないらしい。一年十二月の名を順に言ふことも出來ない。數字はどんなに教へてみても一字も覺えない。錢勘定も物の値段も知らない。談話に出て來る言葉が、時々自分の言はうとしてゐる事と反對になつてゐることもある。何時か私は、リュクサンブウル夫人の慰みに、此の女の用語の辭書を作つたことがあつた。そして彼女の片言は、私の出入した社會で名高いものになつた(一)。併し、此の無學な、若しくば愚鈍な女も、事に當れば立派な助言を與へる。瑞西や英吉利や佛蘭西で、度々私が逆境に陷つても、私に見えない事を見拔いて、最善の忠告をしてくれた。私が盲目的に突進しようとする危險から私を救つてくれた。上流の婦人達の前でも、貴顯大官の

前でも、彼女の感情、機轉、應答、行爲は、一般からの尊敬を彼女に拂はせ、私には彼女の美點についてその人々の心からの敬意を拂はせた。

愛する人と共に居ると、愛情が感情と知識とを養ふ。隨つて吾々は、他の思想を追求する必要が殆どない。私は世界の大天才と共に居るくらゐ愉快にテレエズと暮らした。元モンピポオ侯爵夫人の下で育つたのを誇にしてゐる母親は、小ざかしく娘に干渉を試み、その狡慧で私達の關係の純眞さを汚して了つた。このおせつかいが煩さに、私は愚かにもテレエズと人前に出ることを憚つてゐたのを構はなくなつて、二人で野遊びに出掛けたり、飲食もして樂しむやうになつた。私は彼女が眞面目に私を愛してゐるのを認めた。それが又私の愛情を濃やかにした。此の甘い親しみは全く私を占領して了つた。もう私は未來の事も氣に掛らず、掛つてもそれは唯此の現在の延長されたものとしてのことで、その永續を確實にすることより外は、何も求めなかつた。

(一) テレエズの手紙の文の一例を示す。ルソオに與へたものである。上段の文字は彼女の文、下段は正しい綴に直したもの。自稱代名詞の「わたくし」も、我が名の「テレエズ」すらも滿足に書けない位の程度である。

Musieeurras ancor mieu re miles quan geu eurcs o pyes deu rous, e deu vous temoes tous la goies
Mais il sera encore mieux remis quand je sera auprès de vous, et de vous témoigner toute la joie

e latandrys deu mon quvrue vous comes ces que geton goure rus pour vous, e qui neu finiras
et la tendresse de mon cœur que vous connaissez que j'ai toujours eue pour vous, et qui ne finira

quotobes ces mon quere qui vous paleu ces pas mes le vre.....ge sui avestous lamities e
qu'au tombeau; c'est mon cœur qui vous parle, c'est pas mes lèvres.....je suis avec toute l'amitié et

la reu coiec caeu rosible e la tachemen trou cher bonnamies votreau enbie a tou amless tueress
la reconnaissance possible et l'attachement, mon cher bon ami, votre humble et bonne amie, Thérèse

le vasseur.
le Vasseur.

此の愛着は、他の凡べての娯樂を私には無用な無味なものにして了つた。私はテレエズの家へ行く外は、何處へも出なくなつた。彼女の室は大方私の室になつて了つた。此の隱れた生活は、私の仕事には非常な利益となつて、三月も經たない中に、かのオペラの歌詞も曲譜も、全く出來上つて了つた。剩す所は、少しの伴奏と修正だけとになつた。此の勞作は恐ろしく私を疲らせた。私はフィリドオルに賴んで、利益の幾分を分けて手傳つて貰ふことにした。彼は二回來て、オヴィッドの幕の中へ、幾らか手入れをしてくれた。けれども彼は、何時得られるとも分らず、果して得られるのかも疑はしい利益の爲に、此の骨の折れる仕事に引つ懸つてはゐられなかつた。それきり彼は來なくなつたので、あとは自分で仕上げて了つた。

オペラは出來上つたが、今度はこれを役立てなければならない。この算段が作劇以上の大仕事である。巴里で孤立してゐては何事も成就しない。私はラ・ポプリニエエル氏(二)によつて世に出ようと考へた。その家へは、私はゴフクウルがジュネエヴから歸つた時に、連れて行つて貰つた事がある。彼はラモオのパトロンで、その夫人はラモオの甚だ謙遜な弟子であつた。ラモオは此の家では、何でも意の儘にならないことはないといふ話だつた。このラモオの弟子の一人が作つた物なら、喜んで保護するだらうと思つて、私は自分の作(三)を見せたいと言つた。彼はそれを見

ることを拒んだ、大譜表（パルチション）が讀めないから面倒で堪らないといふのであつた。ラ・ポプリニエエルは、聽く方ならよからうから、演奏者を呼んで、幾部分かを演らせてみてはどうかと私に勸めた。それ以上は私も依頼の仕樣がなかつた。ラモオは澁々（しぶしぶ）同意はしたものの、傳統もなく、全く獨學で音樂を學んだ人の作なら、さぞ立派な物だらうと、何度でも繰り返してゐた。私は大急ぎで五六箇所いいところを各部に書き分けた。合奏者は十人ばかりも集まつた。唱歌者にはアルベエルにベラアルにブルボネ孃がゐた。ラモオは序樂の時から大袈裟な讃め詞を使つて、この曲が私の作ではあり得ないといふ意味をほのめかしてゐた。どの一段をも、我慢が出來ないといふ風を見せずには通さなかつた。ところが、次中音部の咏嘆調（アリア）に至つて、歌は雄壯豐麗で伴奏が素晴らしくなつたので、彼はもう耐へ切れなくなり、傍の人にまで眉を顰めさせるやうな暴言を私に吐き掛けた。此の曲の一部分は非凡な音樂家の手に成つたものだが、その外の部分は全く音樂といふものをも知らない無智者の作だと言ひ張るのであつた。全く此の作はむらのある、規則に據らないもので、崇高な點もあり、平板な處もあつた。これは誰でも天才の發露によつてのみ修養し、學問の力を借りない人には有り勝ちのことだ。ラモオは、私を伎倆もなく鑑識もない剽竊者に過ぎないと言ひ曲げた。傍の人々や殊に此の邸の主人は、彼と同じ樣には考へなかつた。當時ラ・ポプリニエエル氏、及び人も知る如く、その夫人を屢々訪問してゐたリシュリュウ氏(三)は、私の作品のことを聞いて、若し自分の氣に入れば、宮中で演奏させる積りで、全部を聽いて見たいと望んだ。それがボヌヴァルといふ宮內官の邸で王室の費用に依つて、四部合唱の大管絃合奏で試

演された。指揮者はフランクウル(四)であつた。その結果は豫想外だつた。公爵は賞讃の聲を放つことを止めなかつたが、タアスの幕の中の、或る合唱部が終ると、立ち上つて私の傍へ來て、私の手を握つて、

「ルソオさん、どうも恍惚（うつとり）するやうな和聲ですね。こんないいのを聽くのは始めてです。ヴェルサイユで演（や）らせませう。」

(一) Alexandre-Joseph Le Riche de la Popelinière. 有名な理財家。そのサロンはパシイにあつて、多くの藝術家を集めてゐた一六九二―一七六二。

(二) 「粹詩神」。

(三) カルヂナル・リシュリュウの姪孫で、マレシャル・リシュリュウと呼ばれた人。一方では外交家及び將軍として傑出してゐたと同時に、當時の頽廢した雰圍氣中に在つて放縱な所業も多かつた。ルソオ、ヴオルテエル等はこの人の殊遇を受けてゐた。一六九六―一七八八。

(四) Francois Francœur. 當時はオペラ座の監督であつたが、後に宮廷樂師長となる。オペラの作若干を殘した。一六九八―一七八七。

ラ・ポプリニエエル夫人はその場に居ながら、一語も言はなかつた。ラモオは案內を受けてゐるのに、わざと出て來なかつた。その翌日ラ・ポプリニエエル夫人は、化粧室で私に不躾な待遇をして、私の曲を貶（くさ）すやうな風をした。そして私に、ちよいと惡光りがするものだから、リシュリュウ氏も一時目んくらつたらうけれど、最早彼も目が醒めて了つた、で私も自分のオペラをあてにしない方がいいと思ふ、と言ふのであつた。やがて公爵が來た。その言葉は夫人のとは、丸きり異つたものだつた。盛んに私の才を褒め立てたのみか、相濟らず國王の前で演奏させて見た

いと考へてゐるらしかつた。

「タアスの幕だけは、宮中で演りにくい。あれは書き替へた方がいいでせう。」

此の一言によつて、私は歸つて自分の室に閉ぢ籠つた。そして三週間で「タアス」の代りに、詩神に靈感を得たエジョッドを題材とした別の一幕を書き上げた。私はこの幕の中へ、自分の才と、此の才を裝飾してくれたラモオの嫉妬とに關する物語を書き込む祕訣を見出した。この新らしい一幕の中には「タアス」の幕ほど誇大ではないが、もつと氣品のある崇高さがあつた。曲はやはり莊重で、あれよりも一段優れてゐた。若し他の二幕も、これと同じ價値のあるものだつたら、この全曲の試演はまさしく好成績を收め得たのである。ところが、試演の出來るやうになつた頃、又一つ他の計畫が、此の實行を中止させた。

一七四五―一七四七。――フォントヌロの役(一)のあつた年の冬は、ヴェルサイユで引切なしの祝賀會があり、中にもプチト・ゼキュリ座では色々なオペラが始まつた。その中にヴォルテエルの「ナヴァルラの王女」といふ悲劇もあつた。これはラモオの作曲で、丁度「ラミイルの饗宴(二)」の名の下に改作された。この新しい題目は、歌詞曲譜共に原作の間曲(三)に少なからぬ修正を要した。そこで此の兩方の目的の果たせる人を物色しなければならなくなつた。その時ヴォルテエルはロレヌに居て、ラモオと二人で丁度「榮光の殿堂」といふオペラに取り掛つてゐたので、こ

ちらの方へ手を出すことが出來なかつた。リシュリュウ氏は私の事を思ひ出して、それを引き受けてくれと言つて寄越した。そして、どれ丈の事をするのかを調べるのに都合の好いやうにと言つて、歌詞と曲譜とを別々に送つて來た。何よりも先に、私は原作者の承認を經てから、歌詞に手を着けたいと思つた。で、私は此の件について、誠意をさへ籠めた手紙(四)をヴォルテエルに書いた。彼の返事は次の如くである。原文は書翰束Aの第一號に在る。

(一) フォントヌロは、白耳義の一村落。一七四五年十一月、佛蘭西の名將サクスが英、蘭等の聯合軍を此處で撃破した。アアヘン和約前の事に係る。

(二) 一七四五年十二月二十二日ヴェルサイユで上演。

(三) Divertissement. オペラの幕間に演ぜられる舞曲、又はその他の輕い出し物。

(四) 日附は十二月十一日。

「貴下は從來別物たりし二種の才を兼具せられ候。これ既に小生が貴下を敬し、又愛せんとする好個の二理由に候。唯それに値しがたき愚作に對して、この貴下の兩才を煩はさんこと、恐縮の外これなく候。實は數箇月前、リシュリュウ公爵より無味且不具なる幾場の、粗雜なる筋書を大至急起稿せよとの嚴命これあり候。こは彼の曲のためにとて作られしものならぬ間曲に充つべきものに候。小生は委細領承の上、極めて匆卒に且拙く脱稿致し、到底物の役には立つまじく、然なくとも修正は免れざる處と覺悟して、此の愚笑すべき粗描を公爵に差出し申候。今幸にしてその作貴下の手中に歸し候ふ上は、取捨一に貴意に繫り申し候。小生は既に全然右の作意を忘却

致し居り候。かくも匆卒に出でたる梗概には必然のあらゆる誤謬も、貴下の必ず是正せられ、すべてを補足せらるべきを信じて疑はず候。

數ある迂愚の中にも、グルナヂヌ姫が突如牢獄を出でて、禁苑若しくは宮闕に入るに至る次第は、間曲を結ぶ孰れの場にても、說き及ばざりしことを記憶致し候。姫を饗宴に請ずる者は魔術師にはあらで、西班牙の貴族に候へば、これを妖術の所爲に歸するは妥當ならざるべく候。何卒この邊十分に御加筆相願ひたく、小生は唯混亂せる記憶を有するのみに御座候。牢獄おのづから開き、豫ねて設へたる金碧絢爛たる宮廷に姫を送るは必要のことに候ふや。此の如きは言ふにも足らぬ事にて、然る瑣末の事件を過大視するは、思慮ある人の採らざる所なることは、小生とても固より心得居り申し候。然りながら、面白からぬ廉は努めて削除するが急務に候へば、縱ひ拙劣なるオペラの一間曲なりとも、出來得る限り理に合せしむべきものと存じ候。

小生は一に貴下竝びにバロ氏に信賴致し、近く感謝の意を捧げて、その深厚なるを證したき存念に御座候。云々。

一七四五年十二月十五日

その後彼が寄越した多くの亂暴な手紙に比べて、この手紙の鄭重を極めてゐるのは、別に驚くことでもない。彼は私をリシュリュウ氏の大氣に入と思つたのである。そこで、誰も知る彼の追從輕薄から、餘儀なく此の新參者にも大へんな尊敬を拂つたのだが、それは彼の信任の程度が解

つて了ふまでの事だつた。

ヴォルテエル氏の承認を得て、私を傷つけようとばかりしてゐるラモオへの氣兼ねも要らなくなつたので、私は仕事に取りかかつて、二箇月間で仕上げて了つた。歌詞の方は、ごく僅か手を入れる丈で濟んだ。唯文體の不統一の分らないやうに苦心した丈だ。私はそれが巧く行つたと思つて得意になつてゐた。曲譜の方はもつと長くかかつてもつと骨が折れた。種々な準備曲、殊に序樂を作製する事は勿論、私の負擔した宣敍調は至難な仕事であつた。屢々僅かな詩句の間で、非常な急速な轉調を使つて、調子の非常に飛び離れた合奏合唱を、幾つも結び合さなければならなかつた。至難といふのは、ラモオが自分の作曲をめちやくにされたなどと私を非難しないやうに、何處にも變更や移調を試みまいとしたからである。私は此の宣敍調にも成功した。强聲が良く、力量に富み、特に轉調が優れてゐた。二大家と合作させて貰へたといふ考が、私の才を向上させたのである。勘定にも合はず、名譽も伴はず、世間に知れやうもない仕事ではあつたが、私は殆ど常に此の二人と肩を比べることが出來たと云へる。

曲は私の修正した儘で、大オペラ座で練習された。三人の作者の中、其處へ出たのは私だけだつた。ヴォルテエルは不在、ラモオは來なかつた、多分隱れたのだ。

第一獨白は哀愁を極めたものだつた。その初句は、

O mort! viens terminer les malheure de ma vie!

あゝ死よ、速かにわが生の苦を終めよ。

曲譜も固よりこれに相應しいのが必要だつたのだ。ところが、ラ・ポプリニエエル夫人は、これを惡口の種にして、葬送の曲だなぞと、厭味たつぷりに攻擊した。リシュリュウ氏は此の獨白の詩句が、誰の手に成つたのかをはつきり知らうとした。私は後から送つて來た原稿を見せた。するとそれはヴォルテエルの作であつたことが分つた。

「それぢや不都合なのはヴォルテエル丈ぢやないか。」

とリシュリュウ氏は言つた。練習の間も、私の手に成つた部分といふと、必とラ・ポプリニエエル夫人に貶されて、リシュリュウ氏に辯護された。が、到頭私は、如何にも痛い處へ引つ掛かつた。彼は、處々ラモオと相談して更に修正を加へなければならないといふ意を示した。賞讃こそ豫期した所であり、當然の事でもあつたのに、斯うした結果に私は胸を痛め、死ぬ程の苦みを抱いて家に引き返した。疲勞と口惜しさとにへと〳〵になつて遂に病氣を起し、六週間ばかりは外出することも出來なかつた。

ラ・ポプリニエエル夫人から指定の修正を委されたラモオは、今度の私の序樂の代りに使ふ積りで、私の作つた大オペラのそれを所望して來た。幸ひ私はこの奸策を看破つたから、それを斷つてやつた。愈々開演までには五六日を剩すのみで、ラモオも新しい序樂を作る時日がなく、私のをその儘にしておく外なかつた。此の曲は伊太利亞風の、當時の佛蘭西では全く新しい型のものであつた。それでも喝采を博して、ひどく好劇家連を喜ばせ、聽衆がラモオの作と區別しなかつたといふことを、大膳職のヴァルマレット氏から聞いた。彼は私の親戚なり友人であるミュサ

アル氏の婿であつた。それだのに、ラモオは夫人と腹を合せて、此の作に私の手が這入つてゐるといふ事すら、人に知らせまいと謀つた。聽衆に配る番附には、作家の氏名をみんな書き並べるべきであるのに、これにはヴォルテエル一人の名前しか無かつた。ラモオは、自分の名と私のとを並べられるよりも、いつそ自分のも除かれた方が增しと思つたのである。

外出が出來るやうになるとすぐに、私はリシュリュウ氏を訪問しようと思つたが、もう遲かつた。彼は丁度蘇格蘭の上陸軍を指揮する爲に、ダンケルクへ出發したところであつた。公爵が歸國してからも、私は自分の不性の口實に、私はもう遲れて了つた、と自分に言つた。それからは最早此の公爵には會はなかつたので、自分の作に相當する名譽も報酬も失にして了つた。のみならず、時間と勞力と心痛と病氣とそれに要した費用と、然ういふものは一切自分の持ち出しに成つて、一錢の利益、ではない賠償も這入つて來なかつた。それにも拘らず私には、始終リシュリュウ氏は何となく自分の味方になつて、自分の才能に好意を持つてくれてゐるのだ、たゞ私の不運とラ・ポプリニエエル夫人とが、その好意の結果を妨げるのだと思はれた。

夫人には、私も力めて氣に入られるやうにし、隨分儿帳面に機嫌を取つてゐたのに、どういふ譯で私を嫌つたのか、合點が行かなかつた。ゴフクウルがその譯を私に說明してくれた。

「第一はラモオに對する友情だ。夫人は彼の公然の讚美者だから、競爭者が出來ては大へんなんだ。それからもう一つは宿業だ、これが夫人の前で君に禍するのだ。そして夫人はどうしてもそれを君に許さないのだ。それは君がジュネエヴ人だといふことなのだ。」

是に就いて彼が話すのに、ジュネエヴの人で、ユベエル師といふラ・ポプリニエエル氏の親友が、夫人の性行を知り拔いてゐて、ラ・ポプリニエエル氏が、此の女と結婚するのを極力妨害したことがあるので、結婚後夫人は執念深く師を怨み、延いて一般のジュネエヴ人をも怨むに至つたのだといふ。

「主人の方は、」彼は附け加へた。「君に親切があることは確かだが、彼を當てにしちや不可い。主人は細君に惚れてゐるのだし、夫人は君を怨んでゐて、腹の黑い悧巧者と來てるのだから、あの邸ぢやあ君はどうすることも出來ないだらう。」 私も如何にもと思つた。

その同じゴフクウルが、丁度此の時分、私の非常に要求してゐた手傳ひをしてくれた。此の時私は六十歳位になる自分の善良な父を失つた(二)。私はあまり自分の境遇の當惑に沈んでゐない他の時ほどには、この損失を傷まなかつた。父の存生中には、その手許に遺留された母の財産について、私は曾て請求しようと思はなかつた。彼はそれから僅かの利子を取つてゐたのだ。が、父の歿後は、もう遠慮するにも及ばないことになつた。併し實兄が死んだといふ正式の證據が出ないので、面倒を引き起こした。それをゴフクウルが引き受けて、ロルム辯護士の世話で、實際にその面倒を除いてくれた。僅かばかりの金でも私には非常に必要なものであり、結末がどうなるとも分らなかつたので、私はその決定の通知を待ちこがれてゐた。或る晩、家へ歸つて見ると、通知らしい手紙が來てゐた。じれつたさにふるへながら、手に取つて封を切らうとしたが、自分ながら淺ましい氣がして來て、

「何だまあ、」と自ら嘲けるやうに、「利害や、好奇心でジャン・ジャアクがこんなに意氣地がなくなるのか。」

(一) 一七四七年三月九日。時に七十五歳。

手紙はそのまゝ煖爐の上に載せた。着物を脫いで、靜かに横になつて、不斷よりも熟く眠入つた。翌朝は手紙の事なぞ忘れて了つて、大分遲く眼を醒ました。着物を着ようとする途端に、手紙が眼に附いたので、悠々と開けて見た。中に手形が一枚あつた。私は一時に種々な愉快を感じた。が、その愉快の最も强かつたのは、確かに、自制することが出來たといふことだつた。生涯の中に此の類の話は、いくつもあつたらうが、今はせき立てられてゐて、みんな話すことが出來ない。金の一部は哀むべき母に送つたが、同時に私は此の金をその儘そつくり、彼女の前に投げ出せたらう幸福な時を、涙と共に戀しく思つた。彼女から來るどの手紙にも、その窮迫が見えてゐた。彼女は例の祕法や祕訣をうんと書いて寄越して、それでもつて私が、自分と彼女との財産が作り出せるものと考へてゐた。不幸の感じは、疾くに彼女を狹量に、又淺見にして了つたのだ。私の送つた僅かの金も、彼女に附きまとつてゐた惡黨共の餌であつた。彼女には何も役に立たなかつた。だから私は、自分の必要物を、そんな奴等に分けてやる氣にはならなかつた。後にも話す通り、そんな奴等から彼女を引き離さうとして無獸な骨折をした後は、尙更だつた。

時は流れ去つた、金も一緒に流れ去つた。吾々は今二人で居る、いや四人だ、詳しく云へば、七八人だつた。その譯は、テレエズは珍しい無慾な人間だつたが、その母親は、然うでなかつた。

私の世話で少し樂になり出すと、甘い汁を分けて吸はせるために、一家一族を呼び寄せた。姉妹だ、悴だ、娘だ、孫だ、なぞと皆來た。來なかつたのはアンジェの馬車監督官に嫁入つた姉娘一人丈だつた。私がテレエズの爲にして遣つた事は、皆母親の手で、然ういふ餓鬼共の利益に振り向けられて了つた。私は强慾な女に用もなかつたし、又莫迦な感情に動かされなかつたから、無茶なことはしなかつた。差迫つた不自由なしに、贅澤に流れないで、相當にテレエズを養つて行くことで滿足して、彼女が手仕事で儲ける金は、全部母親のものにすることを同意した。私はまだそれ丈では濟さなかつた。併し、私に附いて廻る因果といふのか、母は母でやくざ者等の餌となり、テレエズは又一家一族の餌になつた。そこで私は、自分がその爲になるやうにと圖つてゐた本人たちのどちらへも、何事もしてやることが出來なかつた。不思議にも一番末の娘で、しかも此の娘丈が嫁入仕度もして貰へなかつたものが、一人して兩親を養つて行くさへあるのに、兄や、姉や、姪にまで長いこと窘められた揚句、今でも彼等の盜みや打擲を巧く拒ぐ術もなしに、裸に引き剝がれてゐるのである。姪の中でゴトン・ルヂュクといふの丈は、見樣見眞似で摺れてはゐたが、まだしも可愛くて素直な質の娘であつた。私は時々然ういふ娘等と一緒に顏を合すことがあるので、それ〴〵名を附けて遣つた、するとその名を又互ひに呼びかはした。私は姪を「姪さん」、その伯母のテレエズを「小母さん」と呼んだ。二人とも私を「小父さん」と呼んだ。私が始終テレエズを呼ぶのに、小母さんといふ名を用ひ、私の友人も亦面白づくに、小母さん、小母さんと呼ぶやうになつたのは、これからだ。

私が斯ういふ境遇から脫れ出ようとして一分も油斷しなかつたことは誰にも分る。リシュリウ氏は私を忘れて了つたであらうし、宮廷の方にももう望みを絕つて、私は自作のオペラを巴里で興行させようと企てて見た。けれども色々の困難があつて、それを除くには一朝一夕に行かない。そして私は日に日に窮して來た。其處で思ひついて「ナルシス」の喜劇を伊太利亞座へ見せた。これが採用され、入場權をも得て大得意だつたが、唯それ丈のことだつた。その劇は到頭上演させることが出來なかつた。私は俳優の機嫌を取るのが堪らなくなつて、彼等を打棄つて了つた。で私は最後の手段に訴へることにした。これは私の當然取るべき唯一のものだつたのだ。ラ・ポプリニエエル氏の邸に出入するやうになつてからは、私はヂュパン氏の方と疎くなつてゐた。兩家の夫人は血緣の間でありながら、仲が惡くてまるで顏を合はさなかつた。兩家の間に交際といふものもなく、唯チエリヨ一人が、双方の間を往來してゐた。此の人がもう一度私をヂュパン氏の家へ連れ込むことに盡力してくれた。フランクイユ氏は當時博物や化學を研究してその實驗をやつてゐた。多分アカデミイの科學部員を希望して、論文を書かうとしてゐたのだ。彼はその仕事に私が役立つだらうと思つてゐた。ところがヂュパン夫人も亦或著述を思ひ立つて、これも同じ樣な望を私に持つてゐた。二人は共通の書記に私を傭ひ入れたかつたのだ。そこでチエリヨが私を誘ひ出しに來たものだ。私はそれよりも先に、フランクイユ氏がその信用とジェリヨットこの信用とによつて、オペラ座で私の作を試演させることを無理に賴んだ。「粹詩神」は最初幾度も小芝居で試演され、次いで大劇場でも演ぜられた。大試演の時は客が一杯になり、ところど

ころ喝采を博した。けれどもその演奏中に、指揮者のルベルも抽かつたからだが、自分では、此の曲は到底通過すまい、大修正でも加へなければ、その儘では出せないと知つた。で、私は何とも言はずに其曲を撤回して、拒絶を喰はないで濟んだ。縱し曲は完全でも、通過が困難だといふことは、色々な徵候ではつきり見えてゐた。フランクイユ氏は、私の作を試演させることは堅く約束したが、それを採用させることは約束しなかつた。彼はきちんとその約束を守つた。此の場合に限らない、何時でも私は斯ういふことを見拔いた、彼といひ、ヂュパン夫人といひ、孰れも私が世の中に名聲を博することを見棄ててはゐなかつた、それは世間の人々が、彼等の著書を見た時に、私の學才を踏み臺にしたと思ふだらうといふ懸念からだらう。けれども、夫人は私の才を至つて平凡なものと見てゐて、口述の筆記か、引證の穿鑿ぐらゐにしか私を使はなかつたから、此の非難は、少くとも夫人に就いては當つてゐなかつたかも知れない。

(一) Pierre Jelyotte. 當時高名の巴里のオペラ唱ひ。オペラ座に據つて、ラモオや、モンドンヴィルなどの曲中のシテを演じた。一七八二年歿。

一七四七—一七四九。——此の最後の失敗は全く私を失望させて了つた。私は發展や名譽の有らゆる計畫を放棄した。そして殆ど私の利益にならない自分の才能は、眞實なものにしろ空虛なものにしろ、最早一切考へないで、たゞ自分とテレエズとの生活費を儲ける事にのみ時間と注意

とを向けた。斯うした方が、それを用意する事ばかり考へてゐる者等を悅ばせたからである。で私は、全然ヂュパン夫人とフランクイユ氏とに附ききりになつた。これで贅澤な暮しが出來たのではなかつた。最初二年間は、一年三四百圓の金で、その人達の近所の、巴里でも相當物價の高い區内で裝飾附の室を借りなければならず、同時に別に一軒同じ巴里のはづれのサン・ジャアク町の突端にも家を借りて、天氣がどうでも、大抵毎晩そこへ夕飯を喰ひに行くことにしてゐたのだから、衣食に事を缺かない丈がやつとであつた。その中に新しい仕事にも慣れて來たし、興味も出て來た。私は科學に身を入れた。ルウェル氏の處で、フランクイユ氏と一緒に幾回も講義を聽いた。そしてやつと初歩が解つた位で、二人で無暗とこの科學に關する記述を始めた。一七四七年に、私達はツレヌのシェエル河に臨んだ離宮のシュノンソオ城へ、秋を過ごしに行つた。この城は顯理二世が、ヂヤヌ・ド・ブワチエのために建てたもので、今でもヂヤヌの花押が其處に殘つてゐる(一)。そして現在は收稅請負人のヂュパン氏の所有になつてゐたのである。吾々はこの美しい土地で、面白く又奢つた暮しをした。私はこゝで修道僧のやうに肥つて來た。此處では音樂が盛んに演ぜられた。私は強い和聲の滿ちた色々な三部合唱曲を試作したが、その事は他日本書の補遺を書いたら、その中で更に話さう。喜劇も演ぜられた。私は二週間で「無謀なる約婚」と題する三幕物を作り上げたが、唯賬かだといふ外には、何の取柄もないものだつた。これは私の文集に這入つてゐる。その外短い物を色々書いた中に、シェエル河に沿つた遊園地内の並木道の名を取つた「シルヴィイの小徑」といふ詩劇があつた。斯ういふ事をしてゐる一方で、化學の

11842

仕事や、ヂュパン夫人の仕事も、續いてやつてゐたのである。

（一）ツレヌは中世に於ける佛蘭西の一州名で、その境域は現時のアンドル・エ・ルワアル縣と同一である。ルワアル河の諸支流の相會する地方に當り、「佛蘭西の花苑」といふ美稱を得た。その支流の一つなるシエエル河中にルネサンス式の一偉觀シュノンソオ城が立つてゐる。チュイルリ宮の造營に知られた當代王室の大建築家フイリベエル・ドロルムの手で潤飾せられたものである。フランスワ一世王の時離宮となり、顯理（アンリ）二世王はこれをヂヤヌ・ド・プワチエに與へた。第十八世紀には王室の手を離れて私人の有となり、當時の名家モンテスキユウ、ヴオルテエル、フオントネル、ビユフオン等が皆此處を藝つて遊びに行つた。ルソオもその一人であつた。この城は革命時代の破壞を免れて、今尚舊觀を存してゐる。ヂヤヌ・ド・プワチエは十三歳で初めて結婚して、後にヴアランチヌワ侯爵夫人となり、夫に死に別れて四十歳位の時、當時十八歳の太子（ドファン）であつた顯理二世王の思はれ人となつた。顯理二世王にはカトリヌ・デ・メヂチといふ王后があつたけれど、二女の關係は圓滑で、王の在位中はヂヤヌが主權を振つてゐた。

私がシュノンソオで肥つてゐる間に、哀れなテレエズも巴里で、別の意味で肥つて來た。歸つて見ると、豫ねて準備をして置いた事が、思ひの外に進行してゐた。今の境遇では、これこそ私を窮地に陷れるものだつたが、幸ひ食卓の會友達が、それから救はれる唯一の手段を授けてくれた。この事はあまり無造作に話すことの出來ない重要な物語の一つである。ごた〳〵注釋を加へれば、自分の言ひ開きをするか、自分で非難することになるだらうが、今此處で私は、そのどちらをもしてはならないからである。

アルツウナが巴里に滯在してゐた頃、私達は飲食店へ行く代りに、始終二人で近所のオペラ座の裏町と向ひ合せの、或る仕立屋の內儀（かみさん）で、ラ・セルといふ人の處へ食事をしに行つた。食ひ物は粗末だつたが、此處に集るのは、いづれも善良な確實な人達だつたので、存外繁昌した。見ず

知らずの客は入れてくれなかつたから、是非常客の誰かの紹介が要つたのである。非常に丁寧で機智に富んだ、猥褻な話の好きな、年取つた遊蕩兒のグラヴィル勳爵士は、此の家に泊つてゐて、親兵や銃兵の、放縱で派手な青年將校達を引き入れた。ノナン勳爵士は、オペラ座の歌女（うたひめ）とは殘らず馴染で、毎日のやうにその魔窟の消息を齎した。善良で分別のある退職陸軍中佐デュプレシと云ふ老人と、銃兵の將校アンスレ氏とが、それらの若い人達の間に、幾分の規律を保たせた（原註。私が自家の作風に據つた「捕虜」と題する短い喜劇を與へたのは、このアンスレ氏であつた。これは佛蘭西人の、バイエルンや、ベエメンでの災難を題材としたものであつた。私はこの喜劇を人に話したり見せたりはしなかつた。それは、此の作ぐらゐ佛蘭西王と佛蘭西と佛蘭西人とを、しかも心から讃美したものはあるまいといふことと、今一つは共和論者なり公然のフロンド黨員である私は、あらゆる自分の主義と正反な國民の頌讃者とは公言し得なかつたことと、此の奇異な理由に基づいてであつた。佛蘭西の不幸については、佛蘭西人自身よりも以上に心痛してゐる私は、自分の誠實な國民の現れを、阿諛だ卑劣だと思はれるやうなことがありはしないかと恐れてゐたのである。私が佛蘭西を愛慕するやうになつたのは、いつ、どうして始まつたかといふことは、既に第一部（こで話したが、私はそれを公表することを恥ぢてゐたのである）。その外商人や、銀行家や、御用商のやうな人も來たが、何れも禮儀ある正直な、同業者の中でも一段すぐれた人達であつた。ベス氏に、フォルカッド氏、その外の名前は忘れたが、とにかくあらゆる種類の流行つ兒が此の一堂に會した。僧侶と法律家だけは別で、然ういふ人には一度も出會

さなかつた。仲間に入れない規則だつたのである。隨分多勢の會食だが、陽氣であつて騷々しくはならず、際どい話が隨分出ても野卑に流れなかつた。老勳爵士の話は、すべて事柄は脂濃いものだつたが、昔の宮中の禮法を失はず、女が聽き遁がすほどの面白いことの外は、決して婬らしい言葉を口にしなかつた。此の人の調子は、一同への模範になつた。若い人達はそれ〴〵情味を以て、無遠慮に、めい〳〵の色つぽい話をした。それに傍には女の問屋があつたので、女の話に事を缺くことはなかつた。といふ譯は、ラ・セルの家へ行く小路に、有名な小間物屋のヂュシャの店があつて、其處には當時縹緻のよい娘が幾人も居たから、會友たちは食事の前後によく話しに行つたものだ。私ももつと大膽だつたら、他の人達と同じやうに其處で樂しみが出來たのだ。唯皆と一緒に其處へ這入つてさへ行けばよかつたのだが、それが私には出來なかつた。アルツウナがゐなくなつてからも、私は此のラ・セルの家へは始終出かけて行つて食事をした。其處で面白い逸話を澤山知つた。そして次第に此の仲間で行はれた、道德では無い、教訓を學ぶことが出來たのは幸だつた。陷れられた眞面目な人、欺かれた夫、誘惑された女、違法の出産、然ういつたものが、此處での最も普通な話題であつた。殊に育兒院へ子供を一番多く入れた者が一番褒められてゐた。此の話に私は釣り込まれた。至つて愛すべき、そして眞に誠實な人達の間に行はれてゐるところのものを土臺にして、私は自分の考へ方を決めた。「これが此の國の習慣である以上、その國に住む者は、それに從つていい譯だ。」斯う私は自分に言つた。私の求めてゐた善後策はこれだつたのである。私は少しの懸念もなく、元氣よくさうしようと決心した。唯一つ私の

征服しなければならなかつた懸念は、テレエズのそれであつた。彼女の名譽を救ふ爲の此の唯一の手段を彼女に得心させるについて、私は言ふに言はれない苦心をした。母親も亦子供が殖えるのを迷惑がつて、私の味方になつたので、彼女も澁々我を折つた。サン・ツスタシュの角に住んでゐた、グワンといふ注意深い確かな産婆が選ばれて、この寄託物を委された。愈々臨月となると、テレエズは産をするために、グワンの家へ母親に連れられて行つた(一)。私は幾度も見舞ひにその家へ行つた。そして二枚の札へ二重に作つた花押を彼女に渡した。その一枚は嬰兒の肌衣に縫ひ込まれた。嬰兒は制規どほり、産婆の手で育兒院の事務所へ託された。翌くる年も同じ難儀を同じ手段で片附けたが、花押丈は構はずに置いた。今度は私ももう思案せず、母親の方にも同意も何もなかつた。テレエズは愚痴たらゞ〳〵得心した。此の不幸な行爲が、私の考へ方や運命の上に齎らした激變は、順次に明かになつて行くだらう。今は唯その端緒丈にとゞめて置く。豫想し難い、又その痛ましい結果は、幾度となく此の事を私に繰り返させるに違ひない。

(一) 第五卷。

(二) 長子の出生は一七四六―四七年の冬の間であつた。

此の頃が丁度私がエピネ夫人と相識になつた時分である。夫人の名は此の「自傳」の中に屢々出て來る。夫人はエスクラヴェル孃(こと云つたが、此の時分收稅請負人ラリイヴ・ド・ベルガルド氏の息子のエピネ氏に嫁いだのである。良人はフランクイユ氏と共に音樂家であつた。夫人も同樣音樂家だつたから、此の藝術の趣味は、三人の仲を極めて親密にした。フランクイユ氏は私を

エピネ夫人

エピネ夫人の處へ案内してくれた。私は折々夫人と食卓を共にした。夫人は愛嬌があり、怜悧で、才藝を蓄へてゐた。これは馴染になつていい人に相違なかつた。併し、彼女には意地悪で通つてゐるデット嬢(三)といふお友達があつて、是も評判のかんばしくないヴァロリ士爵と同棲してゐた。然ういふ二人の男女との交際は、累を夫人に及ぼすものだと私は思つた。夫人は一面非常に氣むづかしい質であると共に、その缺點を調節する——又は過失を補ふ——美質をも具へてゐた。フランクイユ氏は私に注いだ友情の一部分を彼女にも注いだ。そして夫人との關係を私に打ち明けた。此の理由から、その關係が良人エピネ氏にも隱せない程世間に弘まつたのでなかつたら、ここで私も話をするのではなかつたのである。更にフランクイユ氏は、夫人に就いて奇怪な内證話(三)を私にした。彼女自身は決してそれを私に話したこともなく、又私が知つてゐようとも思つてゐなかつた。それもその筈で、私はこの事を彼女にも誰にも漏らさなかつたし、又生涯漏らすまいとしてゐるからである。かうして雙方から祕密を打ち明けられるので、私の立ち場はひどく苦しいものになつた。殊にフランクイユ氏の妻はよく私を理解して、夫人のライヴァルと私が心安くしてゐるにも拘らず、決して私を疑ふやうなことがなかつたから、尙更であつた。私は出來得る限り、この可憐な婦人を慰めてゐたのに、その夫は確かに妻の愛情に酬いなかつた。私はこの三人の言ふ事を別々に聽いてゐた。私はこの上もなく忠實に皆の祕密を守つてゐたから、三人の中の誰もが、他の二人の祕密を私から手繰り出すやうなことはなかつた。然うかといつて私は、自分が兩夫人と懇意にしてゐることを、そのライヴァルに隱しもしなかつた。フランクイユ夫人

は、色々な事に私を役立てようとしたけれど、私はきつぱり斷つた。エピネ夫人も、一度フランクイユ氏に宛てた手紙の取次を頼んだから、私はそれも斷り、且、若し夫人が私をお宅へ寄せ附けたくないのでしたら、今一度その樣なことを私へお頼みになつてみることです、と露骨に言ひ渡した。エピネ夫人の善い所はこゝだ。この私の仕打に機嫌を損じもしないで、却てフランクイユ氏にその事を讃め、待遇振さへ少しも惡くしなかつた。私が多少とも恩を受けて居り、又親みを持つてゐる、この私の操つて行かなければならない三人の物騷な關係の中に介まりながら、私が物やはらかに、又意を迎へつつも、正直と硬骨とで、最後まで彼等の友情と尊敬と信用とを維持したのは、斯ういふ譯からである。愚鈍で不器用な私のやうな者をも、エピネ夫人はベルガルド氏の所有の、サン・ドニ附近の別莊ラ・シュヴレットの行樂に加へてくれた。其處には劇場があつて、時々開演された。私も或る役を振られて、六箇月間休まず稽古をしたのに、開演中、徹頭徹尾白を附けて貰はなければならなかつた。これに懲りてもう舞臺に出ろと勸める者はなかつた。

(1) Louise-Florence-Pétronille d'Esclavelles. 一七二六年ヴアランシエヌに生れ、一七四五年二歳年長の從兄 Denis-Joseph La Live d'Epinay と結婚したが、一七八二年夫に死なれ、夫人はその翌年巴里に歿。

(11) Mlle d'Ette. この當時三十三歳位。一七八五年巴里に歿。

(111) 夫人の夫エピネに一種の病氣があつて、それに夫人が感染し、それがまたフランクイユにも感染したといふことだといふ。

エピネ夫人と懇意になつたので、私は夫人の義妹で、間も無くウドト伯爵夫人(1)となつたベルガルド嬢とも懇意になつた。私が初めて此の人に會つた時、彼女は丁度結婚しようとしてゐた。

彼女はその持前の人を惹きつけるやうな親みをもつて、長時間私と物語した。私は實に懷かしい人と考へたばかりで、この年若な女性が他日私の運命を動かして、縱し彼女に罪はなかつたにしろ、現在私の沈んでゐる淵の中へ引き込まうとは、まさか思ひも掛けなかつた。

（一）第九卷に詳しく出る。

私はヴェネチヤから歸つて後、ヂドロや、友人のロガンのことは何も話さなかつたが、決して二人を忘れてはゐなかつた。殊にヂドロとは日に〳〵親密になつて行つた。私にテレエズといふ者があるやうに、ヂドロにもナネットといふ女があつた。それも私達二人の似通つた點であつた。ところが、私のテレエズは、容貌は勿論ナネットに劣らない上、溫順な氣質と柔和な性格とがあつて、眞面目な男子を引き寄せることは出來たが、ナネットと來ては反對に、野卑な悍婦で、その不良な教育を埋め合はせるやうなものが、他人の目には映らなかつた。それでも彼は此の女と結婚した。その約束があつたにしても、よくそれが出來たものだ。私の方はそんな約束をしてゐないから、急いで彼を眞似るには及ばなかつた。

コンヂヤック師(一)とも交際した。その人も私同樣文壇に知られてゐなかつたが、今日の地位に立つべき人だつた。私は恐らく彼の實力を見拔いて　それに相當する尊敬を拂つた最初の人だつたらう。彼も亦私が氣に入つてゐるらしかつた。私がオペラ座に近いジャン・サン・ドニ町の一室に閉ぢ籠つて「エジョッド」の幕を書いてゐた時分、彼は私と二人で出し合ひの晝飯を喰ひによくやつて來た。その頃彼は處女作「人智起源論」を書いてゐた。それが脫稿すると、引き受ける書店を捜すのに大分困つてゐた。巴里の書店は、無名の著者に對しては横柄で薄情である。殊に當時殆ど流行しなかつた哲學物は、顧みられる筋のものではなかつた。私はコンヂヤックとその著書の事を、ヂドロに話し、それから二人を引き合はせた。二人は意氣の合ふ質で直ぐと合つた。ヂドロは例の原稿をヂュラン書店に採用させるやうにした。で此の大哲學者は、その處女作から、しかもお情けのやうに二百圓貰つた。それも私がゐなかつたら受け取れなかつたのである。吾々は互にかけ離れた町に住んでゐたので、一週に一度パレ・ルワヤルで三人が會合し、うち連れてパニエ・フルリ館へ晝飯を喰ひに行つた。その一週間目の小會食が、ヂドロには此の上もない樂しみであつただらう。その證據には何の集會にも殆ど出たことの無いヂドロが、此の會丈は缺かしたことがなかつた。その間に私は「揶揄者」といふ雜誌の發刊を企てて、ヂドロ(二)と私が交代に筆を執ることになつてゐた。初號は私が書いた。それが緣になつて、ヂドロから此の事を話したダランベエル(三)と相識になつた。が、色々な意外な事件に妨げられて、この計畫は頓挫して了つた。

（一）Etienne Bonnot, abbé de Condillac. マブリ師の弟、グルノブルに生る。感覺派の哲學者。「人智起源論」及び「感覺論」の著者。一七一五―八〇。

（二）Denis Diderot. 第十八世紀啓蒙時代に於ける有數の代表者で、その該博な諸科の知識を以つて、「百科辭典」の編纂に沒頭した。一七一八―八四。

（三）Jean Le Rond d'Alembert. タンサン夫人の私生兒。數學者、哲學者。アカデミイ科學部會員。「百科辭典」編纂者の一人で、有名なその序文を綴した。これ亦懷疑論者の一である。一七一七―八三。

此の二人の著述家はその時「百科辭典(一)」を計畫してゐた。これは最初ヂドロが完成したばかりのジェイムズの「醫學辭典(二)」程の物で、チェイムバズの飜譯のやうな物になる見込だつた。ヂドロは此の第二の事業の或る部門の爲に私をも加へることを望んで、音樂の部をと勸めて來た。私は承知はしたが、寄稿の約ある諸家に對してと同樣、私に與へられた三箇月の日子の間に、大急ぎで、甚だ拙いものを仕上げた。それでも期限までに仕上げた者は私丈だつた。原稿は彼に渡す前に、フランクイユ氏の召使の、字の巧いヂュポンといふ者に淸書をさせて、自分の衣兜(かくし)から二十圓出してやつたが、その金はその儘私の手には返らなかつた。ヂドロは私に、書店の方から返濟させると約束はしたが、それについては、その後彼からも私からも、互に言ひ出さなかつた。

(一) Dictionnaire Encyclopédique. 第十八世紀に於ける啓蒙思想の代表作物。一七五一―七二年までの間に完成した本文二十八冊の大著。これが編纂に關係したものはヂドロ、ダランベエルを主とし、その他オルバック、グリム、ヴォルテエル、ヂュクロ、マルモンテル、ケスネ、チュルゴ、コンドルセ、ジョクウル、など所謂アンシクロペヂストを網羅し、モンテスキュウ、ルソオ等も亦これに參與した。それらの執筆者の多くに共通の思想は、懷疑的、無神論的、感覺論的唯物主義的なのにあつた。それが爲に本書の災厄を蒙つたことは後の卷九、十等に見えてゐる。

(二) 「醫學辭典」の原名は、*Dictionnaire universel de médecine, de chimie, de botanique* と云つて、ロバト・ジェイムズの原書をヂドロが三人の助手を使つて譯したもので、一七四八年に完成した。チェイムバズは卽ちイイフライム・チェイムバズの編纂した *Cyclopædia, a Universal Dictionary of Arts and Sciences* をいふ。一七二八年の初版で、英語で書いた百科辭典の嚆矢である。

此の「百科辭典」の計畫は、ヂドロの入獄で中止となつた。「哲學的思想(一)」でも、彼はいくらか心痛を招いたが、後害は貽さなかつた。「盲者に關して(二)」では、そんな譯に行かなかつた。

ダランベエル

これは別段非難する程のこともなかつたのだが、ヂュプレ・ド・サン・モオル夫人(三)とレオミュウル氏とに關する多少の人身攻擊でその二人を怒らせたので、彼はヴァンセヌの監獄に入れられたのである。友人の不幸が與へた私の苦痛は喩へやうもなかつた。いつも不幸を誇大視する因業な私の想像は愕然とした。一生彼が牢獄でゐるものと思つた。私の氣は狂はんばかりになつた。私はポンパヅウル侯爵夫人(四)に手紙を出して、彼を釋放するか、自分をも一緒に拘禁するかして欲しいと歎願した。それに對する返事は來なかつた。こんな筋道の立たない手紙に、何の效力があらう。だから、その後暫くして、哀むべきヂドロの監禁が幾らか緩やかになつたのに對しても、私の手紙が與かつて力があつたのだと己惚れはしない。併し、何時までも同樣の苛酷な監禁が續かうものなら、必と私は絶望して、あの忌々しい監獄の門前で死んで了つただらうと思ふ。それとも私の手紙に、幾らかの效力があつたとしても、その爲に私は大して誇る積りもなかつた。現に私はこの事を極少數の人にしか話さなかつたし、ヂドロその人にも決して話したことがなかつた。

(一) *Pensées philosophiques*, 1746.
(二) *Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient*, 1749.
(三) この夫人は當時の陸軍大臣アルジャンソン伯の女友の一人であつた。
(四) 夫人は當時の國王、路易第十五世の寵姫。內外の政務に干與したことは史上に出る。一七六四年歿。

第八卷

一七四九。

前卷の終でちよつと休まなくてはならなかつた。此の卷から私の不幸の長い連鎖が、その最初の起因から始まる。

巴里に時めく二軒の邸に出入してゐた私は、如何に交際下手でも、自然其處で色々の相識が出來た。中にもデュバン夫人の邸では、サクス・ゴタの世子と、その師傅のツン男爵と。ラ・ポプリニエエル氏の邸では、ツン男爵の友人スギ氏と相識になつた。スギ氏はルソオ(一)の美本を出版して、文壇に名を知られてゐた。男爵はスギ氏と私とを、フォントネ・ス・ブワの世子の別館へ、一日二日遊びに來るやうと招いた。私達は其處へ行つた。途中ヴァンセヌを通ると、その監獄の前で、私は胸が張り裂けるやうに思つた。男爵は私の顏に顯れたその色を見つけた。晩餐の時、世子はヂドロ拘禁のことを話し出された。男爵は私に口を開かせようと思つて、ヂドロの不謹愼を攻擊した。私がヂドロを辯護した烈しい態度も不謹愼だつた。それも不幸な友人ゆゑの激昂で誰も咎める者もなく、話頭は外へ移つた。そこに世子附の二人の獨逸人がゐた。一人はクルップェル氏(二)といふ才智に長けた宮中牧師(シャプレン)で、後に男爵の代理を勸めてから世子師傅となつた。今一人

はグリム(三)といふ青年で、適當な地位の見つかるまで、講師として仕へてゐた。如何にも見すぼらしい風采は、速くその地位を見附けたいことを語つてゐた。クルップェルとはその晩から懇意になり、やがて親密になつた。グリムとの關係は、そんなに速くは進まなかつた。後日の得意時代にあらはした、彼のあの傲慢な風とはずつと異つて、成るべく出しやばらないやうにしてゐた。翌日の食卓で、音樂の談話が出た。グリムはなかなか通を言ふ。殊にクラヴサンが彈けると聞いたので、私は無上に嬉しかつた。食後には樂譜を取寄せて、終日世子の樂器で彈奏した。斯うして、初はいかにも樂しく、終にはいかにも慘ましかつたグリムとの友情が始まつたのである。それについては後に幾度でも話すだらう。

(一) ジャン・バチスト・ルソオ。

(二) Emmanuel-Cristophe Klupfel.「ゴタ年鑑 *Almanach de Gotha*」の創始者。

(三) Frédéric Melchior, baron de Grimm. ライプチヒ大學修了後佛蘭西に移り、ルソオ、エピネ夫人、ヴォルテエル、ヂドロ及び哲學家の多くと交はつた。批評は懷疑的だが佛蘭西の事物に就ては克く聽明な觀察を下した。著書は逸話集として内容の豐かなものである。ルソオに對する陰謀の事に就いては、下卷の末の「譯者補遺」を見よ。一七二三年ラスチボンに生れ、一八〇七年ゴタに歿。

巴里に歸つて來ると、嬉しい消息に接した。ヂドロが監獄を出て、ヴァンセヌ城と、その公園の中に宣誓釋放され、且、友人に面會することも許されたといふことであつた。と聞いた瞬間に、其處まで飛んで行かれないのが、どんなにつらかつただらう。二三日はヂュバン夫人の方に退つ引ならぬ用があつて、三四世紀も待ち焦れてから、私はこの友人の腕に飛び込んだ。言ふにいはれないその瞬間！　彼は一人きりではなかつた。ダランベエルとサント・シャペルの會計係とが一緒に居合はせた。這入つた時に、私は彼の外は見なかつた。私は唯一足に進み寄つて、あつと言つたきり、自分の顏をその顏にくつ着けたまゝ、涙と啜り泣とに物を言はせて、しつかりと彼を抱いた。私は懷しさと嬉しさで息が詰まつたのである。私の腕を離れて、先づ彼が何をするかと思ふと、僧侶の方を振り向いて斯ういふのであつた。

「見給へ。僕はこんなにまで友人に愛されてるのだ。」

私の胸は一杯になつてゐたので、彼が自分の利益を圖らうとするこの態度を、私は考へて見なかつた。併し、その後時々それを考へてみると、若し自分がヂドロだつたら、最初にそんな考は浮びはすまいと始終思はれた。

彼はその入獄にひどく惱まされたらしい。牢獄は恐ろしい印象を彼に與へたのである。だからながらも、その暗い氣分に沈まないやう、しきりに友人と逢ひたがつてゐた。彼の苦痛に最もよく同感してゐる者は私だから、私の顏を見るのが彼には最上の慰安でなくてはならないやうに思つた。で私は、仕事が差し迫つてゐるのも構はず、遲くも二日目毎に、自分一人でか、彼の妻を連れて、午後を彼と過ごしに行つた。

この一七四九年の夏は、烈しい暑さだつた。巴里からヴァンセヌへは二里の路程としてある。馬車賃が拂ひ兼ねる身だから、午後の二時頃に、自分一人の時は徒歩で出掛けて、少しも早くと

息急き歩いた。道傍の並木はその邊の習はしで、いつも枝を刈り込んで了つてゐたから、殆ど蔭がなかつた。暑さと疲れとで、一歩も進むことが出來なくなつて、時々地面に臥そべつた。私は歩調を緩くするために、何か本を持つて行くことを思ひついた。或る日「メルキュウル・ド・フランス(一)」を持つて出て、讀みながら歩いてゐる中に、偶と眼に觸れたのは、ヂジョン(二)のアカデミイから出してゐる、次年度の懸賞論題で、「科學及び藝術の發達は道德を頽廢せしめしや、將た純化せしめしや」といふのであつた。

(一) 一六七二年、巴里のドノオ・ド・ヴイゼに創刊せられた時事新聞。一八二五年廢刊。一八九〇年此の名を取つた別の文藝雜誌が生れた。

(二) ブルゴニュの首都。

これ讀むと直ぐに、新しい世界が目の前に展けて、私は別な人間になつて了つた。その折の印象の生々しい思ひ出は、今も持つてゐるけれど、その細かい事はマルゼルブ氏に送つた四通の手紙(一)この一つに書き込んで了つてから忘れて了つた。この事は私の記憶力に關する一奇談だから、書く値があらう。私が自分の記憶力を頼みにしてゐる間だけは、その記憶は役に立つが、それを紙に書き附けて了ふと、忽ち失せて了ふ。何事でも紙に書いて了ふと、全くそれが思ひ出せなくなる。この奇癖は音樂にまでも附き纏ふ。音樂を稽古する迄は、いろいろの歌曲を覺えてゐるが、音譜を見て唱へるやうになると、どの曲も覺えてゐられなくなる。一番好きだつた曲の中の唯一つでも、今完全に唱へるかどうか怪しいのである。

(一) この手紙の事は第十一卷一七六二年の條の初に出る。

此の場合の事で、はつきり思ひ出せるのは、ヴァンセヌに着いた時、私が譫妄症(デリリウム)に近い程興奮してゐたこと丈である。ヂドロはそれを認めた。私はその譯を話して、槲の樹の下で鉛筆で書いた「ファブリシウス寓言(一)」を讀み聽かせた。彼は此の私の思想を展開させて、懸賞を爭つて見るやうにと慫慂めた。私はさう決心した。が、それと同時に私は取返しのつかない者となつた。私の後半生と無數の不幸とは、此の迷ひの瞬間の、必然の結果であつたのだ。

(一) *Prosopopée de Fabricius.* 是はルソオが興奮の餘、卽興的に書いた短い文で、後の「科學藝術論」第一部中の一節となつてゐる。ファブリシウスは清廉な羅馬の執政官。

私の感情は測り難い程の速さで、私の思想と同じ高さまで昇つた。私のあらゆる小さい情慾は、眞實、自由、道德の熱情に壓倒されて了つた。そして更に驚くべきは、この感激が四五年以上、他の何人の心にも見られなかつたと思はれる位の高い程度で、私の心内に持續されたことである。

私はこの論文を書くのに妙な方法を採つた。これは他の著作の時でも大抵いつも採つた方法なのだ。私は夜の眠れない時間をそれに充てたのである。寢床で眼を瞑つて考を凝らし、そして頭の中で幾回となく句節の推敲に無上の苦心をした。まづ是でよしと思ふ處まで漕ぎつけると、それを記憶の中に蓄へて置いて、紙に書けるやうになるのを待つ。けれども朝床を離れて着物を着更へる時には、すべてを忘れて了つてゐた。そして紙に向つて見ても、組立てて置いた事が殆ど何も浮んで來なかつた。私はテレエズの母親を書記にしようと思ひ立つて、娘や亭主と一緒に、

自分の傍近く住居させた。傭人を儉約する爲に、毎朝出掛けて來て、火を拵へたり、雜用を辨じてくれたのは此の女だつた。彼女が來ると、私は寢床の中から、昨夜の考を書き取らせた。永いこと然ういふ工合にやつて來て、大分物忘れを助けられた。

論文が仕上がつたのでヂドロに見せた。彼は滿足して、唯二三の修正を指示してくれた。だが、此の論文には、熱と力は十分ありながら、論理も順序も全く立つてゐなかつた。凡そ私の書いた物の中で、此の文章ぐらゐ推論の弱い、諧調の貧しいものはなかつた。併し、如何に天分の豐かな人でも、文章を書くことばかりは、一朝にして學び得られるものでない(一)。

(一) 此の論文には、文學、藝術、科學等一切の文化の產物は、畢竟生活と道德とを敗壞する原因であるといふことを大膽に雄辯に說破してある。初めヴアンセヌでヂドロに相談した時、ヂドロが、他の應募者は必ず文化に謳歌してその功德を頌へるに極まつてゐるから、一番裏を行つて、文明否定論を書いて見てはどうだ、といふので、ルソオもつひにその氣になつて、この論を立てるやうになつたのだといふ說がある。

私はこの草稿を、他の人達には誰にも話さずに發送した。併しグリム丈には話したやうにも思ふ。彼がフリエエズ伯の邸內に住むやうになつてから、私との間が極めて親密だつたから。彼の持つてゐた一臺のクラヴサンが、私達の媒介となつて、閑な時には何時でもその傍で遊び暮した。伊太利亞詠嘆調(アリア)や櫂歌(バルカロオラ)などを、朝から晚まで、ではない、晚から朝まで間斷なく唱ひ續けた。若し私がヂュパン夫人の內に居ないことがあれば、必とグリムの處か、さもなければグリムと連れて散步か觀劇かに行つてゐた。コメヂイ・イタリエヌはグリムの嫌ひな座だつたから、私は其座(そこ)の入場券は持つてゐながら、其座へ行く事は廢めて、金を拂つて彼の好きなコメヂイ・フランセ

エズの方へ一緒に行つた。到頭この靑年には力强く引きつけられて、全く離れ難いものになつて了つた。その爲に哀むべき「小母(おば)さん」すら、忘れられた。忘れるといふのは、會ふことが少くなつたといふことだ、私の一生の中、彼女に對する私の愛着が衰へたことはなかつたのだから。

斯うして、少ししかない時間を自分の好む方へ充てることが出來なくなつたので、自分とテレエズの所帶を一つにして了ひたいといふ以前からの希望が、これまでよりも一層强く呼び起された。併し、テレエズの多い家族の煩累と、殊に所帶道具を買ひ調へる金がなかつたのとで、今までは思ひ止まつてゐたのであつた。一と奮發すべき時節がやつて來た。そして私はそれを利用した。フランクイユ氏とヂュパン夫人が、一年に三百圓や三百五十圓では私に不足だらうと氣づいて、向うから自發的に俸給を一年五百圓まで昇してくれた。まだその上に、ヂュパン夫人は私が家具を調へたがつてゐることを知つて、それについても幾分の補助をしてくれた。是迄テレエズの持つてゐた道具類も一緒にしてすべてを共同のものとした。そして善い人達の住んでゐるグルネル・サン・トノレ町のラングドック館(エルミタアジウ)で小さい一室を借り受け、此處で自分達に出來る丈の生活の準備をした。そして私が「仙居」に引き移るまで七年間、平和に愉快に此處で暮した。

テレエズの老父(おやぢ)はお人好しで、おとなしくて、甚く自分の女房を恐れ、その意味で彼女に警視總監(クリミネル)といふ綽號を附けてゐた。この綽號をグリムが冗談に、テレエズの方へ持つて行つた。母親はなか〳〵才智があつた、つまり悧巧なのだ。上流社會の禮儀や風習を知つてゐるのを誇りにしてゐた。併し變な阿諛(へつらひ)の癖があつて、私には堪らなかつた。娘に不都合な入れ知慧をして、私に

物事を祕密にさせようとしたり、私の友人の一人一人に、私はじめ他の友人を貶して佞辯をつかつた。それさへなければ、とにかく良い母親ではあつた、またその方が自分の利益でもあつたからだ。又娘の過ちを隱すやうにしてゐた。それを自分の利益にするためだつた。この母親には、私も隨分氣を配つたり、世話を燒いたり、いろ〳〵な附け屆をして、何とかして自分を愛させようとしてみたが、どうしても思ふ通りに行かないのが、私の小家庭での唯一つの苦痛の種だつた。とはいへ、私は此の六七年間に、弱い人間に相應はしいだけの最上の家庭的幸福を味はつたといつていい。テレエズの心は天使のそれであつた。二人の愛着は、親しくなるにつれて段々強くなつて、二人は全く互の爲に生れて來たのだといふことを、日毎に深く感ずるやうになつて來た。その間の享樂を書き立てて見ても、如何にも單純で可笑しい位のものだらう。二人で郊外に散歩すれば、何處かの掛茶屋で大枚二十錢も散財するとか。小晩餐會に、窓口一杯の大鞄の上へ、小い腰掛を二脚列べて、二人で差向ひで坐るとか。この場合には、窓が食卓の代用になり、其處から風を通し、附近の景色や、道行く人を眺めることも出來る。四階に住んでゐても、物を食ひながら町が瞰下される。御馳走と云つても、四つ切の麵包が一片、櫻實が少許、乾酪の小片、それに二人で飲む小なから酒、かうした晩餐の樂しみを、誰が描き得よう、誰が感じ得よう。友情、信頼、親密、柔和な心、然うした藥味の何といふ旨さ！　時々私達は夜中まで、老母でも知らしてくれなからうものなら、時間を考へも氣づきもしないで、其處でぢつとしてゐたものだ。併し、もうこんな面白くもなく、笑はれるやうな話は止さう。いつも私が言つたり感じたりしてゐる通

り、眞の樂みは到底書き現せるものではない。

丁度この時分、私は復たずつと野卑な樂みに手を出した。是が自分と嗜なめなければならない此の類の最後のものだつた。クルップェル牧師が面白い人だといふことは前にも話した。私と此の人との仲も、グリムと同じやうに親密で、また打ち解けたものになつた。二人はよく私の處で飯を喰つた。食事は粗末なものだつたが、クルップェルの巧い莫迦話と、未だ喧しい語學者になつてゐなかつたグリムの可笑しな獨逸訛りとで、賑やかされた。此の會食では、肉感が幅を利かすやうなことがなくて、唯歡喜がそれに代つた。吾々の間はしつくりと合つて、何時までも離れたくなかつた。クルップェルは一人の若い女を圍つて置いた。けれどもその女は、クルップェル一人では世話し兼ねたので、誰の慰み物にでもなつた。或る夕方、私達がカフェエに這入ると、入れ違ひにクルップェルがその女を連れて、夕飯を喰ひに出かけるのと出會した。私達は彼を調戲つてやつた。すると彼は、同じ食卓へ私達をも引つ込んで、今度は私達にからかつて、手際よく先きの復讐をした。その可憐な女は、無邪氣でおとなしくて、こんな商賣には不似合なやうに思はれたが、抱へ主の惡婆が、思ふまゝに彼女を仕込んだのであつた。お定りの話に酒が手傳つて、皆はつい有頂天になつた。正直なクルップェルは、自分の饗りを半分で廢すことを望まないつた。で、三人は替りばんこにその女と一緒に隣の部屋に這入つた。女は笑つていいのか泣いていいのかを知らなかつた。グリムはその女には決して手出しをしなかつた、とその後絶えず廣言してゐた。だから彼が、女と二人であんなに長くその部屋に這入つてゐたのも、私達を懊らして

喜ぶ爲だつたといふのであつた。で、縱しその時は彼が潔白だつたにしても、それは彼の謹直からだつたとは思へない。何故と云つて、彼がフリエエズ伯の邸内に住み込む前までは、その同じサン・ロック區内の、淫賣の家に寢泊りしてゐたのだから。

私が此の女の住んでゐるムワノ町を出た時は、丁度サン・プルウが醉ひ潰された家を出て來た時と同じ位恥かしかつた。だから私がサン・プルウの物語(一)を書いた時には、自分の閲歷をその儘想ひ出した。テレエズは私の素振から、殊にそはそはしてゐる樣子から、何か心に咎めることがあるのだといふことを見拔いた。私は重荷を卸すために有りの儘を卽座に白狀した。それでよかつたのだ、といふのは、次の朝、グリムが得々と乘り込んで來て、私の行爲に輪を懸けてテレエズに話した。それから後といへども、彼は意地わるくテレエズに、この記憶を新たにさせずには置かなかつた。私はグリムには何の隔意もなく、一切の祕密を打ち明けてゐたのだから、彼としてはそれを私に悔いさせるやうなことがあつてはならない譯だ。それ丈今度の事では、一層罪が重いのだ。私は此の時ぐらゐ、テレエズのやさしい心を感じたことはなかつた。彼女は私の不實で氣を損ずるよりも、グリムの仕方に立腹した。そして私は、しみ〴〵したやさしい小言を受けた丈で、怨んでゐる樣子は少しも認めなかつた。

(一) 後に出る「新エロイイズ物語」。

此のすぐれた女の知識の單純なことも、そのやさしい心に釣合つてゐた。といつて了へばそれ迄だが、玆に話して置きたい一例がある。私は、クルップェルが宣教師で、又サクス・ゴタの世

子の宮中牧師だといふことを彼女に話した。牧師といふと、彼女には何か非常に異つた人に思はれ、滑稽にもまるで飛び離れた考をごつちやにして、クルップェルを羅馬法皇のことと信じて了つた。私が歸つて來ると、彼女は、法皇樣が訪ねて見えました、と言ふから私は初め氣でも違つたのかと思つた。譯を聞いて解つたから、直ぐその足で引つ返して、グリムとクルップェルとにその話をしに行つた。法皇といふ綽號がその時から吾々の仲間でクルップェルに附いて了つた。私達は、ムワノ町の女にも法皇妃ジャヌの名を奉つた。みんなはとても可笑しがつて、息がつまりさうだつた。私の名で得意ににせ手紙を作つて、その中に、生涯の中で私が笑つたことは二度しかない、なぞと書いた人達は、此の頃なり、私の若い時分のことを知らなかつたのだ。でなければそんな考がどうしても彼等に浮んで來る譯がない。

一七五〇―一七五二。

翌くる一七五〇年になつて、今まですつかり忘れてゐた論文が、ヂジョンの懸賞に當選したことを聞き知つた。この通知は、私に此の論文を書かせたすべての思想を目醒まし、その思想に新らしい力を與へ、そして終には、幼時父や、祖國や、プリュタルク(二)などに培養された英雄氣質と道德との酵母を、私の心の中に醱酵させた。名利と世評とを超越して、自由で有德であり、且自己を恃む程、偉大な又美しい何物をも私は見出さなかつた。謂はれのない羞恥と、非難の虞れ

とは、最初此の主義によつて行動し、當代の信條に對して、急激に眞つ向から反抗することを妨げはしたが、その時からその覺悟は極まつた。そして、その實行の遲れたのは、唯此の覺悟を刺激して勝利者とする爲の種々な矛盾が起つて來るのを待つ間丈であつた。

(一) プリュタルクの感化の強かつたことはルソオの屢々口にする所で、その絶筆「夢想録」の中にも「時に尙讀み來つた少數の書籍の中、プリュタルクは最も私の氣に入つて、又最も私の利益になるものである。これは私の幼年期の最初の讀み物であつたが、老年期の最後の讀み物でもあるだらう。私が讀んで收穫の無いといふことのないのは殆ど此の作家のみである。」とある。

人間の義務について考へ耽つてゐる間に、私自身の義務についてもつとよく考へさせるやうな一事件が起つた。テレエズが三度目の姙娠をしたのである。餘りに自己に忠な、餘りに標置の高い私は、自分の行爲で自分の主義を破ることが出來ないので、自然の法則や、正義や、理性や、宗教の法則などに照して、子供等の前途と、その母と自分との關係を思ひ廻した。此の宗教は、元來その創始者の如くに純眞で神聖で永遠なるべきものであるのに、これを人間が純眞なものにしようとするやうな顏をして墮落させ、彼等の形式でもつて、唯言葉の宗教に過ぎないものにして了つた。不可能な事を命じても、實行する氣のない人に取つては、何にもならないからである。

縱し私の結論が誤つてゐたにしろ、私が從容としてその結論に從つたのは全く驚くべきことである。若し私が不幸にして、やさしい自然の聲の耳に通じない、正義人道の本當の感情が少しも心に萌さないやうな人だつたならば、此の冷酷さも當然と云はなくてはならない。ところが、此の燃えるやうな心情、この鋭い感受性、この容易く成り立つ愛着心、その愛着心が私を征服する

この威力、その愛着を斷たねばならぬ時のこの悲痛、同胞に對するこの生得の慈悲心、大と眞と美と正とに對する此の熱愛、一切の惡に對するこの恐怖、憎み、傷つけることは勿論、然うしようと思ふことすら出來ないこの性格、あらゆる道德的な、寬大な、可憐なものを觀て感ずる此の强く又優しい感激、然う云つた凡てのものが、果して義務の中でも最も懷かしみあるものを、何の容赦もなく蹂躙させるやうな邪念と共に、同じ心の內に調和し得るだらうか。いや、私は斯う感ずる、そして廣言する、それは有り得べからざることであると。彼の生涯の中の一刹那でも、ジャン・ジャアクは決して無神經、無慈悲な人間、非人情な父であり得なかつた。私は間違つた事はあつたらうが、冷酷になることは出來なかつた。理由を言はせるなら、私は幾らでも言へろ。併しその理由が私を誤らせるやうになつたのだから、それが又他人をも誤らしめるであらう。私はこれを讀む若い人達を、同じ謬見によつて身を誤まるやうな目に合はせたくはない。今は唯斯うした理由だつたと言ふに止めて置かう。私は子供等を自分の手で育てることが出來ないために、彼等を公敎育に託し、將來ごろつきや山師よりも、勞働者か農民になるやうにして置いたのは、公民たり父たる者の義務を果したものと思つた。そして自分を、プラトンの共和國の一員だと考へたのである。それから後、一度ならず悔恨の情は、私の間違つてゐたことを敎へてくれたが、理性は然うは言はなかつた。反つて私は、この處置によつて、子供等をその父の運命から、又私が彼等を遺棄しなければならなくなつた時に、彼等を脅かす運命から、安全にしてやつたことを、時折天に向つて感謝した。エピネ夫人やリュクサンブウル夫人は、友情から、義俠から、又その

他の動機から、後に子供を引き受けようと言つてくれたが、それに委せたところで、彼等は果してより幸福であつたであらうか。少くともいい人間に育てられたであらうか。それは知らないが、必と双親を怨むか、恐らく双親に叛逆するやうに育て上げられたことは確かである。彼等が双親を知らなかつたのは、どの位増しだつたか知れない。

三番目の子供もそんな譯で初の二人のやうに育兒院に入れられた。その次に出來た二人の子供もやはり同じであつた、私は皆で五人の子供があつたのである。此の處置は私にはいかにも善い事で、理に合ひ、法に合つた事と思はれたが、それを大きな聲で自慢しなかつたのは、唯子供等の母の氣を兼ねてであつた。併し私達の關係を知らせた人々には、皆その話をした。ヂドロにグリム、少ししてからはエピネ夫人、また少ししてからはリュクサンブウル夫人にも話した。何も必要があつてでなく、唯氣任せに淡泊に打ち明けたので、隱さうと思へば誰にでも容易に隱せたのである。グワンといふ產婆なぞは正直な謹み深い、十分信用の出來る女だつたからである。打ち明けて幾らか利益のあつたのは、テレエズが一度難產した時に診て貰つた、チエリといふ醫者だけであつた。つまり私の行爲は少しも祕密にしなかつたのである。それは私が何事も友人に包み隱せなかつたためばかりでなく、實際その事に何の不都合をも認めてゐなかつたからでもある。いろいろ思案の末、私は子供に取つての最善の道、少くとも自分で然うと信じた道を擇んだのである。私も實は此子供等と同じ風に養育して貰ひたかつたのだ、今でも然う思つてゐる。

私が斯うして內證話をしてゐると、一方ではテレエズの母親も、それをしてゐた、併しそれは

もつと不純な考からだつた。私が母親とテレエズを、ヂュバン夫人の處へ連れて行つた時、夫人は私との關係から、二女(ふたり)にも大へん目を懸けてくれた。母親は娘の祕密をすつかり夫人に喋つた。夫人は優しくて慈愛に厚い上に、母親が、碌に收入のない私がどんなに氣をつけて何もかも仕送をしてゐるかといふことを、夫人に話しもしなかつた爲に、夫人は惜し氣もなく施しをして遣つた。それを母親の口止で、私が巴里に居る間、娘は始終私に隱してゐたけれど、「仙居」で種々な打明け話の序でに自白した。私はヂュバン夫人がちつともそんな風は見せないでゐて、それ程詳しく聽かされて居ようとは知らなかつた。私は、夫人の息子の細君シュノンソオ夫人も、やはり然うだつたのかは今でも知らない。唯フランクイユ夫人は詳しい事を聽いてゐて、而も默つてゐることが出來なかつた。翌年私がその邸を出て了つた後で、彼女はその事を私に話した。そこで、私は此の件に就いて彼女に手紙を書くことにした。それは私の文集に入つてゐる。その手紙で私は、母親とその家族とに迷惑を着せない範圍で言へる丈の理由を擧げた。迷惑といふのは、此の一件の一番の理由が母親と家族とから來てゐる爲で、私もそれは言はなかつたのである(一)。

(一)　この「一件の一番の理由」はルソオの「夢想錄」に下の如く出てゐる。「自分をして此に至らしめた主因は、全く子供等のために、百千倍も不良な運命を恐れ、且これを救はうにも他に方法がなかつたからである。もつと冷やかにその子供等はどうなつてもいいものとし、我が手で育てることの出來ない場合、自分のやうな境遇では、彼等を醫將させるだらう母親か、彼等を人非人に仕上げるだらう其の家族かに育てさせるより途がなかつただらう。それを思ふと、今でも身の毛が悚立つ。……併し私は、子供等のために危險の最も少い教育は育兒院のそれだといふことを知つてゐた。で私は彼等を其處に入れたのである。若しそんな事情が起つたら、今でも尙少しも遲疑せずにその通り

にするだらう。そして剛染がほんの少しでも自然の手傳ひをしてくれさへすれば、子供等に取つて私くらゐ慈愛深い父親はあるまいといふことを、私は十分に知つてゐる。」

ヂュパン夫人の用心深さと、シュノンソオ夫人の友情とは、私も信じてゐる。フランクイユ夫人の友情についても、私は同じ様に信じてゐたが、此の人は私の祕密が知れ渡る餘程前に世を去つた。その祕密が暴露したのは、專ら私がそれを打ち明けた人達から、そして私とその人達との間に不和が生じてからのことだつた。此の一事で彼等は審かれたのである。私は自分の受けなければならない非難を辯解しようと思はないばかりか、彼等の惡意が受けなければならない非難を被せられるよりは、その方を被せられる方が望ましい。私の過失は大きい、併しそれは過失に過ぎない。私は義務を怠つた、併し害心は抱いたことがなかつた。それに父の愛情が、顏も見知らない子供に對して強くはたらく譯にはゆかなかつた。併し、友情の信頼を裏切り、すべての約束の最も神聖なるものを破り、吾々の間に打明けられた祕密を發き、欺かれながらも離れて後迄その友人に尊敬を拂ふ友人を、面白半分に侮辱する、これは最早過失ではない。卑劣と陰險とである。

私は自己の懺悔を約束したが、自己の辯護は約束しなかつた。だから此の話はこれだけで廢す。私は眞實でありさへすればいいのであり、讀者は公平であればいいのだ。私はそれ以上の何物をも讀者に求めない。

シュノンソオ氏が結婚してからは、その母の邸も年若な可愛らしい花嫁の藝能と才智とで一層私には愉快になつて來た。そして此の夫人は、ヂュパン氏の書記の中でも特に私に眼を懸けてく

れた。新夫人はロシュシュワアル子爵夫人の一人娘(こ)であつた。子爵夫人がフリエエズ伯と懇意だつた所から、グリムも亦懇意になり、甚く夫人に傾倒してゐた。併しグリムを新夫人の處へ案内したのは私であつた。處が、グリムと新夫人とは氣質が合はなかつたので、交際は續かなかつた。その頃から或る地位を狙つてゐたグリムは、娘よりも、上流の社交界にゐる母の方を擇んだ。娘夫人も何等の陰謀にも立ち交らず、上流の間に勢力を得ようともしないで、氣の合ふ手堅い友人を望んでゐたのだ。ヂュパン夫人は、新夫人が豫期した程柔順でなかつたので、隨分つらく彼女に當つた。併しシュノンソオ夫人は優れた才と、多分その家柄とで氣位が高く、柄にもないお勤めをするよりは、社交仲間の樂みを避けて、獨り一室に引き籠る方を望んだ。この流竄に似た境遇は、不幸な人に牽き附けられる例の私の天性で、彼女に對する私の愛着を强めた。彼女の精神は、時には幾分詭辯的ではあつたが、哲學的、若しくは思索的だつた。その對話は、修道院をぽつと出た生若い女とは似も附かないもので、私はひどく心を動かされた。それでゐて、齡は二十歳にもならなかつた。色は眩しいほど白く、少し氣をつけて取り繕へば、押し出しのいい立派なものだつたらう。灰がゝつたブロンドの、珍らしく美しい髮は、我が可憐な母の妙齡のそれを私に思ひ出させて、强く胸を騷がせた。併し、丁度此の頃私が自分で設けて、何物に換へても立て通さうと決心してゐた嚴格な主義が、彼女とその魅力とから私を押し隔てた。ずつと一夏、一日三四時間づつも差向ひで嚴格に算術を教へ、面倒な數字で彼女を困らせたが、一語もなまめいたことは言はず、秋波一つ使ひもしなかつた。これが五六年後だつたら、私はこんな分別くさい、

いや、莫迦なことはしなかつただらうが、生涯に唯一度より戀をしてはならぬ、その外の女はその場限り諦めて了はなければならぬ、といふことが、その主義であつたのだ。

(1) Marie-Alexandre-Sophie de Rochechouart-Pontville. 一七五一年に Jacques-Armand de Chenonceaux と結婚した。

ヂュバン夫人の邸内に住み込むやうになつてからは、いつも私は自分の運命に安んじて、もつとそれを良くしようといふやうな望みを起さなかつた。夫人がフランクイユ氏と申し合せて、私の俸給を上げてくれたのも、一にその人達自身の考から來たことであつた。日に增し私を可愛がつてくれるやうになつたフランクイユ氏が、今年、もつと餘裕のある、もつと安心な地位に私を引立ててくれようとした。彼は大藏省の理財局長であつた。その下にゐた出納吏のヂュドワイエ氏が、齡を取り金もあつて、退職したがつてゐた。フランクイユ氏は此の地位を私にくれた。で、私は、その勤務の出來る資格を作るために、數週間ヂュドワイエ氏の家へ心得を敎はりに通つた。が、私の柄にない職務であつた爲か、或は他の候補者を推薦したがつてゐるらしかつたヂュドワイエ氏が親切に敎へてくれなかつたからか、どちらにしても私の知りたいと思つてゐることを、捗々しく完全に敎はることが出來なつた。出納の仕方もわざとむづかしく說いたので、どうしても私の頭に入らなかつた。で、此の職務の急所は摑めなかつたが、それでもとにかく執務に差支ない程度の、要領だけは學び得た。それ丈で私はもう仕事を始めた。出納簿や、金庫を保管し、現金と領收書を受け渡しした。私は斯ういふ方には、技倆もなければ趣味もなかつたが、年の功

で段々眞面目になつて來て、自分の仕事に專心沒頭するのに、嫌惡の念を抑へる決心をした。少し仕事に慣れて來た頃、生憎フランクイユ氏が旅行に出たので、不在中私が金庫を監督しなければならないことになつた。金庫の金は僅か一萬圓餘しかなかつた。それが私には心配で不安で、とても出納吏などの勤まる柄でないことが、つくづく感じられた。彼が歸つて來ると、すぐ私が病床の人になつたのも、全くその不在中に氣を遣ひ過ぎたからだつたに違ひない。

此の本の第一部で、自分が生れた時は死人のやうだつたといふことを言つた。膀胱に異狀があつて、少年の頃は絕えず尿閉に惱まされ、育ててくれた小母(おば)のシュゾンが、私の命を全うさせる爲に、どの位苦勞したか知れなかつた。併し終に小母の思ふ通りに行つて、私の强壯な體格が到頭優勝し、そして私の健康が靑年期の間非常によくなつて、前に話した神經衰弱と、少し熱が出ると惱まされた小便近いのとの外は、三十歲まで性來の虛弱を忘れて了ふ位になつた。それが再發したのは、ヴェネチヤへ着いた時だつた。旅行の疲れと嚴しい暑さに中てられたのとで、膀胱に熱が出て腰が痛んで、冬の初まで癒らなかつた。パドヴァ女郎に接した後は、私は死んだものと思つてゐたのに、何の障りもなかつた。又ヅリエッタのために、肉體よりも想像を使ひ切つた後は、是迄に無く元氣がよくなつた。ヂドロが拘禁されたので、その夏の炎暑をも厭はず、ヴァンセヌへ往復して罹つた熱が、劇しい腎臟炎を引き起して、それからはもう元の健康を回復することが出來なかつた。

今度は多分その呪ふべき金庫の番人といふ、面白くもない仕事が障つて、是迄よりも一層重い

容體に陷り、五六週間は想像し得る限りの情ない狀態で床に倒れてゐた。ヂュパン夫人から有名なモラン氏(一)を寄越してくれたが、その熟練と周到とにも似合はず、譬へやうもない痛みを感じさせるばかりで、どうしても消息子を入れることが出來なかつた。彼の勸めで、ダラン(二)にも診察してもらつた。果してその軟かな消息子が這入るやうになつた。併し、モランは私の容體を夫人に報告して、到底半年とは持つまいと斷言した。その言葉が私の耳に入つたので、私は自分の境遇について眞面目に反省させられた。あの厭で厭で仕樣のない仕事に縛られて、幾らもない餘生の安息と慰藉とを犧牲にして了ふ莫迦々々しさ。それのみか、自分の決めた嚴格な主義を、それとは何の關係もない此の地位と、どうして調和させることが出來ようか。理財局の金庫番人が、無慾と貧乏とを宣傳するのは都合が惡くなからうか。斯うした考が、熱とともに私の頭の中に大した勢で沸騰し始め、力强く互ひに結合して了つて、その後は何物もこれを取り去ることが出來なかつた。病後になつてからも、自分が病氣の最中に固めた決心を冷靜に固執した。私は永久にあらゆる幸運や出世の計畫を棄てて了つた。しばらくの餘命を、獨立と貧困との間に過ごさうと決心した私は、俗論の鐵鎖を斷ち、少しも他人の判斷に迷はされないで、自分のよしと認めたあらゆる事を勇ましく行ふために、自分のすべての精神の力を用ひた。私は無數の障礙と鬪ひ、無限の努力によつてそれに打克たねばならなかつた。私は出來得るだけ、また自分で望んでゐたより以上の成功をした。若し私が俗論の羈絆を斷つと共に、友情のそれをも脫れることが出來たならば、恐らく人類の曾て想像した最大の、若しくは少くとも道德に對して最有益な自分の目的は

遂げられたのであつた。それだのに私は、一方で所謂大家、所謂學者といふ奴等の愚論を蹂躪りながら、他の一方では所謂友人達に子供のやうに制馭されてゐた。私が唯獨りで新しい道を行くのを見た彼等は、嫉妬の餘り、表面私を幸福にしようと努めて居るらしく見せながら、實際私を嗤ひ者にすることに骨を折り、終には名譽を傷つけて了はうとして、まづ私を侮辱し始めた。彼等の嫉妬の的になつた物は、私の文藝上の才名よりも、此の時を初とする私の自己革命の方であつた。私が文章の方で才名を馳せたところで、彼等は見許して置けたらうが、行爲の上で、彼等の邪魔になりさうな實例を見せつけられては、容して置くことが出來なかつたからである。私は元々友情のために生れたのだ。私の親しみやすい、優しい氣質は、易々と此の情を育て上げた。未だ世間に知られなかつた時分、私は、知合の誰からも愛されて、一人の敵をも持たなかつた。それが賣れ出すと、もう一人の友人も無い身になつた。これは甚だ不幸であつた。が、それにも勝る大不幸は、友人といふ名の下に、その名に附帶した特權を、專ら私を破滅に引き込む爲にのみ振廻すやうな人間に、私が附き纏はれたことである。此の「懺悔錄」の後の方で、然うした忌まはしい陰謀が露はれて來るだらう。此處ではその起源だけを話して置く。その手始めの奸計は直ぐに分る。

(一) Sauveur-François Morand. 慈惠病院及び癈兵院の外科醫長。一六九七―一七七三。
(二) Jacques Daran. 侍醫。一七〇一―八四。

獨立でやつて行くにしても、口を糊らさない譯には行かない。私はその極く簡單な方法を思ひ

附いた。それは出來る丈多く樂譜を寫す事であつた。もつと確かな仕事がこの目的を果せるならそれにしたのだが、此の方が自分も好きであり、手足を縛られずに毎日の麵包も得られる唯一の道なので、然う極めて了つた。最早前途に對する不安がなくなつたと見て、私は虚榮心を打つちやつて、出納官吏から樂譜書きになつた。此の選擇で尠からぬ利益が得られた。そして已むを得ない時でなければ、此の仕事を廢したことはなく、廢してもすぐ復た始めるといふ位、此の選擇を後悔しなかつた。

最初の論文の成功は、此の決心の實行を一層容易ならしめた。賞與が來ると同時に、ヂドロはそれを印刷することに盡力してくれた。私が病床に臥てゐる時、書物の出版と其の結果を知らせる爲に寄越した彼の手紙に、「すばらしき評判にて、空前の成功に候」といふ文句があつた。何等の策も用ひない、無名の一作家に對するこの好評は、自信がありながら今まで始終疑つてゐた自分の才分について、始めて眞の保證を與へてくれた。私は、是から始めようとしてゐる仕事に取つても、これからいろんな利益が得られることを知つた。そして多少文壇に知られた人の樂譜書きなら、仕事が無いといふやうなことはあるまいと思つた。

愈々決心が十分に固まるや否や、私はフランクイユ氏に手紙を出して、その次第を通知し、彼及びヂュバン夫人の是迄の好意を謝し、又彼等の註文を賴んだ。フランクイユ氏は此の通知書を讀んだが要領を得ない、未だ熱に浮かされてゐることと思つて駈けつけて來た。併し彼は、私の決心の到底飜されない程堅いものだといふことを知つた。彼はヂュバン夫人や、その他の人達の

處へ行つて、私が氣狂になつたと吹聽した。私はそれを勝手に言はせて置いて、唯自分の道を行つた。自己革命は身の廻りから始めた。金ぴかの服裝、白の長靴下を止め、鬘も圓形のを冠つた。帶劍を解き、時計を賣つた。私は無上にうれしくて、「有難い、もう時間を知る必要がなくなつたのだ。」と言つた。フランクイユ氏は尙長いこと出納吏の地位を空けて置いてくれた。が、到頭私の意志の堅いのを見濟まして、それをアリバアル氏に讓つた。これは元年若なシュノンソオの家庭教師で、其の「巴里植物志」で植物に有名な人であつた（原註。此處に言つたことは、今頃は大方フランクイユや、その一味の人達から、全で異つた風に傳へられてゐるに相違ない。けれど私は、その當時から、かの陰謀が成立するまでの長い間、私が誰にでも話してゐた事實に基づいて言ふのだから、常識があり、誠意のある人々は、よくその事は承知してゐる筈である。）

奢侈を禁ずる私の革命は、隨分手嚴しかつたにしろ、初は自分の襯衣にまでそれを及ぼさなかつた。此の襯衣は私のヴェネチヤ時代の服裝の遺物で、質もよく、數も多く、餘程氣に入つてゐたものである。清潔な物にして置かうとしたのが贅澤な物にして了つて、隨分金が掛かつた。ところが或る男のお蔭で、この厄介が助かつた。降誕祭の前夜、「家庭教師」達が晩拜式に出て了ひ、私は聖歌會へ行つた留守の間に、屋根部屋の扉を抉じ開けて入つた者があつた。その部屋には洗濯したばかりの襯衣が殘らず干してあつたのだ。それをすつかり盜まれた。その中に私の極上等の靡の襯衣が四十二枚あつた。これが私の襯衣類の主もなものだつた。近所の人が話して聞かせたその時刻に包を提げて出て行つたといふ一人の男の樣子から推して、テレエズも私も、それは

テレエズの兄で評判のあの碌で無しだらうと察した。母親はそれを強く打ち消したけれど、色々の證據があつたから、母親はどんなに言つても私達の疑は去らなかつた。私はそれ以外の罪まで發見することを恐れて、追窮はしなかつた。此の兄はそれきり家へは顔を出さず、到頭行方不明になつて了つた。私はこんな縺れた家族に掛り合つてゐる、テレエズと自分との不運を怨めしく思つた。そして、こんな危險な係累を斷ち切つて了ふことを、いつよりも強く彼女に勸めた。此の一件から、私の襯衣道樂はふつつり止まつて、それからは極粗末な、外の着物と釣り合ふのでなければ着ないことにした。

斯うして自己革命が出來上がつたから、私はもう唯これを強固にし、永續させる事のみを考へた。それには第一、今も尙世論に拘泥してゐるすべての物、世の譏を憚つて其自體に善良且正當なものから、私を廻避させようとするすべての物を、悉く私の心から根絶やししなくてはならない。著書が好評だつたところから、今度の決心までが世間に響いて、註文がどつさり來たので、可なりの成功でこの職業を始めた。けれどもいろいろの理由で、反對の場合でのやうに成功は得られなかつた。第一私の健康がすぐれなかつたことだ。丁度此の時また、病氣が劇しく起つて、それが長引いて以前のやうに達者になれなかつた。私は自分のかかつた醫者が、病氣の上塗をしたのではあるまいかと思つた。診て貰つた醫者は、モラン、ダラン、エルヴェシユス、マルウァン、チエリなぞといふ、いづれも私の友人なり名醫で、各ゝ獨得の療法を施したが、輕快どころでなくて、甚だしく衰弱させた。醫者達の言ふ通りにすればする程、益々黃色くなり、痩せもし

弱りもして來た。彼等に脅かされた私の想像は、藥の利き目と容體とをくらべて見て、死ぬまで苦痛や、尿閉や、砂や、結石が引續くものとのみ私に思はせた。他人の病氣を輕くする煎劑や、溫浴や、刺胳なども、私の病勢を增すばかりだつた。唯ダランの消息子だけは、幾分か利き目があり、又、それが無くては生きてゐられさうもなかつたが、唯一時緩和される丈のものといふことを知つて、一生の間、よしダランが居なくなつた時でも持つてゐられるやうに、金を澤山出して消息子をうんと貯へ込んだ。八年乃至十年間は缺かさずこの消息子を使つたから、後に殘つてゐるのも合して、皆で五百圓は使つたらう。斯う金がかゝつて、痛くて、骨の折れる處置が、休みなしに私に仕事をさせて置かなかつたことは云ふまでもない。それに瀕死の患者が、その日その日の麵包を儲けるのに、一生懸命になれる筈もなかつた。

一方で文藝上の仕事が、又毎日の仕事の上に、それと同樣の不利な妨害となつた。論文が世に出るとすぐ、文藝の擁護者たちは、申し合せたやうに私に討ち蒐つて來た。題意すらも分らないで、大家振つて批判を試みようとする小さいジョス(一)君達の押し合つて來るのが、癪でたまらなかつたから、私は筆を取つて、その餘黨までも殘さないほどの勢で、幾人かをやつつけた。私の筆先にかかつて眞つ先に斃れた、ナンシのゴチエといふ人は、「グリム氏に與ふる書」の中で散々な目に遭はされた。その次はスタニスラアス(二)王御自身で、私と論壇に見えることを厭はなかつたのである。その志に感じて、私は王に對する答辯の調子を變へることに努めた。一層莊重に、而も可なり鋭利な調子を以て、評者に對する敬意を失はずに遺憾なくその說を駁した。私は神父

ムヌウ(三)といふエスイタ僧が、王の論文に手を貸したことを知つてゐた。私は王の直筆の部分と僧の加筆の部分とを、自分の敏感で看破つた。そしてエスイタ風の文句は遠慮會釋なく片端から攻擊して、處々神父のに相違ないと思はれる時代錯誤を指摘した。この論文は、どういふものか、他の作物ほどに評判は立たなかつたが、此の種のものでは今日までの唯一の作である。私はこれで、眞理のためには、一賤民といへども、如何に王者と論戰し得るかといふことを公衆に示す好い機會を捉へたのである。私が王に答へた調子以上に、自尊心と敬意とを同時に含ませるといふことは出來ないことだ。私は幸ひにも、阿諛に墮ちないで滿腔の敬意を示し得る論敵に向つたのである。それがために、可なり成功しながら、始終自尊心を失はなかつたのだ。友人達は私を氣遣つて、バスチイユものだ、と思つてゐた。私自身は、そんな恐れを一分でも抱きはしなかつた。いかにも然うだつた。此の寛仁な王は私の駁論を讀んで、

「もう澤山だ。此の上爭ふことはない。」

と仰せられた。それから後、私が王から敬意と眷顧とを受けたことは幾回もあつた。その內の或るものは、後に話す時があらう。そして私の論文は、佛蘭西と歐羅巴へ靜かに弘まつて行つたが、誰も非難を試みる餘地を見出さなかつた。

(一) モリエエルの「戀の醫者 *L'amour médecin*」に出る貴金屬商人の名。戀の病には何がよいかといふ時、それは寶石をやるに限ると勸める。その實自分の利益を考へてゐるのである。

(二) Stanislaw-Leszczynski. 波蘭土王。もと同國の貴族であつたのを、瑞典王カルル第十二世が波蘭土國皆をして選立させたのである。其の後一度位を奪はれて諸方に漂浪したが、その女マリヤを當代の佛蘭西王路易第十五世に納

れて后としたので、その後援で再び立つことを得たところ、波蘭土王位繼承の役後、雜因の和約で讓位を餘儀なくせられて同時にロレヌ公となり、且終生波蘭土國王の稱號と待遇とを受けることになつた。リュネヴイルやナンシに隱栖して學藝を奬勵し、自らも哲學政治上の述作に耽つた。*Œuvres pu philosophe bienfaisant* が此の王の全集である。*Le bienfaisant* は文藝の擁護者といふ所から得た稱號である。一七六六年歿。

(三) Joseph de Menou. スタニスラアス王の說敎師。一六九五—一七六〇。

少し經つと又一人の敵が現れた。それは十年前に、一方ならぬ好意を持つて、私を世話してくれたあの里昂のボルド氏その人だつた。忘れるともなくつい不性から怠つてゐて、彼に送るのに、丁度好い機會に出會さなかつたので、手紙も出さないでゐたのである。これは私がいけなかつたのだ。で彼は挑戰して來た。けれども鄭重だつたから、私も同じ樣に答へた。彼はもつと突つ込んだ調子で反駁を試みた。それゆゑ私も最後の答辯(一)をした。それきり彼は何も言はなかつた。けれども後には、一番熱心な敵となり、私の不幸に乘じて恐ろしい誹謗を試み、又私を中傷するためにわざ〳〵倫敦まで押し出したこともあつた。

(一) *Dernière réponse à M. Bordes.*

斯ういふ論戰で忙しかつた上に、樂譜を書く時間がひどく潰れて、眞理が進展するでもなければ、財布が煖まるでもなかつた。その頃私の原稿の引受書店だつたピソは、私の小册子に對して、碌に原稿料を寄越さず、時には全でくれなかつた。あの懸賞論文にしても、私は一厘も貰はなかつた。これはヂドロが只で彼に遣つて了つたのだ。だから長いこと待つて、くれる丈ちびりちびり引き出さなければならなかつた。樂譜の方も全で進まなかつた。二つの仕事をしてゐるのが、

双方の爲によくなかつたのである。

この二つの仕事は、又別の意味で互ひに妨げ合つた、卽ち異つた生活を私に強ひたからである。初めて書いた物が當つたので、私の名が賣れ出した。私の極めた生活法は、世の好奇心を唆つた。誰も皆、他人をあてにしないで自分の思ふ通り自由に且幸福に生活する外は何も望まないといふ、その變り者を知りたがつた。それが丁度私の計畫を壞して了ふことになつたのだ。私の室は、いろんな口實を設けて、私の時間を潰しに來る人々で空いてゐた事はなかつた。婦人連は亦樣々な手管を運らして、私を食卓に引き出した。私が手酷くすればするほど段々執拗くなつて來る。然う誰も彼も刎ね附ける譯に行かない。謝絕して多勢の敵を作つては、絕えず申譯をして廻らなくてはならない。私がどういふ態度に出た處で、一日の中に、自分の時間は一時間もなくなつた。

そこで私は、貧困に居て獨立するといふことは、想像したほど容易なことでないと感じた。自分の手仕事で暮して行かうとしても、傍が然うはさせない。彼等は私に潰させた時間の埋合せをする爲に、いろんな方法を考へた。色々な贈り物が私を見舞ひに來た。私は終に道化役者のやうに、出來る丈多くの役に早替りして見せなければならなかつただらう。これほど腑甲斐ない、殘酷な屈從があるものでない。これを避けるには、誰から寄越しても、大小ともに贈り物を拒絕するより外は無い。するとその爲に贈り手は益々殖えて、私の拒絕を打負かして、否應なしに彼等に感謝させる名譽を得ようとする。此方から賴んでも一圓の金も吳れさうもない人たちが、引つ切なしにいろんな進物を押つ附けに來た。そして私に刎ねつけられた腹癒せに、横柄だ、見得坊だ、と難癖を附けた。

今度の私の決心や、これから取つて行かうとする生活法が、テレエズの母親の氣に入らなかつたことは、いふまでもない。テレエズが幾ら無慾でも、母親の指圖には從ふ外はなかつた。そして、ゴフクウルの謂はゆる家庭教師達は、贈り物を拒絕するのに、いつも私ほど手嚴しくなかつた。種々な物を私に隱してゐたが、それでも私が見つけたもの丈でも、未だ外に澤山あつたことを想はせるに十分だつた。共謀だといふ非難——これは私に容易く豫見することが出來る——よりも、私は自分の家に對しても又自己に對しても、到底思ふ通りにはならないといふ傷ましい考に尙一層惱まされた。願つたり拜んだり怒つたりしてみたが何の效も無かつた。母親は私を怒り上戸だ氣むづかしやだとして了つた、私の友人を捉へて、密々話の絕え間がなかつた。一家の事はすべて私には祕密だつた。で始終嵐に近づかないやうに、私は何事が起つてゐても、知らうともしなかつた。すべてのごた〳〵を避ける爲には、頑としてゐなければならない譯だのに、私には然うは出來なかつた。私は喚くことは知つてゐても、斷行することは出來なかつた。彼等は私に言ふ丈言はせて置いて、自分達は、わが思ふ通りの事をしてゐた。

斯うした不斷の縺れ合と、毎日縛られてゐる煩い訪問のために、到頭私は自分の家と巴里での居住とが、不愉快になつて了つた。私は病氣の間に外出してもよい時や、知人たちに彼方此方と引張り廻されない時には、一人で散歩に出掛けた。私は自分の大主義を考察して、始終衣兜に持つてゐた手帖と鉛筆とを借りて、何物かを紙に書き附けた。自分の選んだ境遇の意外な不愉快が、

それを紛らす爲に、全然私を文界に投じたのは斯ういふ次第であつた。私の初期の作物のすべての上に、私の氣を取られてゐた憤慨と不平とが出てゐるのも、亦其處からであつた。

尙一つその原因になつたことがある。社會の習慣が分らず、又それを取り入れる事もそれに屈從することも出來ない境遇に在りながら、心にもなく社會に押出された私は、社會の習慣を免除してくれるやうな、自分流儀のそれでやり通さうと思ひ附いた。自分の打ち克てない、愚な、陰氣な臆病心は、世間の作法に背きはしないかといふ心配で固まつてゐるので、私は大膽になるために、そんな作法を蹂躙してやらうと決心した。恥しさが因で、辛辣な皮肉屋になつた。自分の行ひ得ない禮節を、痩せ我慢から蔑視した。尤もこの峻酷さは、自分の新主義と一致するものなので、私の心では貴いものとなり、道德の勇氣を帶びたことは事實である。私は斷言したい、斯うした崇高な基礎の上に立つたからこそ、私の峻酷な考も、私の本性とは餘程反した努力からは、思ひも寄らない程立派に、且永く持續されたのであつた。だが、私の外見なり、氣の利いた言葉から、世間で私を非社交家と呼んではゐたが、私は內輪では、始終その役柄に背いてゐたのである。友人や知人たちは、此の荒熊を羊のやうに引つ張り廻してゐたのである。皮肉と云つた處で、四角張つた、併し一般的な議論に關してだけで、誰に對しても一言でも失敬な言葉を吐くといふことは、決して出來なかつたのである。

「村の卜者(一)」が出ると、私は流行兒になつて了つた。それからは、巴里中に私ほど持て囃される者は無いくらゐになつた。此の曲は、私の生涯に一つの時期を畫するもので、此の話は當時

の交友の話にも關係がある。以後のことを明瞭にするために、少し詳しく說かなければならない。

(一) *Devin du village.* 一幕物の田園劇。詞章及び樂曲共にルソオの作。一七五二年十月十八日、初めて宮廷に演ぜられて後、一七五三年三月一日オペラ座で出た。此の作の成功は、曲その物の實價よりも寧ろ主として作者その人の評判の高いのに依つたのである。此の詩の主題は平板な牧野の光景であつて、一貫した性格も無く、劇的感激も無いものである。その旋律が朴直粗率であることは爭はれない。和聲も甚だ貧窮である。けれ共亦一方に樂趣の淸新を以て許す評者もある。

私に知己は隨分澤山あつたが、本當の親友といつては、ヂドロとグリムの二人だけだつた。自分に親しい人達は、互ひに親しい仲にしてやりたい所から、彼等二人を親しくさせずに置くといふことは、二人と親密な私には出來ない事だつた。私は二人を結び附けた。二人は意氣が合つた、そして却つて私との仲よりも一層親密になつた。ヂドロには無數の知己があつたが、グリムは外國人と云ひ殊に新參(二)で、是非知己を欲しがつてゐた。私はグリムにそれを周旋してやることばかり考へてゐた。彼にはヂドロも與つたし、ゴフクウルも與つた。シュノンソオ夫人や、エピネ夫人や、不本意ながら交つてゐたオルバック男爵(三)の邸へも連れて行つてやつた。私の友人は皆グリムの友人になつた、これはそれ丈の事だ。併し彼の友人は、一人も私の友人にならなかつた、これはこれ丈の事ではない。彼がフリエエズ伯の邸にゐた時分、彼は、よくその家の會食に私達を招いた。けれども、私は、フリエエズ伯は固より、特にグリムと懇意だつた伯爵の一族ションベエル伯や、その他グリムが彼等を通じて關係のあつた男女の誰からも、何の友情も恩惠も受けたことはなかつた。唯レナル師(三)丈は、グリムの友人でありながら私の友人となつて、時

には珍しい特志で金を惠んでくれたことがある。併し、私がレナル師を知つたのは、グリムが未だ彼を知らないずつと前からの事だつた。ちよつとした、併し私には忘れられない事件の時、私の爲に、愼重と誠實とを籠めた仕向けをしてくれてから後、私は始終この人に傾倒してゐたのである。

(一) グリムが巴里へ出て來たのは一七四八年である。

(二) Paul-Henri, baron d'Holbach. 佛蘭西當時の懷疑哲學者の一人。其の著者に「自然の組織 *Le système de la nature*」がある。「百科辭典」中にも寄稿した。彼は當時の新思想に熱中し、無神論者物質論者で、メカニスム、デテルミニスムの色彩が最も濃厚であつた。一七二三年獨逸バアデンのハイデルシヤイムに生れて佛蘭西に歸化し、一七八九年巴里で歿した。

第十八世紀の交際社會は前世紀から引き續いて來たサロン(客室)生活とクラブ生活とで日を送つた。殊に此の頃はサロンの全盛期で、これには饗宴と女とが必ず伴つてゐて、歡娛を盡した。本書の中には到る處に此のサロン生活の片影が窺はれる。今迄にもそれが度々出た。デファン夫人のサロンは、その女主の人物に基づいて、當時の社交界の最高水準を示し、モンテスキユウ、ヴオルテエル、ダランベエル等を吸引した。ジヨフラン夫人のサロンには、ヂドロ、ダランベエル、マルモンテル、オルバツク等、辭典家哲學者の一派が常に出入した。後等の爲に此の女主は莫大な金を擲つことを吝まなかつた。又ルワヤル・サン・ロツク町に在つたオルバツクの邸宅も、主人自身が金滿家であつた爲に、此處を當時の自由思索家等が、恰好のサロンとしてひし〳〵と詰め掛けた。ヂドロ、ダランベエル以下の辭典學者が始終入り浸りで、木曜日毎には辭典編纂上の協議會を開いた。ルソオがこの連中と際を生じてからは、Côterie holbachique 或は holbachiens と連りに呼び棄てにしたことは、本文で分る。此處の會の時には、主人夫妻も交つて盛んに談笑放言する者はしであつた。當代の懷疑家、無神論者、實證學者、革新文藝家、すべてに書い型を埋さうと欲圍いてゐる連中のみの集團であるから、氣焰の熾んであつた事は想像に餘る。その中で唯一人、よく云へば異色だが、皆からは執拗陰險と見られてゐたのがルソオであつた。其の他にエピネ夫人、エルヴエシユス、ネケエル夫人、レスピナス嬢等のサロンがあつた。

(三) Guillaume-Thomas-François Raynal. 佛蘭西の哲學者、歷史家。初めエスイタ僧、後文壇の人となつて「メルキユウル」を編輯した。主著の中で殊に名のあるのは、*Histoire philosophique et politique des établissements des Européens dans les deux Indes*, 1778. 雜誌を買つて數年間國外に放逐せられ、後巴里で歿。一七一三—九六。

レナル師は確かに熱意のある友人である。それは、今私の話をしてゐる頃に、彼の親しくしてゐたあのグリムへの態度で分る。グリムは暫らくフエエル嬢(一)と親しくしてゐる內、急に烈しい戀に陷つて、カユザツク(二)に取つて代らうといふ氣を出した。この女優は貞操を誇りにして、この新規の口說き手を體よく斥けた。グリムは此の事を悲觀して死んで了はうとした。彼は急に聞いた事もない奇態な病氣に罹つた。晝も夜も昏睡狀態がつゞいて、眼はちやんと開き、脈搏にも異狀は無いが、口も利かず、物も食はず、身動きもしない。人の言葉を聽いて居るやうでもあるが、口では固より樣子でさへ返辭をしない。興奮も無く、苦痛も無く、熱も無しに、唯死人のやうに横になつてゐた。レナル師と私とで看護の勞を分つた。師の方が身體が丈夫だから夜の番、私は晝の番になつて、二人が同時に傍を離れたことはなかつた、一人が來ない中に一人が出て行くといふ事もなかつた。フリエエズ伯は心配してセナク(三)を伴れて來た。この醫者は篤とグリムの容態を診たが、何でもあるまいと言つて、處方もくれなかつた。私は友人に對して心配の餘り、醫者の顏色をよく注意して視てゐたが、醫者は笑ひながら出て行つた。けれども病人は尙幾日もぢつとしたままで、肉汁も何も口にせず、唯私が時々舌の上に乘せてやる櫻んぼを、旨さうに喰ふ丈だつた。ところが或る朝彼は偶と起き上がつて、着物を着替へた。そして平生通りの事をしてゐた。私や、レナル師や、他の人達に向つても、彼はその奇態な昏睡病のことや病中に二人が

してやつた看護のことについては、一語も言ひ出さなかつた。

(i) Marie Fel (原文 Fel). オペラ座の歌女。ボルドオに生れ巴里に歿。一七一三―九四。
(ii) Louis de Cahusac. 詩人兼歌曲家。オペラ座の女優フエエル嬢はその愛人であつた。一七〇六―五九。
(iii) Sénac. 路易第十五世王の侍醫長、アカデミイ科學部員。一六九三―一七七〇。

この騒ぎは評判にならずにゐなかつた。オペラ座の歌女(うたひめ)の肘鐵砲が、男一匹を絶望で死なせようとしたといふことは、眞に珍談であつたのである。此の意氣な激情のために、グリムは世間の呼び物になつた。グリムといへば、變愛、友情、その他有らゆる意味の愛情の權化だと思はれた。この世評の結果、彼は上流の交際社會で大持てに持てて、それが彼を私から遠ざけることになつた。私といふものは最初から彼に取つて厄介物だつたのだ。彼が私と全く別れて了はうとしてゐるのが分つた。彼は暖い情を唯裝つてゐるだけだつたが、私はちつとも騒ぎ立てずにその情を彼に對して抱いてゐたのである。彼が社會で成功することは私の望む所だつた。けれども、自分の親友を忘れて然うなることを欲しなかつた。或る時私は斯う言つた。

「グリム君、君は僕を疎外してゐるね。それはまあいい。だが大評判の醉が醒めて、寂しさが身に染みて來たら、復た僕に歸つて來給へ、僕はいつだつて同じなんだから。今はまあ氣儘にし給へ、僕も放任して置かう、そして君を待つてゐよう。」

彼は私に尤もだと言つた。その通り手筈をして、自分の思ふやうにし始めたから、兩方に共通

の友人と一緒でもなければ、私はもう彼と會ふことはなかつた。

後に彼がエピネ夫人と親しくなる迄、吾々の主な會合場所は、オルバック男爵の邸であつた。此の所謂男爵は、成り上りものの息子で、大した金滿家だつた。彼はその金を善い方に使つて、邸へは文學者や材藝のある人たちを請待した。自身にも才學があつて、然ういふ人達の間に立ち交つても、遜色はなかつた。ずつと以前からヂドロと關係のあつた彼は、未だ私の名が顯れない頃にも、彼を介して私に交際を求めて來た。私の性來の毛嫌ひから、久しく此の申し出に答へないでゐた。或る時その理由を訊ねられたので、私は「あなたは餘り金持だから」と答へた。それでも強ひてと言つて、到頭此方(こちら)を負かして了つた。私の最大の不幸は、いつも人の媚に抵抗の出來ない事であつた。私はそれに負かされて了ふのをくやしく思はない時はなかつた。

もう一人ヂュクロ氏(ことも知り合だつたが、私に懇意にして貰へる資格が出來ると直ぐ然うなつた。數年前私はラ・シュヴレットのエピネ夫人の邸で初めて彼に會つた。彼は夫人とは親密だつた。唯一緒に食事をしただけで、彼はすぐその日歸つて行つた。食後ちよつと話をした時に、夫人は私のことや「粹詩神」のオペラのことを彼に話した。彼には立派な蘊蓄があり、從つて亦それのある者を愛せずには居られなくて、私にも好意を持ち、その家へ訪ねて來るやうに呼んでくれた。私の元來の氣質が知己を得て一層强くなつたけれども、臆病と不性との爲に、彼の好意以外に近づく手がゝりもなかつた中は、その儘引つ込んでゐた。ところが今度自分の作が成功し、彼も賞めてゐるといふことを聞いたので元氣づいて、彼に會ひに行つた。彼も訪ねて來た。斯う

して私達の間に、いつまでも彼を慕はせるやうな交際が始まつた。嚴正と、誠實とが、往々文藝と結びつくことが出來るものだといふことは、私自身の心では認めてゐるが、此の人に依つても知ることが出來る。

(一) Charles Pinot Duclos. 文士、歴史家、モラリスト。アカデミイ會員で、辭典家と親交があつた。奇趣と創意とに富んだ物語の著がある。前に出た「…伯の懺悔錄(一七四二)」といふのが名高い。その他「當世紀風俗の研究」、「路易第十四、五世朝の祕密文書」等がある。一七〇四―七二。

此の外にも、それ程親しくない交友は隨分澤山あつたが、こゝには一々言ふまい。それらは私の名が賣れ出した結果からで、彼等の好奇心が滿足させられたまでは續いた。私は見え透いた人間で、翌日見ると、何の新奇な所も無いのであつた。けれども一人當時私を慕つて、他の人々よりも固く私に寄添つてゐた女があつた。それはクレキ侯爵夫人(一)と云つて、マルタの大使、大法官フルレ氏の姪であつた。フルレ氏の弟は、かのヴェネチヤ大使モンテグ氏の前任者で、私がヴェネチヤから歸る時にも會ひに行つたことがある。クレキ夫人から案内があつたから、私はその邸へ行つた。夫人は私を親友とした。私は時々その家で食事をした。此家で多くの文學者に會つたが、その中に、「スパルタキュウス」や「バルネフェルト」なぞの作者ソラン氏(二)があつた。此の人は後に、どういふ譯からか、私の酷い敵になつた。ソランの父が曾て卑劣な手段で迫害した或る人と、私とが、同じ名であつたといふ事かも知れない。

(一) Renée-Caroline de Froulay, marquise de Créqui. 一七三七年結婚。一七一四―一八〇二。第十卷に再び註する。

(二) Joseph Saurin. 巴里の悲劇詩人。一七〇六―八一。父は Elie Saurin と云つて新教の神學者であつた。一六三九―一七〇二。ルソオと同名の人といふのはジャン・バチスト・ルソオのこと。ジャン・バチストがソランを誹謗して後遂に追放せられたことは、前の一七三二年の條に出た。

朝から晩まで働き通しにせねばならぬ樂譜書きに邪魔が多過ぎて、毎日の仕事があまり儲からないし、立派に仕上げようと思つてしてゐる事に、私は注意を集めることが出來なかつた。それに殘りの時間の過半は、書損を消したり削つたり、新規に書き直しをしたりすることで費えて了つた。斯うした煩累は一日一日私に巴里を堪へられなく思はせ、心から田舍を慕はせた。私はマルクシで幾日かを過ごす爲に何度も出掛けた。其處の助祭をテレエズの母親が知つてゐたので、餘り厄介を懸けないやうにして一切の仕度をした。グリムも一度吾々と其處へ行つた(原註。或る朝、二人でサン・ヴァンドリイユの噴水館へ食事をしに行くことにして置いた時、そのグリムとの間に起つた些細ながら忘れられない事件があつたのを、茲で話すことを忘れたから、もう言はないことにはするが、後になつて考へて見て、彼がその後あれ程見事に仕果せた例の陰謀を、その頃から心の底に蓄へてゐたのだと斷定した)。助祭は美(よ)い喉を持つてゐて唄が巧かつた。樂理は知らなかつたが、自分の役は早呑込みに、而も間違無く覺えた。私がシュノンソオで作つた三部合唱曲(トリオ)を唱つて樂しんだこともあつた。グリムと助祭とでどうにか斯うにか捏ね上げた歌詞で、私は二三曲を新作した。私は清らかな歡喜の瞬間に作つて唱つた是等の合唱曲を、外の譜本と一緒に、ウットンへ殘して來たのが殘念でたまらない。大方ダヴェンポオト孃(二)が、

捲髪紙(ピヨット)にでもして了つたであらうが、保存して置く價値は確かにあつた、而も多くは優れた對譜法のものである。斯う云つた遊山の時には、「小母(モバ)さん」も上機嫌でいそいそしてゐるので、それが私には嬉しく、自分もひどく調子づいて、或る時大急ぎで不出來ながら、助祭に與ふる文(二)を韻語で書いた。それは草稿の中に在る筈だ。

(一) 遙か後に英吉利のウットンでルソオが世話になつた人の娘。

(二) *Epître à M. de l'Etang, vicaire de Maroussis*, 1755.

もつと巴里に近い處で、私の同鄕人で、親戚なり友人のミュサアルの家に、もう一つひどく自分の氣に入つた足溜があつた。彼はパシイに瀟洒な隱宅を構へてゐたので、こゝで私は平和な時間を送つた。ミュサアル(一)は寶石商であつた。分別に長けた人で、商賣の方ではうんと金儲が出來たし、一人娘は仲買人の息子で、大膳職のヴァルマレット氏へ嫁入らせて了つたので、齡の寄り際に、煩い懸引商賣を廢して奮鬪と臨終との中間に、安息と享樂の一時期を作るといふ、賢い考を立てたのである。眞の實際的哲學者ともいふべき此の純朴なミュサアルは、自分の建てた住み心地の好い家の中で、自分の手で造つた綺麗な庭の中で、長閑な暮しをしてゐた。庭の臺地を深く掘り下げると、非常に澤山な化石の貝殼が出て來たので、彼の想像が昂ぶつて、自然界に貝殼の外は何物も目に入らなくなつた。終に宇宙は貝殼のみから成り立ち、全地球も唯その堆積に過ぎないと眞面目に信じて了つた。この問題と此の奇異な發見に沒頭して了つて、その逆上の結果、今にも彼の頭の中に新說、卽ち妄論が組み立てられさうにまでなつた。が、彼の推論に取つては

幸福だが、彼の慕はれてゐた、而も彼の隱宅を無上の樂地としてゐた友人に取つては甚だ不幸な「死」が、奇態な、殘酷な病氣で、彼から然うした考を奪ひに來た。胃の腫瘍がどこまでも大きくなつて、食物を通さず、長い間原因も知れずに、幾年か彼を苦しませて、到頭飢渴の爲めに死なせて了つた。私は此の哀れな、尊ぶべき人の最期を思つて、胸の痛みを感じずにゐられない。彼の苦悶を見ながらも、最後まで傍を去らなかつた唯二人の友人のルニイと私とを、さも嬉しさうに矢張饗應(もてなし)してくれた。自分はごく薄い茶を一滴も咽に通すことのならない、呑めば忽ち噎せ返さなければならない程の身で、前に並んだ御馳走を唯じろじろ眺めてゐる外はなかつた。併し此の悲みの日が來るまでに、彼の選り拔きの友人たちと、どのくらゐ樂しい日を私はその家で送つただらう！　その友人の筆頭に、プレヴォ師(二)を擧げたい。ごく柔和で素朴な此の人の感情は、彼の不朽の作品に生氣を與へてゐる。彼の諸作に漂ふ陰鬱な色彩は、その人の氣質や社交の上に、全く現れてゐなかつた。醫者のプロコップは女に大持てのエソップと云つていい。ブランジェ(三)は名高い「東洋專制政治」の遺稿のある人で、ミュサアルの新說を　宇宙の永續といふことにまで擴充してゐたやうだ。婦人ではヴォルテエルの姪のドニ夫人(四)、その頃は只の女子で、まだその才華を現さなかつた。ヴァンロオ夫人(五)は美人とは云はれなかつたが、愛嬌があつて、天使のやうに歌を唄つた。ヴァルマレット夫人も唄は巧かつた。ひどく瘦せてゐたけれど、あれで餘り愛嬌ぶらなかつたら、もつと愛嬌があつたのだらう。ミュサアル氏の社交界は、ざつとこんなものだつた。彼が貝殼の研究で夢中になつてゐるのが、もつと私に面白くなかつたら、その社交界

は可なり私に樂しかつたところである。だが私も六箇月餘り彼の書齋で、彼と同じ位の興味を持つて研究したと云へる。

(一) François Mussard. 父の名は Théophile. ジュネエヴに生れ巴里に歿。一六九一—一七五五。

(二) Abbé Prévost d'Exiles. 當代の佛蘭西の小說家。僧院、社會、軍隊、漂浪、樣々の生活を經て來た人で、作は甚だ多い。その中、*Histoire de M. Cléveland* は第一部第五卷の末に出た。傑作として知られてゐるのは、*Histoire du chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut*, 1733. で佛國小說史上に重要な位置を占めるものである。ルソオは彼から多大な影響を受けた。その他ドライデン、ヒユウム、リチャアドソン等を飜譯した功績も沒することが出來ない。一六九七—一七六三。

(三) Nicolas-Antoine Boulanger. 巴里の文學者、哲學者。一七二二—五九。

(四) Louise Mignot Denis. ヴオルテエルの殊愛をうけた。一七一二—九〇。

(五) 夫人の實は Carle Vanloo で、その兄と共に有名な畫家であつた。

餘程以前彼は、バシイの水が私の身體に藥になるから、自分の處へ飲みに來いと勸めてくれた。少し都會の雜沓を避けたい考から、私はその言葉に從つて、一週間か十日其處へ行つて見た。その水を飲んだといふよりも、田舍へ行つたといふことで心持が良くなつた。ミュサアルはセロが彈けて、伊太利亞音樂を熱愛した。或る晩床に就く前、私達は此の話に身が入つた。その話の中の滑稽歌劇は、二人が伊太利亞で見物して、面白く思つたものだつた。その晩眠れないので、私はどうすれば佛蘭西へも、此の種の劇を解させることができるだらうかといふことを考へ通した。「ラゴンドの愛神(一)」なぞは、それとは全で似もつかないものだつたからだ。朝、散步をしたり水を飲んでゐる間に、偶と私は卽座に唄の文句を作り出し、その間に浮んだ曲をそれに合はして

見た。庭の高味にある圓天井の離れのやうな處で、なぐり書きに悉皆書いた。茶の時に、ミュサアルや、家政婦のヂュヴェルヌワ孃に見せないでゐられなかつた。彼女は可愛い、氣立のいゝ女だつた。私の走り書きした三節の歌詞は、第一獨白の

J'ai perdu mon serviteur;
わが僕は失せにき。

ト者の詠嘆詞の

L'amour croît s'il s'inquiète,
悶ふるにこそ戀は增され。

それから最終の二部曲の

A jamais, Colin, je t'engage.
永遠に離れじ、わがコラン。

などであつた。私はこれを書きつゞけるだけの價値のあるものとは少しも思つてゐなかつた。だから若し此の二人の賞讚と激勵とが無かつたら、今までも、少くとも是位のものは幾度でもさうして來た通り、この紙屑を火の中に焚べて了つて、思ひ出しもしなかつたのだ。ところが、彼等の煽り方が强かつたので、六日目には幾らかの詩句を除いた外、劇が完成し、曲譜も全部出來上つて、巴里では、唯宣敍調の一部を作曲して、全體の修正をすればいい所までになつた。そしてあとは大急ぎで完成し、三週間で淸書を濟まして、何時でも舞臺に掛けられるやうになつた。

唯缺けてゐたのは間曲（ヂヴエルチスマン）だけで、こればかりはずつと後になるまで出來なかつた。

（一）*Les Amours de Ragonde.* 此の歌劇は、デッシュ Nericault-Destouches の作歌、ムレ Mouret の作曲で、此の時丁度オペラ座で上演されてゐたのである。デッシュは當世紀佛蘭西に於ける喜劇作家として最も有名な一人。其の作十七篇に上つて、傑作には *Le Glorieux* がある。此の作に就いては後に出る。一六八〇―一七五四。

一七五二。

此の作曲に私は熱狂して了つて、一度それを聽いてみたくてたまらなくなつた。嘗てルルリニが、自分獨りの爲に「アルミッド」を演らせたといふやうに、木戸を卸して自分の好きなやうに演らせて見ることが出來たら、私はどんなことをしても惜しくはなかつたらう。が、私の場合では、公衆と一緒でなくては、自分も觀ることが出來ないのだから、自分の作を樂しむには、どうしてもオペラ座でこれを採用して貰ふ外に途がない。生憎此の曲は新奇に過ぎて、一般の聽き慣れないものだつた。それに此の前「粹詩神」に失敗してゐるから、今度又私の名前で出したら、復た失敗は眼に見えてゐた。ヂュクロは此の心配を救つて、作者名を出さずに試演させることを引受けてくれた。私は自分を暴露しないやうに、稽古にも出なかつた。で、それを指揮する二人のヴィオロン彈手（ヒキ）（原註。ルベルとフランクウルとは、若い時分から二人連れで方々の家でヴィオロンを彈いて歩いたから、Les petits violons（プチ ヴィオロン）いふ綽號（あだな）を取つたのである）すらも、一般の賞讃が此の作の眞價を證據立てるまで

は、作者が誰なのかを知らなかつた。聽衆は孰れも醉つたやうになつた。その爲に翌日からは、何處の社交仲間でも、此の曲の話で持ち切であつた。稽古の時に來てゐた宮内省のキュリ氏は、これを宮中で演奏させようと言ひ出した。私の意中を知つてゐるヂュロクは、宮廷では私の思ふ通りになりかねて、市中でやるやうな譯には行くまいといふので斷つた。キュリは職權を以て要求して來た。ヂュクロは動かなかつた。二人の間に口論が烈しくなつて、或る時オペラ座で、若し人が引分けなかつたら、二人は一緒に外へ出るところだつた。私の方へ直接に勸めにも來た。私は解決をヂュクロに委して了つた。復たヂュクロの方へ取つて還さなければならなかつた。オモン公爵が中に這入つた。到頭ヂュクロも權威には屈する外ないことを知り、フォンテヌブロオで演ぜられるためにその曲を渡した。

（一）Giovanni Battista Lulli (Jean-Baptiste Lulli.) フイレンツエに生れ、巴里に來て路易第十四世朝に歌劇作者として盛名を博した人。巴里のオペラ座は此の人の創立に係る。名作には「アルミッド *Armide*」の外に *Psyché*, *Proserpine* 等がある。一六三三―八七。

私が一番力を入れ、一番舊い型から離れて作つた部分は宣敍調であつた。これには全く新しい風の强聲が附いてゐて、臺詞（せりふ）の口調に連れて進行するのであつた。是ほど思ひ切つた新物が無事に通る道理はなく、愚昧な俗耳に背く虞があつた。私もフランクイユとジェリヨットが、別の宣敍調を作る事に同意した。けれども、私自身それに關係しようとはしなかつた。

一切の準備が出來て、開演の日も極まつた時、私は、せめて本稽古丈でも觀に、フォンテヌブ

ロオへ出掛けないかと勸められた。私はフェエル孃にグリム、それから、たしかレナル師と一緒に、宮廷の馬車で其處へ行つた。本稽古は先づ可なりの方で、私は豫想外に滿足出來た。管絃樂部は、オペラ座附のものと、宮內省の音樂隊とで組織された大規模のものだつた。ジェリヨットがコラン、フェエル孃がコレット、キュヴィリエが卜者の役で、合唱はオペラ座の連中だつた。私はちつとも口を出さなかつた。ジェリヨットが總指揮の任で、それに對して私は干涉しようと思はなかつた。そして私は羅馬人然として構へ込んでゐたにも拘らず、此の多勢の中で學校の子供のやうに含羞んだ。

翌くる開演當日、私はグラン・コマンのカフェエへ朝飯を喰ひに行つた。多勢の人が來合はせてゐた。人々は昨夜の本稽古の事や、入場の容易でなかつた事を話し合つてゐた。そこに居た一人の將校が、樂に入場したと言つて、その夜の光景をくどくどと述べ立て、その作者の風采から一言一行までも報告した。此の隨分長い話で驚いたのは、如何にも平氣に、又率直にしてゐながら、唯の一言も眞實の事が無かつたことだ。現に彼がそんなにしつかり見たといふその作者が、今鼻の先に居るのも知らないでゐるところから見ると、あれ位知つた風に話した彼は、實は入場したのでなかつた事が見え透いてゐた。それよりも此の場で尙不思議な事は、それが私に及ぼした影響であつた。その將校は、相當年輩の人で、づうづうしい大法螺を吹き立てるやうな態度も樣子も無かつた。容貌にも勳功のある人といふことが現れて居り、聖路易十字章にも、一個の舊將校たることは現れてゐた。私は我にも無く、彼の厚顏さにも似ず、彼に同情の念を生じた。彼

が頻りと、嘘を吐いてゐる間、私は赤くなつて、眼を伏せた。私は針の上にゐるやうな心持がした。時々私は、彼が無邪氣な間違をしてゐると思へないものかと考へて見た。所がその中に誰かが私を見つけて、此の將校に面目を失はせはすまいかと、氣が氣でなくなつたので、物も云はずにショコラを呑み干して、その人の前を俯向いて通り拔けて、大急ぎに外へ出た。その間に、人人は彼の話を捉まへて、賑やかに喋つてゐた。町で私はびつしより汗になつてゐるのに氣づいた。若し私がそのカフェエを出る前に、誰かに見附かつて呼掛けられでもしたら、哀むべき將校が嘘が暴れて苦しむだらうと思ふ氣持だけで、私は必と罪人の恥かしさと狼狽とを見せたらうと思ふ。

さて是から私は生涯のかの大事な一時期に入るのである。これに就いては唯述べる丈でも困難である。何故なら、唯述べるといふことにすら、誹毀か辯解の跡がないといふことは殆ど不可能だからである。とにかく私はどういふ風に、またどういふ動機で行動したかといふことを、褒めも誹りもしないで、報告することにしよう。

その日(一)の私の服裝は、不斷の着のみ着の儘で、鬚は蓬々と延びて、櫛目も碌に入れない髮をつけてゐた。自分の不作法を却つて磊落のつもりで、やがて國王　王后、王族、その外宮中を擧げて、臨場せられるといふ劇場へ、その儘這入つて行つた。私はキュリ氏の案內で、その人の桟敷へ陣取ることになつた。それは舞臺の上に當る廣い場席で、向ひ合つて一段高い、小さい桟敷には、國王がポンパヅウル夫人と列んで席を占められた。私の周圍は貴婦人ばかりであり、而も私は桟敷の突端に出てゐる唯一人の男なので、これは必と多勢の目の附く處へ置いたのだと思はな

い譯に行かなかつた。燈火が這入ると、此の扮裝で、盛裝した人たちの中に挾まつてゐる自分が顧みられて、不安になり出した。是は自分の坐るべき場席か、又これはそれに相應した服裝だらうか、と自分に問うてみた。暫く不安でゐたが、やがて、「これでいいんだ。」と勇ましく自分に答へた。この勇氣は、前の廣言を取消す譯に行かない所から來たもので、理性の力からではなかつた。斯う私は言つた。「俺は自分の場席に坐つてゐるんだ。自分の劇の上場を觀よう爲に、こゝへ請待されて來てゐるのだ。その爲ばかりに此作をしたのだ。自分の勞作と技能の成果を鑑賞するのに、俺以上の權利を誰が持つてゐるのだ。着物だつて是が俺の通常服で、特別に善くもなければ惡くもないんだ。今若し何事かで俗論に從ひ始めると、何事も皆それに從はなければならなくなる。いつでも自主を通さうと思へば、どんな場所へ出ても、自分の選んだ生活法に適した服裝をするのを恥ぢてはならない。容貌だつて平凡で構はない方だが、垢も附いてゐなければ、不潔でもない。鬚も天から授かるのだから、その物が見苦しいのではない。時と品によつては、裝飾にもならうといふのだ。俺を滑稽だとか、無禮だとかいふ奴もあらう。あつたつて何だ。事實然うでさへなければ、輕蔑でも非難でも我慢が出來なくては駄目だ。」斯う獨りで氣焰を吐いて、若し頑固を張り通す必要があれば、十分張り通すといふ覺悟をした。併し國王の御前であつたせゐか、自然の感情に由つてか、今私といふものを對象としてゐる人々の好奇心の中には、親切と好意との外に何物も認められなかつた。然う考へると心を打たれて、終に自分自身と作品の效果とに就いて、又も不安の情が萌し始めた。ひたすら私を賞讃する事のみを考へてゐるらしい、いかにも有利な

公衆の豫想を、なくなして了ふことを恐れたのである。私は嘲笑に對する警戒をしてゐた。併し案外な彼等の親切な態度に、私は全く恐れ入つて、愈々始まつた時には子供のやうに顫へて居た。

（一）一七五二年十月十八日。「村の卜者」が初めてオペラ座で公演になつたのは一七五三年三月一日である。

が、私はすぐと元氣を取り直すことが出來た。優技の方は甚だ拙かつたが、音樂の方は、唱歌も奏法もどちらも旨かつた。實際人を唆るやうな純眞さを持つた第一幕から、場席ごとに驚嘆の囁きが聞え出して來た。此の種の曲に對しては、曾て無かつたことである。その盛んになり行く沸騰は、やがて小屋中に響き渡るほどに、又、モンテスキュウ流に云へば、效果が效果を高める程になつた。二人の仇氣ない男女の出場になると、その效果は絶頂に達した。國王の前だから手は拍けない。それが爲に話し聲は殘らず聞える。曲と作者とで話は持ち切である。天使のやうに美しく思はれる婦人達の小聲で話し合ふ囁きが、私の周圍に聞えた。

「いいわねえ、恍惚するやうだわ。どの音だつて胸に響くんですもの。」

こんなに澤山な可愛い婦人達を動かし得た喜びに、私は自分が涙ぐむまで感激した。そして泣いてゐる者は自分ばかりでないと氣が附くと、第一二部曲の始まるまで、どうしても涙が抑へ切れなかつた。と、ふと私はわれに還つた。トレトラン氏の家の演奏會を思ひ出したのである。此の回想には、勝利者の頭上に桂冠を捧げる奴隷くらゐの效目があつた。併しそれも瞬間の事で、すぐ又餘念もなく、十分に自分の榮譽を味ふことの享樂に耽つた。けれども此の時の享樂の中に

は、作者としての虚榮心よりも、異性から受ける實感の方が、餘計に這入つてゐたことは確かだ。だから若し聽衆が男ばかりだつたら、實際私がのべつにしてゐたやうに、私の流す甘い涙を唇で受け込むやうな愉悦に浸らなかつたに相違ない。私は、是よりもつと烈しい驚嘆を博した色々の曲を觀たことがある。併し、是程完全な、甘美な、人を唆るやうな酣醉が、演技の果てるまで、而も宮廷で初日早々充滿したといふことは未だ知らない。この芝居を觀た人たちは、これを思ひ出されるに違ひない。無類の成績だつたのだから。

その夜オモン公爵から使が來て、明日十一時に宮中へ伺候しろ、陛下に拜謁させるからとのことであつた。此の使命を傳へたキュリ氏は、更に斯う附け加へた。多分年金を給與される話で、陛下が親からその御沙汰を賜はるのだらうと。

それ程輝やかしかつた日の夜が、私に取つて苦悶と懊惱との一夜であつたことを、誰が本當にしよう。拜謁といふことから第一に私の思ひ浮んだのは、これからは始終外へ出てゐなければならなくなるといふことだつた。このためには、芝居に這入つてゐる時ですら、いい加減惱まされたのだ。況して明日(あした)廻廊か王の御座所で、多數の大官連と交つて、陛下の出御を奉迎するとなつたら、又しても苦痛だ。この氣の弱さが主もな原因で、社交界から離れて了ひ、貴婦人達の中へもぐり込みにも行かなくなつたのだ。そんな必要に引込まれさうな境涯を考へて見ただけで、もう病氣になるくらゐそれを感じさせるのであつた。さもなければ死に勝る程の惡評を受けなければならないのだつた。此の境涯を知つてゐる人でなくては、此の危險を冒す恐ろしさは分らない。

續いて私は陛下に引見せられて、拜謁する時の自分を想像して見た。陛下は私の前に足を駐められて、お言葉を賜はる。この場合のお答へは、適切に、そして氣を張つてしなくてはならない私の因業な臆病心は、少しでも見知らない人の前で直ぐ私をどぎまぎさせるのだから、果して佛蘭西王の御前で出ないで濟むだらうか、又奉答すべき適當な用語を、即座に選擇させてくれるだらうか。私は自分の定めた嚴肅な態度調子を棄てないで、かかる大君主の優渥なお思召に感激した心持を表したいのである。それには適切な美しい讃詞の中に、何か大した有益な眞理を含ませなければならない。豫め旨い答辭を用意しようと思へば、陛下の仰せられることが、前以つて確かに分つてゐなければならない。縱し然うした所で、いよいよ御前へ出れば、考へて置いた言葉が、一つも思ひ出せないことは知れてゐる。その場合、滿廷の朝臣達の眼の前で、苦し紛れに平素の間抜けた言葉を口走つたとしたら、どんな事になるだらう。私はその危さに驚き、恐れ、をののいて、どんな事があらうと、そんな場所へは決して出ないと覺悟するまでになつた。

まさしく下附された年金を私が失つたのは事實だ。併し、それと共に、背負はせられる束縛をも脱れた。眞理と自由と勇氣とに別れを告げたとせよ。どうして此の後獨立と無私とを說くことが出來よう？ 若し此の年金を受ければ、私はもう媚を呈するか、口を噤むより仕方がないのだ。況して年金とて、その支拂を誰が保障してくれるのか。どれ程足を使つて、どれ位の人に賴んで廻らなくてはならないだらう。此の恩典を取り逃がすまい爲に、寧ろそれに浴しないよりも、どの位心遣ひをして、どの位餘計な可厭な思ひをしなくてはならないか分らない。で私は、この恩

典を斥けるのが自分の主義と一致する行爲で、眞理のために形式を犧牲にするものだと信じた。私はこの決心をグリムに話した。彼は少しも反對しなかつた。私は他の人達には病氣と言ひ觸らしてその朝出て了つた。

私の去つたことが世間の評判になり、一般から罵られた。私の心持は誰にも分る譯はなかつた。傲慢な莫迦野郎だといふやうな非難が直ぐに出た。そして、俺なら然うはすまい、なぞと考へてゐた連中の嫉妬心を十分に滿足させた。翌日ジェリョットから手紙が來た。私の作品の成功と、陛下御自身の熱狂とについて細々と書いてあつた。その一節に「陛下には、國中に又とあるまじき調子外れの御聲にて、J'ai perdu mon serviteur; J'ai perdu tout mon bonheur（わが僕は失せにき。わが幸は失せ果てにき。）と、終日唱歌を絶ち給はず候。」とあつた。そして、二週間後には「卜者」の第二回目の公演をして　第一回目の十分な成功を、公衆の眼に訴へることにした、と書き添へてあつた。

二日經つて、午後の九時頃、いつもの通り夕飯を喰ひにエピネ夫人の處へ行くと、その戸口で一臺の貸馬車と擦れ違つた。馬車の主が私にも乘れと手招ぎするから、乘り込む。それはヂドロであつた。例の年金の事を、こんな問題に哲學者としては不似合な程熱心に話し出した。國王への拜謁を辭退したことに就いては彼も私を責めなかつた。併し、年金に對する私の冷淡を、大へんな罪惡だといふのだ。そして言ふには、君自身の事で無慾はいいとしても、テレエズ母子の爲からいふとそれでは濟むまい。二人に麵包を與へるためには、正當な、あらゆる手段を忘れ

てはならない。而も、未だきつぱり年金を拒絶して了つたといふのでもなし、向うは今でもその氣がないでもない樣子だから、何としてでも願ひ出て、金を貰はなくてはいけないと言ひ張つた。私はその熱心に動かされたけれど、彼の敎訓を容れることは出來なかつた。で、この問題で到頭二人の間に一場の激論が始まつた。これがヂドロとの最初の喧嘩であつた。二人の喧嘩は、いつでも斯うした種類の事に極まつてゐた。これが君の義務だと、自分で極めて押付けて來ると、私は、又何でそれが義務なものかと思つて刎ねつけるのであつた。

二人が別れた時は大分遲かつた。私は一緒にエピネ夫人の食卓へ連れ込まうとしたが、彼は聽かなかつた。自分と懇意な人達は、また互ひに懇意にさせたいといふ私の希望から、何とかしてヂドロを夫人に會はせようとして、遂には彼に門前拂を喰はされてまで、夫人を連れて訪ねて行つたりして、幾度も骨を折つてみたが、彼は唯口を極めて夫人を罵る許りで、始終それを拒んでゐた。私が夫人との間に、又ヂドロとの間に不和を生じてから、その二人は初めて懇意になり、彼も夫人のことを善く言ふやうになつた。

その時からヂドロとグリムが、「家庭敎師達」を私から引き離さうと企らんでゐるやうだつた。彼女達が樂になれないのは私の不心得からで、何時になつても見込みはあるまいと彼女達に吹き込んだものだ。鹽の小賣店か煙草店を出してやる――それはエピネ夫人の力に由るのだといふのだが、その譯はいまだに私には分らない――といふ約束で、頻りに私と別れさせようとしてゐた。まだその上に二人は、ヂュクロとオルバックをもその聯盟の中へ引き込まうとした。が、ヂュク

口はどうしても聽かなかつた。その時私は然ういふ魂膽をちらと耳にはしたが、明かにそれを知つたのは、大分經つて後のことだつた。私の友人等が、この身體の利かない私を、最も陰慘な孤獨に陷れようと圖つて、自分達の考で、私を幸福な者にしようと努力してゐるその無茶な、考の無い熱心を、私は時々悲しまなければならなかつた。その手段は、實は私を悲慘な者にするのに最も適當なものだつたのである。

一七五三。

翌一七五三年の謝肉祭に、「卜者」は巴里で上演された。その間に私は、序樂と間曲とを仕上げることが出來た。版になつて出たその間曲は、初めから終まで、所作のある續き物で、自分では極く面白い場景を見せるものと信じてゐたのだ。ところが、此の考をオペラ座へ持ち出してみると、誰も成る程といふ者がない。仕方がないから、樂譜も舞踏も通り一遍の物を綴り合はせた。さういふ譯から、この間曲は、場面の美を傷つけない面白い着想に滿ちてゐたのに、成績は甚だ平凡だつた。私は、ジェリヨットの宣叙調(レチタチイヴォ)を削つて、その代りに最初自分で作つて版になつてゐたものを嵌め込んだ。この宣叙調は實のところ多少佛蘭西臭く、言ひ換へれば、役者がだらしなくして了つたけれど、別に聽衆に不快をも覺えさせず、咏嘆調にも劣らず成功して、少くともそれと同じ位善く出來たものと公衆にも認められた。私はこの曲の世話をしてくれたデュクロにこれ

を獻呈し、同時に是が自分の唯一の獻呈だらうと發表した。けれども彼の同意を得て、二回目の獻呈をしたことがある。併し、誰にも獻呈しなかつたより、然うした例外のために、彼は一層私から尊重されたのだと思ふべきであつた。

此の曲に就いては色々の逸話がある。が、もつと重大な事件を話さなければならないから、緩り話してゐる暇がない。それは何時か補遺の中にでも述べることにしよう。唯次の事丈は、後のすべての事件に關係があるかも知れないから省くことは出來ない。私は或る日オルバック男爵の室で樂譜を調べてゐた。いろいろな曲を見て了つた時、男爵は一册のクラヴサン曲集を見せて、

「これは皆私が作曲させたもので、樂趣のすぐれた、隨分面白いのが澤山あります。私の外には誰もこれを知つてる者がないのだし、見せもしないんです。君はどれでも一つ拔き取つて、間曲の中へ入れてみたらいいでせう。」

と言つた。私の頭の中には、咏嘆調や交響體の主題が、使ひ切れないほど澤山あるので、その本のお世話にならうなぞとは思ひもしなかつた。けれども強ひてと言はれるので、御機嫌取りに牧歌を一曲選り出して、それを節略したものを三部曲にして、コレットの仲間の登場に使つた。幾月か經つて「卜者」がまだ演(あ)いてゐる頃、グリムのところへ這入つて行くと、多勢がクラヴサンの周圍に集まつてゐた。私が來たので彼は急に起ち上つた。私は何心なく譜面臺の上を見ると、オルバック男爵の、あの同じ曲譜集が載つてゐて、而もこの間男爵が、決して自分の手から外へは出ないだらうと誓つて、無理に私に拔き取らせたその同じ牧歌が出てゐるのであつた。それか

ら又後に、エピネ氏の宅で音樂會のあつた時も、氏のクラヴサンの上に、やはりその本が開いて載せてあつた。グリムもその他の人も、この唄の事は何とも言はなかつた。今私が自分の口から、茲で斯ういふ事を言ふのも、實は後に、「村の卜者」は私の作でないといふ風評が弘まつたからである。私は惡達者な作曲家ではなかつたから、若し私の「音樂辭典」が無かつたら、人は必と私を作曲などの出來る人間ではないと言ひ出しただらう。（原註。「辭典」があるのに、到頭然う言ひ出して來ようとは、未だ殆ど私には見通しが附かなかつた）。

「卜者」が上場される少し前に(一)、伊太利亞の滑稽歌劇が巴里へ乘り込んで來た。オペラ座でやらせることにはなつたが、それがどんな結果を生ずるかは豫想がつかなかつた。曲は拙劣でその時は格別無智だつた管絃樂部が、勝手に演奏の曲を打壞して行つたけれど、それが佛蘭西のオペラに向つて、永久に償へない打擊を加へることになつた。二樣の音樂を、同じ日に同じ劇場で聽いて比較するといふことは、佛蘭西人の耳を開けた。伊太利亞音樂のきびきびとして鋭い强聲の後で、誰も佛蘭西音樂のだらしなさに我慢してゐることが出來なかつた。伊太利亞のが濟むと、皆歸つて了つた。餘儀なく順序を變へて、伊太利亞のを切へ廻した。「エグレ」、「ピグマリオン」、「ル・シルフ」と出して見たが、對手にもならなかつた。唯一つ「村の卜者」だけが踏みこたへた。而も「奥樣女中(二)」の後ですらさうだつた。私が自分の曲を作した時には、然ういふ曲が胸に滿ちてゐた。云はばそれ等から着想を得たのであつた。そしてそれらの曲を私のと竝べて演ずることにならうとは、實に意外だつた。若し私が剽竊家だつたら、その時どれ位ぼろを出して、

どんなにそれを思ひ知らされたことだらう。ところがそんなことはちつともなかつた。皆は骨折損で、私の曲の中に、是ばかりも模倣の跡を見出すことが出來なかつた。そしてすべて私の歌曲は、謂ふ所の原曲と比べて見ても、例の私の發明した音符と同樣、全く新しいものだつた。若しモンドンヴィルやラモオを、此のやうな試錬に遭はせたならば、彼等は疵だらけになつて逃げ出しただらう。

(一) 一七五二年八月中。

(二) *La Serva Padrona.* 此の曲は伊太利亞の名匠ペルゴレエジ Giovanni Battista Pergolesi の傑作曲。伊太利亞歌劇史の上では、エポックメイキングのものと稱せられる。

滑稽歌劇の俳優は、伊太利亞音樂のために、甚だ熱心な歸依者を得た。巴里全市は、國政か宗教上の大問題に關してよりももつと熱狂した二派に分れた。片方は貴族や富豪や婦人達が組織して、一方より優勢で頭數も多く、佛蘭西音樂を擔いでゐた。片方は活氣に滿ちて、鼻息の荒い熱心な組で、眞の鑑賞家、專門家、天分ある人から成り立つてゐた。この小人數の一隊は、オペラ座の玉后の御座の眞下に集まつた。他の一隊は、土間、棧敷の殘りの全部を占めてゐたが、その本部は王の玉座の眞下にあつた。當時有名だつた此の二派に、王黨、玉后黨の名を命ずるに至つたのは、それからだつた。兩黨の論戰が烈しくなつて、色々な册子が出た。王黨から揶揄ひに來る、「小豫言者」でそれを愚弄する。又小理窟を列べて來る、「佛蘭西音樂に就いて」でそれを撲ちのめす。一つはグリムの手に成り、一つは私の手に成つたものだ。この二つの小册子だけが喧嘩

のあとに殘つて、その他のものは悉く亡びて了つた(一)。

(一) 此の論戰が久しく結んで解けなかつた間に、斯ういふ類の小冊子が六十種以上も世に出た。

併し、私の意に反して長い間私の書いたものにされてゐた「小雜言者」は、冗談に見做されて、その筆者には少しの害をも與へなかつた。ところが「佛蘭西音樂に就いて」の方は喧しくなつて、自國の音樂を侮辱するものだといふので、全國民が私に突つかかつて來た。此の小冊子の大へんな結果を述べるのは、タシット(一)の筆に俟たなければなるまい。折から高等法院と僧侶との間に大爭亂のあつた時だつた。法院は丁度追放されて、騷擾は絶頂に達した。あらゆるものは、來たるべき暴動を語つてゐた。其處へ私の小冊子が出たのである。と、外の一切の紛爭はふつつり忘れられて了つて、人々は唯、佛蘭西音樂の危急といふ事しか考へなかつた。だから暴動と云へば、私に對してより外にはなくなつた。國民が、いつまでも全く鎭まり切らない程の騷ぎだつたのだ。宮廷では專らバスチイユか流刑かといふことを審議した。若しも、ヴワイエ氏(二)が、その審議の滑稽なことを說得しなかつたら、逮捕狀が發せられる處であつた。此の小冊子が多分國家の革命を防止したのだと聞けば、人は私が夢でも見てゐるのだと思ふだらう。けれどもこれは疑もない事實である。此の奇談から今日まで、未だ十五年と經つてゐないのだから、巴里人のすべては、今でもそれを證明することが出來るのだ。

(一) Caius Cornelius Tacitus. 羅馬の大史家。五五―一三〇（又一四〇）。

(二) Marc-Pierre de Voyer, comte d'Argenson. 當時の首相アルジヤンソン侯の兄弟で、政客。藝術のアマツウ

ルとしては常に衆に先んじた。一六九六―一七六四。

私の自由は侵害されなかつたが、併し私は容赦なく侮辱だけは與へられた。生命さへ危かつた。オペラ座の管絃樂部の連中は、芝居の歸りに私を暗殺しようといふ、殊勝な陰謀を企てたのである。その事が私に聞えた。それがために、私は一層繁くその座へ顏を出した。私に友情を寄せてゐる銃兵の士官アンスレ氏が、その陰謀の裏を搔いて、私には知らせずに、芝居の歸りを兵卒に護衞させてくれたといふことを、餘程經つて聽き知つた。この時、市はオペラ座を經營することになつた。巴里市長の手はじめの功績は、私の無料入場券を奪ひ取ることであつた。それも不德義極まる遣り方で、私が芝居に這入るところを、公然入場を刎ね附けたのであつた。茲で引き返すのも恥辱だから、仕方なしに切符を一枚買つて這入つた。私が自分の作を彼等に讓つた時に取つた唯一の報酬が、終身の無料入場權なのだから、それだけこれは怪しからぬ不當な事だつたのだ。何故なら、無料入場は一般作者の特權であり、且私は二重の資格で此の特權を有つてゐながら、尙特にヂュクロ氏に立會までさせて約定したのだからだ。座の會計方から報酬として、請求もしない五百圓といふ金を送つて來たのは事實である。が、此の五百圓とても、規定で私に這入る報酬額にも達しない程のものであることは固より、正式に約定した全然別途の入場權とは、何等の關係もないものだつた。此の仕打の底には、不正と殘忍とが交つてゐたので、折から極度に私を怨んでゐた公衆ですら、一齊に憤慨せずにはゐなかつた。前晩私を侮辱した人達も、翌日は芝居の中で大聲出して、斯うして十分の資格があり、而も二人分を要求して然るべき作者から、

その入場權を剝ぎ取るのは無恥だと言つて叱鳴つた。「他人の事には正義を尊ぶ」といふ伊太利亞の諺は實に至言だ。

これに對して、私の採るべき手段は一つしかなかつた、卽ち對手が私の作物の極まつた報酬を奪つたのだから、私はその作物を取り戻すのである。此の件で、オペラ座の役員であるアルジャンソン氏へ手紙を書き、ぐうの音も出せないやうな覺書をも添へて送つたが、兩方ともその儘返事も效果も無しに終つた。此の不正漢の沈默は、私の癪に障つた。そして豫ねて私が彼の人物や腕前に對して抱いてゐた甚だ安つぽい敬意を深める足しにはならなかつた。斯ういふ譯でオペラ座は、私が作物を讓つた報酬を横奪つて置きながら、私の作物を取り込んで了つたのである。弱者が强者に對してすれば、竊盜と呼ばれる、强者が弱者に對してすれば、唯他人の物を自分の物にした、といふ丈である。

此の作物の金錢上の所得は、他の作者の手に入る四分の一にも當らなかつたか、それでも數年間の生計を支へ、不景氣續きの樂譜謄寫の埋合せをするのには十分だつた。王からは一千圓、ポンパヅウル夫人自身がコランの役に扮した、ベル・ヴュウでの開演(こ)に對して、夫人から五百圓、オペラ座から五百圓、それに刻版料としてピソから二百圓を貰つた。で、わづか五六週間の勞作に過ぎなかつたこの幕間の曲は、私が不幸にも出會ひ、莫迦な事をしたにも拘らず、その後二十年間の熟慮と三年間の勞作を犧牲にした「エミル」から得た位の金を私に寄越した。併し私は此の曲から得た金錢上の慰安を、一方その曲から得た無限の心痛で使ひ果して了つた、といふのは

此の曲が、遙か後に爆發した陰密な嫉妬心の萌芽となつたからである。此の作の成功後は、グリムにもヂドロにも、その外知合の文藝家の何人にも、今迄と打つて變つて、懇親と、率直と、私に會ふ愉快とを認めることが出來なくなつた。私が男爵邸に現れると、すぐ會話が普遍的でなくなつた。小い組々で割據して、窃々と囁き合つてゐるので、私は話對手もなく獨法師で居た。私は長いこと此の不快な放棄を堪へ忍んでゐた。それにおとなしくて親切な男爵夫人が、いつも善く私を待遇してくれるので、堪へ得られる限りその夫の不作法を我慢してゐた。が、或る日彼は何の理由も口實もなしに、私に突つかかつて來て餘り亂暴なので、到頭私はその無法な仕打のために、二度と此の邸に足を入れない決心で出て行つた。その場に居たヂドロは一言も口を利かなかつた。もう一人のマルジャンシは、その後、この時の私の出方の甚だ穩當なのに敬服したといふことを時々私に話した。そんな事件があつたにも拘らず、私は始終男爵や男爵家のことを尊重して話してゐた。だが男爵の方は、いつも私のことでは侮辱と輕蔑との一點張りで、私を「給仕」としか呼んだことはなかつた。併し私が、男爵や男爵の氣に入つてゐる誰かに向つて、聊かでも失敬な事があつたと誣ひる事はさすがに出來なかつた。これで終に私の豫言と杞憂とが適中したのである。私が本を書く、立派な本を書くといふことは、謂はゆる友人達も見逃したであらうと思つた、此の名譽は彼等も萬更覺えの無い事で無かつたからである。併し、私がオペラを作つた、而もそのオペラが華々しい成功を收めたといふことは、彼等の默つてゐられないことだつた。それもその筈で、彼等の中には誰とてそんな眞似の出來さうな者も無く、そんな名譽を望むことが

出來なかつたからである。唯一人デュクロだけは、さうした嫉妬と離れて、益々私に心を傾けて來るやうにさへ見えた。彼は私をキノオ孃(一)に紹介してくれた。此の家で私は、オルバック邸には殆ど無かつた尊敬と禮儀と愛撫とを見出したのであつた。

(一) セエヴルに近くポンパヅウル夫人の遺營した美しい別莊。此處での開演は一七五三年三月四日のこと。この時「村の卜者」の「陛下の特別のお思召による」特製本が出版せられた。

(二) Jeanne Françoise Quinault. 元コメヂイ・フランセエズの女優。そのサロンは巴里でも殊に文藝的なものとして知られてゐた。一七〇一―一八三。

「村の卜者」がオペラ座で開演されてゐる間に、コメヂイ・フランセエズの方にもその作者の問題があつた。尤も都合の悪いことではなかつた。私の「ナルシス」の曲が七八年にもなるのに、未だ伊太利亞座で實演の運びに至らなかつたので、私はその座の俳優の佛蘭西語で演るまづい演技を厭に思つて、寧そ佛蘭西座で引き受けて貰ひたく思つて居た。その事を前から知合のラ・ヌウといふ喜劇俳優に話した。ラ・ヌウは誰も知る、立派な人であり、作者でもあつた。「ナルシス」は彼の意に叶つたので、彼は匿名で上演することを引受け、その間に無料入場券をも取つてくれた。私は他の二座よりも始終佛蘭西座を贔屓にしてゐたので、非常に嬉しかつた。「ナルシス」は賞讃のうちに引取られ、作者を知らせずに演出された(一)。併し私は、俳優やその他の人達も、作者の名を知らないではあるまいと信じてゐた。ゴサン孃とグランヴァル孃とが色女役を勤めた。私の見た所では、全體の理解が足りなかつたやうだが、全で物になつてゐなかつたとも云へなかつた。それにしてもは觀私蒙の寛大なのに驚き且感じた。初から終まで靜肅に聽き入り、

二回も繰り返して演ずるのを、ちつとも退屈らしい風もせずに辛抱してくれたのである。肝腎の私は、一回目で閉口して了つて、終まで辛抱が出來なくなり、小屋を出てカフェエ・ド・プロコップ(二)へ飛び込んだ。此處にはやはり退屈紛れに、ブワシイや外の人達も來てゐた。その店で私は「私が悪かつたのです」と叫んで、作者の自分であつたことを謙遜して、むしろ得意に自白し、誰もが考へてゐた通りに話をした。失敗に終つた駄作の作者が、斯う打明けて自白したといふことは、強く人々を感嘆させ、自分にもそれ程苦しく感じなかつた。尚又それを自白した剛氣のために自尊心が償はれたやうにさへ感じた。そしてかういふ場合には、沈默してくだらなく含羞んでゐるよりも、打ち明けて了ふ方が氣持が大きいものだと思ふ。けれども、この曲は舞臺に載せて氣の利かない作だが、讀み物にはなりさうだから、私はそれを印刷させた。そしてその序文―これは私のいい文章の一つだ――の中で、例の私の主義を今迄より進んで、露骨に述べ始めた。

(一) 一七五二年十二月十八日のこと。

(二) Café de Procope. 一六八九年シチリヤ人プロコピイヨ Francesco Procopio が巴里の Fossés-Saint-Germain 街(現時の rue de l'Ancienne-Comédie) に創業したもので、十八世紀の著名な文士連のクラブになつてゐた。

私は程無く、此の主義をもつと重大な著作の中で展開させる機會を得た。それは此の一七五三年だつたと思ふが、ヂジョンのアカデミイから「人間の不平等の起因」といふ題が出たからである。この大問題に感じたにつけても、よくアカデミイが斯ういふ問題を出したものと驚かされた。けれども、アカデミイに此の勇氣がある以上、私にも之を論ずる勇氣がある筈である。で、それ

に着手した。

綴りこの大問題を考察するために、一週間ばかりサン・ジェルマンへ旅行に出掛けた。同行はテレエズと氣爽な宿の主婦と、その友達の一人とであつた。今度の遠足も私の生涯中の最も愉快なものの一つに數へられる。天氣は上々だつた。三人の氣爽な女達は、一切の面倒から入費までを受持つてくれた。テレエズは友達と樂しんでゐた。私も心がかりの無いままに、食事の度ごとに羽目をはづして笑ひ興じた。それ以外の時間には森の中に入り浸つて、其處に原始時代の面影を探つたり見出したりして、その歴史を得意氣に辿つた。私は人間のはかない虚僞を微塵に碎いた。私は大膽に人間の本性を赤裸々に曝け出し、その本性を不具にした「時」と「物」との過程を追究し、又自然人と人間人とを對照することに依つて、世に謂はゆる「完全」の中に人間の不幸の眞因が在ることを、彼等に示さうとした。私の心は、斯ういふ崇高な瞑想に高調して、神の間近に昇つて行つた。そしてその位置から、自分の同胞が彼等の偏執か、錯誤か、不幸か、罪惡かの盲目な道を追つて行くのを見て、私は彼等に聞えないやうな微かな聲で斯う叫んだ。

「絶えず自然に不滿を抱いてゐる愚人どもよ、汝等の一切の不幸は、皆汝等自身から來るものだといふことを知れ。」

斯ういふ瞑想から、遂に「不平等論」が生れた。これは他の私のどの作よりもヂドロに好かれたもので、又此の作に對する彼の助言は、一番役に立つた（原註。私がこの論文を書いてゐた時分には、ヂドロとグリムとの大陰謀のことを未だ少しも疑ぐつてゐなかつた。さもなかつたら、

如何にヂドロが私の信頼を濫用して、私の書く物に、あんな無情な調子や、あんな陰險な氣分を吹き込んだかを看破することは造作も無かつたのである。現に彼が私を左右しなくなつてからは、然ういふ調子や氣分は跡方もなくなつた。哲學者が不遇者の愁訴を聞いて平氣で居られるやうに、耳を塞いで議論する條(一)は、彼一流のものである。未だその他に然ういふのでもつと酷い奴を寄越したが、それは私も採用する氣になれなかつた。とはいへ然ういふ陰險な氣質も、ヴァンセヌの牢獄から得來つたのであらう、彼の「クレエルヴァル」にもそれが少からず見出されるのだと、私は解釋して、其處に少しの惡意も含まれてゐるものとは、全で思つたことはなかつた)。併し此の論文を理解し得る讀者は、殆ど歐羅巴中になかつた。又その中に何とか言つて見ようといふやうな者も無かつた。これを書いたのは、懸賞に應ずる爲たつたのだから、送ることは送つたが、固より當選する氣遣ひはなく、又何處のアカデミイでも、此の種のものを懸賞文にするのは本旨でないといふことは、十分承知の上であつた(二)。

(一)「不平等論」第一部。

(二) この論文に當選したのはタルベエル Abbé Talbert といふ人であつた。ルソオの「不平等論」はヂジョンのアカデミイの懸賞論題「人間の不平等の起因は何ぞ、且それは自然法の承認するものなりや否や *Quelle est l'origine de l'inégalité parmi les hommes et si elle est autorisée par la loi naturelle?*」に答へたもので、先の「科學藝術論」よりも數倍の長さのものであり、内容もそれより遙かに合理的な、組織的のもので、「民約論」と併せて彼の社會思想の全貌を窺ふべきものである。ルソオの全部が此一篇の中にあると云つた批評家もある。彼の意は、自然の儘の狀態に在つては不平等といふことは殆ど感知されない。この狀態に於ける人間は有徳善良で、平和と幸福とが普遍である。それは所有權といふことも知らず、尊敬、輕蔑といふことをも知らないからである。この理想の狀態を「懸賞するもの

は社會組織で、これからあらゆる不平等と惡とが生れて來るといふのである。換言すれば、眞純と無習と及び非社會性、これが人類幸福の眞條件である。卽ち彼の「エミル」も「新エロイイズ」も、その盛る所の思想は「不平等論」の思想の外の何物でもなく、唯自然に還ることを主張するのである。啓蒙時代の主知的要素が、その時代の大立者であるルソオによつて却つて排擊されてゐるのは異觀である。

この遠足とこの仕事とは、私の氣分と健康との上に大へんな效果があつた。もう何年も前から尿閉を患つて、醫者の手に身體を委せて了つたが、醫者は病氣を治してくれないで、體力を減らし、氣分を壞した。サン・ジェルマンから歸つた後は、體力が大分恢復して、氣分がぐつと良くなつた。私は此の方針に從ふことにして、全快しようと死んで了はうと、醫藥は斷じて用ひないことにし、それに永久の別れを告げて、出られない時はぢつと家に籠城し、元氣が良くなればすぐに外へ出るやうにして、その日その日を過し始めた。見得坊連にまじつて巴里で生活する事は、ちつとも私に面白くなかつた。文藝家連の陰險手段、面よごしな嗤み合、誠意の無い著述、社交界での利け者氣取り、いづれも私にはたまらないもので、反感を起させた。友人間の交際にも、柔和や快濶や率直が見出せなかつた。で、此の亂雜な生活にうんざりして了つて、私は田舍に住んでみたくて堪らなくなり出した。けれども自分の職業がさうさせてくれないので、せめても閑な時間丈を田舍に行つて過した。幾月かの間、初めの中靈感が濟むと、唯一人ブロニュの森へ散歩に出掛けて、色々な作劇の動を默想し、夜にならなくては歸つて來なかつた。

一七五四―一七五六。

當時私がこの上もなく親しくしてゐたゴフクウルが、用事の都合で是非ジュネエヴへ行かなければならなくなつたので、私をも誘つてくれた。私は同意した。未だ身體の工合がよくなかつたので、テレエズの世話が要つた。彼女が同行し、母親は留守番といふことに極まつた。支度が出來て三人で出發したのが一七五四年の六月一日であつた。

私はこの旅行を、新しい經驗の時期として書かなくてはならない。私が四十二歲の今日まで、少しも遠慮せず又少しの不都合もなく賴つて來た、私の持前の人を全く信賴する性質に傷つけられたからである。私達は一臺の安馬車を同じ馬に牽かせて、每日少しづつ行程を進めた。私は降りて歩くことがあつた。道の半分程來たと思ふ頃、テレエズがゴフクウルと二人で乘つてゐることをひどく厭がつた。彼女が留めるのに私が降りると、彼女も降りて歩いた。その度に私が氣儘を叱つて、强ひて彼女に反對したために、彼女も到頭その譯を言はなければならないことになつた。それを聞いて私は夢のやうに思つて喫驚した。もう六十といふ歲を越して、足腰も利かず、したい三昧の歡樂に飽きた親友のゴフクウルが、自分の友人の物になつてゐる、もう美しくも若くも無い女を、出發の初から、一生懸命墮落させようとしたと聽いたのである。それも最も下劣な、無恥な手段に依つたので、甚だしきは財布を見せつけたり、猥褻な本を讀んで聽かせたり、その中に澤山ある淫らな畫を見せたりして、彼女を動かさうとしたものだ。一度などは、テレエズが怒つて、その穢らはしい本を馬車の戸口から取つて投つたこともあつた。それに最初の日、

私が劇しい頭痛がして、夕食もせずに寢床に這入つたので、私が伴侶をも自分をも任せて置いた善人のしわざとも思はれない、獅々か山羊にもふさはしいやうな誘惑と技巧とに、その差向ひの全時間を利用したといふことを知つた。何といふ驚くべきことだ！　私に取つて何といふ新しい心痛だ！　今まで友情といへば、必とあらゆる懷かしい、尊い感情と一つになつてゐて、その魅力がそれ等のもので出來てゐるのだとばかり思つてゐた私は、生れて初めて、それと輕蔑とを結びつけ、又自分の愛し愛されてゐると思つた人から、自分の信頼と敬重とを取り去らなければならなくなつたことに氣附いた。この見下げた男は、その醜行を私に隱してゐた。テレエズを庇ふ爲には、私も輕蔑の樣子を彼に隱し、彼の知つてはならない私の感情を　胸の底に祕めて置くより仕方がなかつた。優しい聖い友情の幻影よ、ゴフクウルが初めて汝のヴェエルを私の眼から外して了つた。その後再び懸からうとするヴェエルを、如何に多くの殘忍な手が妨げたことだらう。

里昂でゴフクウルと別れた、母（ママン）の傍を通るのに、顏も見せずに行つて了ふことが出來なくて、サヴワの方へ廻るためだつた。私は再び母（ママン）に遇つた…。噫、何たるその境涯だらう、何たる淪落だらう。昔の彼女の美點が、どの位殘つてゐるのか。ポンヴェエル師の紹介してくれた、あの輝やかしかつたヴァラン夫人は果して此の女だらうか。私の胸はどんなに悲痛したらう。彼女の執るべき唯一の手段は、此の土地を去ることだと私は思つた。幾度となく手紙で勸めた通り、彼女の生涯を幸福にするために、自分もテレエズもその生涯を捧げたいのだから、私と平和に暮しに來て欲しいと熱心に言つて見たけれど、何の效（かい）もなかつた。例の年金は、几帳面に支給されて

はゐたが、永い間彼女の身に附くといふことがなかつたのに、彼女はその金に心が殘つて私の勸めを肯かなかつた。それでも私は自分の財布から、僅かの金を出して與へた。その金は一錢でも彼女の自由にならないのだといふことが、はつきり分つてゐなかつたら、もつと多く與へるのが當然であり、又然うも出來たのであつた。私がジュネエヴに滯在中、彼女はシャブレへ旅行して、私に會ひにグランジュ・カナルまで來た。彼女は旅費に窮してゐた。私はそれ丈の金を持ち合せてゐなかつたが、一時間の後、テレエズに持たせてやつた。可憐な母（ママン）よ。もつと彼女の心の特質を話させて欲しい。彼女の最後の寶玉として、指環が唯一つ殘つてゐた。彼女はそれを自分の指から拔き取つて、テレエズの指に嵌めてやつた。それをテレエズは直ぐに彼女の指に戻し、その尊い手に吻を接けて、その上に涙を流した。噫、この時こそ私の負債を還すべき時であつたのだ。凡てを擲つて彼女に隨ひ、最後の日まで彼女に附添つて、如何なる運命をも彼女と共にしなければならなかつたのだ。が、その孰れをも私はしなかつた。他の愛着に氣を取られてゐた私は、彼女に對する愛着が役に立ちさうもなかつた爲に、それを弱めたやうに思つた。私は彼女の身の上を悲しんだが、彼女に隨はなかつた。私の一生の間に感じた悔恨の中で、一番强く、一番消え難いのはこれだ。それから後、恐ろしい責苦の絕え間がなかつたのも私には至當な罰だつた。これで私の忘恩が贖はれたいものだ。忘恩は私の行爲の中には在つたが、私の心までが忘恩者のそれであつたら、斯うまで心は責められはしない。

私は巴里を發つ前に「不平等論」の獻呈文を概略書いて置いた。それをシャンベリで書き上げ

て、日附も其處からにした。いろんな屁理窟を避けるために、佛蘭西や、ジュネエヴからの日附にしない方がよからうと思つたからである(一)。ジュネエヴに着くと、私は共和熱で夢中になつて了つた。私が此處へ來たのもそれに牽き附けられたのであつた。此の熱情は、此の土地で受けた歡迎で高まつた。到る處で大持てにちやほやされたので、私は全く愛國熱に浮かされて了つた。そして、私が祖先と異つた宗教を奉じてゐるばかりに、此の國の公民になれないのが恥かしくなつて、公然元のとほり復宗しようと決心した。私は斯ういふことを考へた。福音書はあらゆる基督教徒に對して同一のものであり、教理の根柢も、みんな自分に解りもしない事を詮議立てするから多岐になるのである。そして、宗派やこの不可解な教理を定めるのは、どこの國でも皆主權者のみがすることである。從つて法律の定めた教理を是認し、その宗派に從ふのは、公民たるものの義務であると。辭典學者達との往來は、私の信念を動かすどころでなく、論爭や黨派が天性嫌ひなところから、反つて一層此の念を堅くした。人間と宇宙との研究は、窮竟因と、それ等を支配する大精神とを、到る處で私に見せた。私は聖書殊に福音書を數年前から熱心に讀んで、本當に理解も出來ない手合が、基督に下す淺薄な莫迦々々しい解釋を蔑視してゐた。畢竟哲學が、宗教の本質に私を結びつけて、人間が此の本質を蔽うた煩瑣な形式から私を引き離して了つたのである。私は理性のある人間が基督信者になるのに二途ある道理はないと信ずると同時に、すべての儀式教義のことは、その國々の法律の權能にあるのだといふことを信じた。是くらゐ道理ある、社交的な、平和な、――そしてあの殘忍な迫害を私に齎らした――此の主義の結論は、若し

私が公民になりたければ、新教に改宗して、祖國が定めた教派に復せねばならぬといふことに歸着した。私は然う決心して、進んで自分の居た郊外の法區の牧師の説教をも聽いた。唯長老會にだけは出ないでもいいやうにして欲しいものだと思つてゐた。けれども此の事は教規ではやかましかつた。私の爲にそれを抵げて、別に私の信仰告白を聽き取る爲に、五六名の委員が擧げられた。ところが困つたことには、私の知合のおとなしいペルドリョオ宣教師が、思ひ立つて、今度の小集會で私の演説を聽くのを、みんな樂みにしてゐると言つて來た。この希望に私はぎよつとして、前から準備して置いた短い演説を、夜晝なしに三週間も稽古したが、いざとなると全で目眩つて、一言も物が言へず、丁度一番愚鈍な小學兒童といふ役廻りを勤めた。委員達が私に話し掛けても、唯、はい、はいと莫迦のやうな返辭をする。まづそんなことで黑鑒式にも出られ、公民權を恢復することが出來た(二)。私は公民と市民とだけで組織する守備兵の中に加へられ、又臨時市會に出て市の執行委員ミュサアルから誓詞を受けた。市會、長老會の此の際私に寄せられた好意、吏員、僧侶、公民の懇篤な仕向にひどく私は感じた。それ故ドリュク(三)といふ親切者に、しきりと引き留められて、私自身の好みまでが手傳つて、巴里へはもう歸らうと思はなくなつた。若し歸れば、家庭を解散し、些細な用件を整理し、テレエズの兩親を始末するか生計の立つやうにしてやつて、直ぐテレエズと此のジュネエヴへ引き返して來て、此處で餘生を送りたいと思つた。

(一) 獻呈は「ジュネエヴ共和國へ」、日附は「一七五四年六月十二日、シャンベリにて」とある。

(二) 一七五四年七月二十九日。
(三) Jacques-François De Luc. ジュネエヴの時計師で公吏。一六九八—一七八〇。

斯う決心が出來て、愈々出發するまでの間、私は大切な用を拋棄つて、唯友人達と遊んでゐた。色々の樂みをした中で、一番面白かつたのは、ドリュクの父親と、その嫁と、二人の息子と、それにテレエズとで、端艇で湖水廻りをした事であつた。晴れた空の下で、まる一週間この舟遊びをして暮した。湖水の向う岸の撲たれるやうな景色が、鮮明な印象となつて私に殘つた。で、何年か後に、私は「新エロイイズ」の中でそれを描寫した。

このドリュク一家の人達との外に、ジュネエヴで親しくした主な人を擧げれば、ヴェルヌといふ年若な宣教師は、巴里でも知つてゐた人で、後には默目になつて了つたが、私は見込のある人と思つてゐた。ペルドリヨオ氏は、當時田舍の牧師だつたが、今日では文學の教授をしてゐる。此の人は其の後、私を避けた方がいゝと考へてゐたが、私に取つてはあの懷かしい暖かな會合が、いつも殘惜しく思はれる。ジャラベエル氏は初め物理學の教授で、後には市の議員や、執行委員にもなつた。私は此の人に「不平等論」を、獻呈文だけ拔いて讀んで聽かせたら、さも氣に入つた風に見えた。リュラン教授とは其の人のなくなる迄手紙の往復を續けた。この人は又、圖書館の書籍の購入を私に賴んだことがあつた。ヴェルネ教授には、私の方から敬愛と信賴とを示してゐたのに、矢張世間並に私に背くやうになつた。神學者でも何物かに打たれるものなら、私の然うした心持にも打たれない譯はなかつたのだ。シャプイはゴフクウルの番頭で、相續人でもあつ

たが、ゴフクウルを逐ひ出さうとして忽ち自分が逐ひ出されて了つた。マルセ・ド・ムジエエルは私の父の舊友で、私にも親しくしてくれたが、祖國のために盡した後、戲曲家になつたり、二百議員(二)の候補者になつて主義を變じたりした爲に、死後はいい笑ひ者になつた。が多勢の中で、特に私が望みを囑してゐたのは、ムルツウ(三)だつた。その才能と情熱の豐かな機智とによつて末賴もしい青年で、私は始終愛してやつてゐたのだ。私への仕向には、ともすると訝しい事があり、又私の一番殘忍な敵と關係があつたけれど、それにも拘らず、私は何時か自分の名譽の辯護人、その親友の復讐者となるべき人と思はずにゐられない。

(一) 當時のジュネエヴ議會に小會、大會、總會等の別がある。その中大會(grand conseil)の議員數が二百五十名だつたから云ふ。
(二) Paul Moulton. 一七二五年モンペリエに生れ、一七八五年ジュネエヴ附近のクワンサン(Coinsain)に歿。一七五四年には新敎の宣敎師となり、一七五五年にはジュネエヴの公民に加はつた。後に「懺悔錄」原稿の保管者。

こんな樂みの間でも、私は單獨の散歩の興味と習慣とを失はなかつた。時々湖水の岸に沿つて、隨分遠くまで行つたこともあつた。然ういふ時にも、仕事に慣れた私の頭は、決してぼんやりしてゐなかつた。私は腹案中の「制度論」を練つた。それはあとで話をする。「ヴァレ州の歷史」や散文劇の筋も考へた。此の劇はつまりリュクレエスを主題としたもので、佛蘭西の何處の劇場にも上演の見込がなくなつた時でも、——私はこの不幸な女を更に思ひ切つて舞臺に立たせはしたが——私は尙反對者を屈服させる望みは失はないでゐた。同じ頃、タシットを研究し出して、その「歷史」の第一卷を飜譯した。これは草稿の中に入つてゐる。

ジュネエヴに四箇月間滯在の後、私は十月に巴里へ歸つて來た。道でゴフクウルと出會はないやうに、里昂を通るのを避けた。ジュネエヴへ還るのは、來春でよいことになつてゐたので、多中は自分の習慣と仕事とを始めた。仕事の主なものは、「不平等論」の校正をすることだつた。これは今度ジュネエヴで知合になつたレイといふ書店の手で、和蘭で印刷させることになつたのである。此の書物はジュネエヴ共和國に獻呈したものであり、且この獻呈が、その議會に喜ばれないかも知れなかつたので、まづジュネエヴでの反響を見た上で、其處へ歸りたいと思つた。その結果は面白くなかつた。至純な愛國の情から出たその獻呈も、唯議會の中に敵を作り、市民階級の中に嫉視者を喚び出したに過ぎなかつた。その時の首席執行委員シュエ氏は、鄭重ではあるが冷淡な手紙を寄越した。それは草稿の中の、書翰東Aの第三號に入つてゐる。個人としてドリュクやジャラベエルなどからも挨拶狀を受け取つたが、唯それ丈の事だつた。ジュネエヴ人は誰一人として、此の著作に感じられる、熱情の眞の心持を汲んでくれる者はなかつた。その冷々たる有樣を見て憤慨しない者はなかつた。斯ういふことがあつた。或る時クリシのデユパン夫人の邸で、ジュネエヴ共和國の辯理公使クロムランや、メラン氏等と會食してゐると、メラン氏(一)はその最中に、議會は宜しく此の書の著者に對して報酬と名譽とを拂ふべきで、それを怠るのは、議會自ら體面を損ふものだと言ひ出した。クロムラン公使は腹の底の知れない、下劣な小人で、私を前に置いて何とも返辭が出來なかつた。そして唯恐ろしい澁面をつくつてゐるので、夫人はくすくす笑つてゐた。この著作から得た私の唯一の利益は、心の滿足を除いては、唯公民の名義丈

であつた。此の名義は、最初友人達に貰つて、それに倣つた公衆から又貰つたのだが、その後私がその資格を全うし過ぎたといふので、それを失つて了つた(二)。

(一) デユパン夫人の甥。

(二) 彼の著書「エミル」がジュネエヴで詰せられてから、一七六三年三月に、ルソオがジュネエヴの公民權を拋棄することが後に詳しく出る。それ故、彼はここの本文で、祖國の人から不當な仕向をされて此の公民權を失ふに至つたと言つてゐるのである。

作の不結果は、とはいへ、私のジュネエヴ隱遁を實行するのを止めさせなかつたのだが、もつと力强い原因がそれに合流して來た。エピネ夫人がシュヴレットの別莊に翌面が無いので、澤山な金をかけて建增しをした。或る日私が夫人に連れられて工事を見に行つた時、更に其處から四半里も先の方へ行くと、モンモランシの森續きの公園の貯水池に出た。其處には見事な蔬菜園があり、又仙居(エルミタアジュ)と名のついた荒廢した小さな建物があつた。ジュネエヴへの旅行の前、私は始めて此のひつそりして氣持のよささうな住居を見て、心を撲たれた。私はうつとりして、

「やあ、奥さん。何て好い住居でせう。私には誂向きの隱れ家だ。」

我知らず斯う言つた。エピネ夫人は餘り私の言葉をはずませなかつた。ところが今度二度目に此處へ來て見て驚いたのは、先の舊びた破家(あばらや)が、すつかり見違へるほど新しい、間取のいゝ家に變つてゐて、三人位の小家族には、如何にも都合がよささうだつた。エピネ夫人が無言で、別莊の方の材料と職人を幾らか此方へ使つて　金は餘計出さずに此の普請をさせたのであつた。慧い

た私の顏を夫人は見て、

「さあ、貴下の隱れ家ですよ。此處をお見立てになつたのは貴下で、これをお渡ししますのは私の微志で御座います。どうか私を見棄てようなんて罪な考はよして下さいましな。」

私はこの時ぐらゐ、强く又快く心の動かされた覺えがない。私は女友の情深い手を涙で濡した。そして私は此の時直ぐに打ち負かされては了はなかつたが、それでも無上に心が動いた。夫人は斷わられては困るといふので、是非その意に從はせようとして、無暗に急き立つて、色々の手段を運らし、色々の人を使ひ、とう〳〵、テレエズ母子を取り込んで、私の決心に打ち克つた。私は祖國に住居することを思ひ切つて、此の仙居に落ち着く氣になり、然う約束した。夫人は造作の乾く間に、家具の類をあれこれと取り揃へて、來春私の引つ越す準備をして了つた。

もう一つ、少からず此の決心を助けたのは、ヴォルテエルがジュネエヴの郊外に住居を構へたことだつた(二)。私は斯う考へた。此奴此處で改革をやるに違ひない。私は前に巴里から逐つ立てられた、あの氣風や習俗を、自分の鄕里へ行つて又々見出す丈のことだ、さうなれば、絕えず戰鬪を續けなくてはなるまい。そして自分は、厭な厭な衒學家か、卑怯な、不都合な公民になるより外に取るべき途がないのだと。今度の自分の著作に對してヴォルテエルが手紙を寄越したので、幸ひ私は自分の掛念をそれとなく返事の中へ書き込むことができた。其の返事から生じた結果は、果してその掛念を確かめた。其の時から私はジュネエヴを駄目なものとして了つた。實際その通りだつた。若し私が己惚れてでもゐたら、恐らく暴風にぶつかりに行くやうなものだつたらう。しかし、孤獨で臆病で口下手な私が、傲慢な、裕福な、黑幕のついてゐる、辯舌の立派な、それ

仙　居

にもう婦人や青年連に偶像視されてゐる人間と對抗して何が出來るものか。私は自分の勇氣を、無益に危險に曝すことを恐れた。私は唯平和な性質と、安易を好む心の命に從つた。若しそれが私を欺いたのだとすれば、今でも尙同じ事で私は欺かれてゐる譯だ。ジュネエヴに隱遁したからとて、自分の身には大した不幸を招かなかつたかも知れない。が、熱烈な愛鄕心を傾け盡したところで、自國の爲に有益な大きな事が出來たかどうかは疑問である。

（一）一七五五年春、ヴォルテエル、ジュネエヴの近郊に居をトして之をレ・デリス Les Délices と命名した。これにつづいて得たロザヌ附近モンリヨンの「冬宮」に對して、レ・デリスを「夏宮」とも稱した。ヴォルテエルの名と離れない、有名なフエルネに居を定めたのは、此の以後數年を經ての事である。

それと同じ時分に、トロンシャンもジュネエヴに落着いたが、少し後に巴里へぼろ儲けをしに來て、うんと金を浚つて行つた。彼が來た時、ジョクウル士爵と連れて、私に會ひに來た。エピネ夫人は何か內證で頻りに彼に相談したがつてゐたが、多忙でその暇がなかつた。夫人は私に賴んで來た。私はトロンシャンを夫人の邸に連れて行つた。斯うして私の力で二人の交際が始まり、後には私を犧牲にして段々懇意になつて行つた。これが何時でも私の運命なのである。自分の別別の友人二人を互に近づけると直ぐ、その二人は必と私に反抗して結び附かない事はなかつたのである。その頃からトロンシャン家の者等は、祖國を潰す陰謀を企んでゐたのだから、彼等は皆深く私を憎むべきだつたらうに、この醫者丈は永く私に好意を寄せてゐた。ジュネエヴへ歸つてからも、彼は私に手紙までくれて、そこの圖書館の名譽館員にならないかと言つて寄越した。併